

---

# 幻妖帝国～グリウスの章・青き黎明の灯火

暁さくや

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

幻妖帝国～グリウスの章・青き黎明の灯火

### 【Nコード】

N5319D

### 【作者名】

暁さくや

### 【あらすじ】

宿命に挑む二人の青年の物語です。妖かしの力で支配された帝国・シエバ。運命に導かれて集う者達 戦いの末に、二人の得たものとは……

序章・禍き妖獣の国（前書き）

い。妖獣が登場しますので、ホラー系の描写が苦手な方はご注意ください

## 序章・禍き妖獣の国

山裾に日が隠れ、余光も潰えた頃

「助けてくれっ！」

裏返った声を張り上げながら、一人の男が馬に乗って疾駆してきた。

必死の形相で剥かれた目は血走っている。その目は辺りの何物をも映してはいない様子だ。手綱を握り締め、白い歯を剥き、ただ、ひたすらに疾走している。

両脇に畑の広がる一本道である。

辺りには民家もない。

畑に実った果実の甘い臭いと草の香りだけが漂っている。

男は振り向いて、後ろを確認した。

いる

ざっと十匹だ。

飛んでいる。馬の脚にも負けぬ速さだ。

鳥である。一見して、雀くらいの大きさに見えた。

が、あのつぶらな瞳を持つ薄茶色をした小さな鳥とは、似ても似つかぬ化け物だ。

翼の先には、弧を描く乳白色の牙とも見える爪がついている。

足の先には三本の長い爪が、今にも皮膚を抉り取る鋭さでカツと開いていた。

体は艶やかに月光を反す黒。

目は、闇の中で唐紅に光る。それが人間の顔についている。人間のような筋の通った鼻がついていて、ちゃんと鼻腔も二つある。そり立った耳も二つある。頭皮に毛はない。

ただ口だけは人にあらず、肉食獣の牙を持っていた。

分かりやすく言うならば、体が鳥で、顔が人間なのだ。

「わああっ！」

男は振り絞るような悲鳴を上げた。鳥の化け物は時折羽ばたいて馬の尻を突く。そのたびに馬は嘶き、ますます疾走していった。馬が大きく嘶いた瞬間、男は落馬し、地面に叩きつけられ転がった。

それを見計らったかのように、一斉に鳥の化け物達が馬に襲いかかる。

思わず耳を塞ぎたくなるような馬の奇声が辺りに響き渡った。が、それも長い間ではない。やがて、全身の毛がそそけ立つような肉を食む音だけが、虫達の鳴く声に混じって静寂を破るだけとなった。

男は馬が化け物に喰われていく様子を見ながら、尻餅を付いたままじりじりと後退っていった。

すぐ先にある集落から、幾人かの足音が聞こえてきた。悲鳴を聞きつけた村人達が松明を手に駆けつけたのだ。

しかし、男が安堵の溜息を吐く間もなく、鳥の化け物どもは電光石火の勢いで馬を喰らい、血で生々しく汚れた口と紅い目をぎよるりと男に向けた。

男は尻餅を付いたまま、硬直したように身じろぎ一つせず、目をきつく閉じた。

その時。

ひゅっ

と、空気を切り裂く音がした。

ごろり、と、男の足元に紅い目のついた顔が転がる。

男が恐る恐る目を開けると、黒いフードのついた外套を羽織った者が、闇に鈍く光る長剣を振り下ろしたところだった。

「生きてるか、あんた」

言いながら、今度は下から剣を振り上げる。

次に襲い掛かってきた化け物が空を切る音とともに両断された。

男が何かを言う前に、化け物は次々と切り落とされ、道に落ちて、まるで火に水をかけたような「ジュッ」という音を立てて黒い塵に変わっていく。

男は急に両脇から手を差し込まれ、立たされた。

「あなたは早くお逃げなさい。あちらの火のほうへ」

ゆったりと落ち着いた声音が、また別の黒い外套を羽織る者から漏れ出でた。

言いが早いのか、その者も剣を抜きざま振り向いて、化け物を切り上げた。

「はい。」

あっという間に、十匹の化け物は、黒い塵と化した。

男は全身から骨を抜き取られたように力を失って、また尻餅を付いていた。

「全く、金にならねえ事しちまった。ま、いいか。おい、行くぜ、

ウエル」

「はいはい」

二人のうちの一人がそう言っただけ振り向く。

口元に微かな笑を湛えていた。

闇の中に浮かぶ、白い肌に、浅紅色の唇。艶かしい女のようにも見えた。

二人は踵を返し、軽い足取りで、民家の方ではなく山の方に向かっていった。

「大丈夫か？」

ようやく駆け付けた村人が、男に声をかけた。

「あの人は、山に入ったのか？ こんな夜に……」

「妖獣をあっという間に……？」

男は、村人達の疑問を無視し、二人が消えていく山の方をぼんやり見ながら答えた。

「助かった」

道には、いくつかの黒いしみと、血の海の中に浮かび上がる白い骨と肉の残骸とが残された。

むせ返るような血腥い臭気が辺りに漂う。

ふいに、その残骸の陰から、小さな青い光が二つのぞいた。

それは、音も立てずに、山へと向かった二人の後を付け始めた。

## 第一章・運命の萌芽 1

「ないぞっ？」

仄暗い洞穴の中で、悲痛な叫び声が小さく木霊した。

洞穴の入り口で簾の様に垂れ下がる緑の草葉が、射し込む弱々しい曙光を遮っている。淡い光が、二つのごくごく薄い影を洞穴の岩壁に作り出していた。洞穴は平均的な成人男性が立ち上がったわずかに余裕がある高さで、奥行きと横幅は二人の人間が軽く手を伸ばせる程度の広さしかない。

周囲は岩石のような硬い性質のもので囲まれていた。

冷気が小さな洞穴を包み込み、足元から深々と冷えていくようである。

「ない、ないない、ないっ！」

影の一つが冷えた地面に四つん這いになり、掌を滑らすようにして辺りを隈なく探っていた。

「何が、ないのです？」

もう一つの影が、焦る者の苛立ちを倍増させるようなゆっくりとした口調で問うた。

「何が、って金に決まっているだろうが」

徐々に陽光が洞穴の中にも射し込み、影を照らしはじめた。相手の表情すらはつきりしなかった顔が照らし出されていく。

地面に四つん這いになっているのは、二十歳位の年若い青年・シヤオンだ。

黒く長い前髪で顔の左半分を隠している。小麦色の肌の右半分に覗く眉はひそめられ、形の良い唇は今にも悪口雑言を繰り出す用意がいつでも整っている。髪と目にはあけられている。髪と同じ右の黒い瞳には炯々とした光が見え隠れしていた。

「それは……困りましたね」

一方、鋭い視線を投げかけられたウエルは、悪びれるふうでもな

く、小首を傾げている。

黒髪のシャオンとは対照的な金髪の癖のない長い髪に碧眼、色白な赤子のような肌、見る者の目を必ずや奪い去る美貌の持ち主だ。浅紅色の唇、その両端をあげたかあげないか程のわずかさで持ち上げられた微かな笑み。達観したような顔は、ウエルの印象を茫洋とさせ、本心を見抜く事を困難にさせているようにも見えた。

全く困った様子のない相棒を横目に、シャオンは再び地面を這いつくばりだした。くまなく狭い洞穴の中を見渡すと、今度は体を起こして自分の懐をまさぐる。

次に立ち上がって、両手で胸の辺りから衣服を叩いてみたが、わずかに埃がたつただけだ。

「畜生、あいつだ。青い目のヤツだ。くそっ、眠り込んでしまってる間にやられたんだ」

「あいつ、とは、昨日拾った、あれですか？」

「他に何がいるってんだ」

シャオンは棘のある口調で言いながら脇に置いていた剣を手にして腰に挿し、黒い外套と荷物を背に担いだ。

「後を追うぞ」

「あれの？」

「あたりめえじゃねえかつ」

声を荒げて、いつまでも座ったままのウエルに向かって早口で咆えた。

「あのなあ、ウエル。あの金は、俺が、稼いだんだぜ。くつだらねえ姫様の護衛に長々と付き合って、やっと金十枚だ。しばらく遊んで暮らせんだぜ？　こんな仕事は滅多にねえ。黙ってられっかよ。何が何でも取り返す」

憤激したシャオンは最後の一言に一段と力をこめて言うと、入り口に垂れ下がる草を面倒くさそうに払い除けて、舌打ちしながら外に出た。

「まだ臭いがプンプンしてやがる」

顎を引いて左右に顔を動かし、辺りを探る。鼻翼がわずかにひくひくと動いた。

「くそつ、小さい動物だと思って油断したか」

膝ほどまでに生え伸びた雑草の中を幾分か進むと森の中だ。その先は左右に獣道が延びている。

右へ行けば昨日来た道、サナオ自治区。姫君を送り届けた地だ。

左はグリユック自治区。

「よし、グリユックの方だな。俺の鼻から逃げられると思うなよ」

左に顔を向けて剣の柄に手を添えたまま、昨日踏みならした雑草の上を大股で進んで行く。

ウエルも洞穴から顔を覗かせた。

「お待ちなさい、シャオン」

「うるせえ。俺はウエルがなんと言おうが、あの獣を探し出すんだよ」

言うが早いか、後ろを振り返りもせず、シャオンは森の中へと姿を消してしまった。

「全くしようのない人だ。お金と聞くと、目の色を変える……」

ウエルは深い溜息を吐きながら、同じく足元に置いていた剣を取り、荷を背に担ぐと洞穴から出た。

同時に小さく板を小突く様な音がする。

ウエルは確認するように洞穴を覗き込むと踵を返した。

## 第一章・運命の萌芽 2

ウエルとシャオンは臭いを辿りながら山を降り、山裾の森を抜け、夕刻になってようやくグリユツクの都グリウスに着いた。

ウエルは目映いばかりの黄金の長い髪を隠すようにフードを目深に被っている。背が高くなければ、ほっそりとすら見える身体は女性と見紛うばかりだ。シャオンは相変わらず黒髪で顔の左半分を隠していた。ともすれば風にあおられそうな髪を、神経質そうに左手で撫で付けて、わざと顔を隠そうと見えているように見える。

「何だこの人込みはっ？　ここで臭いが途切れてら。これだけ人がいちゃあ判りやしねえ」

二人が見た光景は、人々の肩が触れ合うほどにごった返した街道だったのだ。

街の中央、つまりは王城に続く街道には水路が通っている。人影が見えないのはその水路だけで、水路の左右を結ぶ小さな橋の上も行き交う人で溢れている。両脇には所狭しと露店が並び、街道を通って他国から運び込まれた珍しい商品や食料等が並べられていた。王都の中心まではまだ随分距離があるというのに、こんな街道の外れにも品物を買求める者や、商人達が集っている。

「これでは金泥棒を見つけないのは無理のようですよ。さすがのシャオンでも臭いを辿ることは出来ないでしょう？」

「畜生」

黒髪を無造作に掻いて腕組みし、シャオンはグリウスの中心へと続く街道に背を向けた。

グリユツクは海に面し、背後には山脈が連なる、天然の要害に守られた国だ。北西と南東を結ぶ街道の合流地点でもあり、産業の重要な要所ともなっている。

ヨウワ大陸の南部で最も大きな港があるのもグリユツクだ。海上からの物資も当然グリユツクの都グリウスに集まる。

もともと人口も領土の割には多い。

他国の人間の出入りも多い。

その為に徹底して出入りする人間を管理する関所が街道の両端と港に配置された。

これを統治してきたのはグリユック王家である。

他国との交易を優位に進める政治手腕を持つグリユック王家は、長年に渡ってこの地を治めてきた。天然の要害の存在もあり、他国の侵略を許さぬ強力な海軍率いるグリユックは、ヨウーワの中でも一目おかれる経済や軍事力の中心的存在となっていた。

が、十五年前、不可侵伝説を持つ王家は突如として滅ぼされ、現在はシェバ帝国の統治のもと、グリユック自治区として名を残しているにすぎない。

しかし、統治者が変わろうとも、そこに生きる者達が変わったわけではない。今も変わらずグリウスはヨウーワ南方の重要地点であり続けている。

「さあ、戻りませんか。私はここにいるのは気が進みません」

「戻ってどうすんだ？ 金だつて殆どねえし、もう食いもんもねえぞ。飢え死にすんのかよ？」

「だからといって、あの珍しい動物を探すことも出来ないでしょうに」

シャオンは、齒軋りした。ウエルの戻ろうという言葉にはない。脳裏に、可愛い泥棒の姿が過ぎさつた。

耳は兎ほどではないにしろ斜めに長く、顔は猫科の動物に似ている。目は薄い青のガラス玉のようで、体の大きさの割には手が長く、リスの様に柔らかで丸まった尻尾をしていた。両手の上に乗せるとはみ出しはするが十分乗っていられる大きさだった。

妖獣のような妖しい気もなかった。

ただ、言葉は理解しているような素振りではあった。

それでもまさか金を盗まれるとは考えてはいなかった。シャオンにとって、いま何よりも信頼のおけるもの、何においても重要なも

の、それが金だ。金さえあれば食うに困ることはない。それを奪われたとあっては、何としてでも仕返ししなくては腹の虫が収まりそうにない。

「あれは聖霊に近い位置にいる動物で、名をヴァルといいます」

ウエルは口調は落ち着き払っていた。フードから覗く表情は何時ものように微笑んで見える。本人は決して笑っているつもりはないらしい。

「知ってたのかよ、あれを」

「もちろんです。でもまさか、ヴァルを盗賊の手先に行っているとは考えもありませんでした。あれは利口な動物です。躰によつては当然ぬすみも可能でしょう」

淡々とした声を聞いて、シャオンはまた舌打ちをして地面を踵で蹴った。悔しさが、足元から血液を沸き立たせるようだった。

「金十枚だけ？ その為に来たくもねえ所まで付き合ってたつていうのによ」

「サナオで私達が金を手にするのを見ていたのですよ。でも私達が山に入ってしまったので、仕方なくヴァルを差し向けたのでしょうか。山に入って妖獣に襲われる危険を犯すほど盗賊も愚かでないでしょうから」

「へんっ」

「シャオン」

突然ウエルが声を落とし、街道に背を向けて立っていたシャオンの手を掴んで人混みの中へと足を進めだした。

「おいおい、戻るって言つたじゃねえかよ」

「黙って。さり気無く辺りを見回して御覧なさい」

ウエルの声は冷えた氷のように冷酷だった。

シャオンはウエルの手を振りほどき、彼のゆっくりとした歩調に合わせてながら、目だけを動かして辺りを探った。

商品を売り買いする声、他愛もない会話。肌の色の違う者、黒髪の者、金髪の者、鳶色の髪の者、老若男女、様々な人間がいる。

だがその中に、明らかに役人と思しき者が少なくない数で混じっていた。

腰に剣を差し、肩から斜めに赤い布をかけている。赤はシェバ帝国の国旗の色だ。ヨウーワの南西から東部にかけての広範囲な領土を制圧した帝国の色。グリユックをも統治下においた国。

「役人？」

シャオンは眉を寄せ、あからさまに嫌悪をあらわにして言った。

「そうです。サナオにもいましたね。森を抜けた所にも小さな見張り小屋がありました。そこにも同じ格好をした役人がいましたから」「森の出口に？ 気が付かなかつたな」

「あなたは臭いだけを追っていましたからね。私が誤魔化しておきましたから大丈夫です」

「それはそれは……」

シャオンがたいした感情も込めずに面倒臭そうに返答した。

「この先に、知っている宿があるのです。とにかくそこへ行きましょう」

「はあ？」

シャオンは構わずに路地に入ろうとするウエルの前に立ちほだかつた。

「ちよつと待てよ。金が足りねえよ。それにサナオに行く時に言わなかったか？ グリユックの近くには行きたくねえから、気が進まねえって。知り合いがいるのかよ、ここに」

「あなたがちよつとグリユックを見てみたいと言っから仕方なく山に入ったのではありませんか」

責め立てるような口調だ。

「俺の所為かい。あーあ、そうだよつ。でも俺はここが大嫌いだからな」

「私もあなたに習って言うなら嫌いです。でも今は、役人の目が光っています。私達はグリユックに入る通行証を持っていませんからね。不審な行動は慎むべきです。それとも来た道に戻って、また一

「晩中歩きますか？」

「通行証を手に入ればいいじゃねえかよ」

「簡単に言いますね。領主館で身分を証明できますか？ 少なくとも私は無理ですよ」

「いやなヤツ。俺だつて無理に決まつてんじゃねえか。」

「ウエルというヤツは、いつも涼しい顔をして返す言葉がないような言い方をする。シャオンは腹の底でこぶしを握っていた。」

「とにかく役人の数が多いのが気になります。今日は夜も更けますし、明日でなおしませんか」

「わかつたよ。好きにしるつてんだ」

「そのままウエルは迷わずに路地を進んで行き、中央街道より一筋奥に入つて行つた。」

「中央の大通りから一筋入っただけで、そこにはもう人通りが殆どない。すでに日は沈みかけ、薄暮が迫っている。そろそろ誰もが妖獣に怯え、家の扉を閉ざす時間である。」

「妖獣は人にあらざる異形の生き物だ。」

「聖霊に相反する闇の世界に属し、主に山などの闇の濃い場所を好んで生息している。だが時には夜ともなれば獲物を求めて街に姿を現し、家畜などを襲うことがある。まれには人間を襲いその血肉を食らうことすらある。」

「ウエルの言う宿は難なく見つかった。」

「トラオ、ね」

「シャオンは掲げられた看板の名を読んだ。」

「隣に建つ民家の倍はある大きさだ。」

「長い年月で日焼けしたような赤茶けた石が積み重ねられて扉の周囲を飾っている。木造の建物は風雨で多少は色が退色しているが、それがかえって歴史を感じさせる威厳をかもし出していた。」

「ほんとに何とかなるのかよ」

「シャオンは訝しげにウエルに視線を投げかけた。」

「ウエルはそこで初めて被っていたフードを取った。夕闇にすらま

ぶしい黄金の長い髪があらわになる。さすがにシャオンも一瞬ではあるが目を奪われた。

「さあ、どうでしょうか。主人の顔を覚えていないもので」

言いながら扉に手をかけ中に入っていくウエルを、シャオンは呆れ返って見送るしかなかった。

「どういふ神経してんだ、こいつ」

小さく吐き捨てるように言うと、シャオンも宿の中に入った。ウエルが「知っている」と言ったので、知り合いがいるのだとばかり思っていた。当然、タダで食事にありついて、暖かい寝具の上で手足を伸ばして眠れることを期待していたわけだ。

シャオンが中に入ると、そこでは既に大勢の客が食事をしていた。入り口を入ると食堂になっているらしい。

中は小奇麗に片付いており、窓際には花も飾られていた。いかにも高名な画家が描いたような絵画がいくつも等間隔で壁に掛けられている。調度品は古く歴史を感じさせた。

すぐに奥から少女が出てきた。

まだ年の頃は十七、八の、ゆるい癖のある金髪で碧眼の愛らしい顔をした少女だ。

「お食事ですか？ お泊りですか？」

ウエルを見上げた少女は、しばらく彼に目を奪われていた様子だった。頬がうつすらと紅を差す。

それもシャオンには見慣れた光景だ。誰しもウエルの美しさには目を奪われる。華やかな美しさではないのだが、温雅な風貌は聖人を思わせる。凛々しい目元とは裏腹に微かに湛えた笑が、理知的であるのに柔和という印象を与えるらしい。

一転、ウエルからシャオンに視線を移した少女は、不審者を見たように警戒心を顕にした。シャオンは反射的に、左の前髪を整えた。「御主人のトレルオム殿はいらっしゃいますか？」

その言葉に少女は驚いたようにウエルを見た。

「父のお知り合いの方ですか？ 私、娘のトレーネと申します」

「いえ、知り合いというか、昔大変お世話になったものですから、挨拶がしたいと思ひまして」

「そうですか……でも」

トレーネはまた、気になって仕方ないという風にシャオンをちらりと見やった。

「父は、亡くなりました。もう三年になります」

「それは存じ上げませんでした。残念です」

シャオンはそう抜け抜けと言うウエルの顔とトレーネと名乗った少女の顔を交互に眺めてみた。

ウエルは表情を動かさず、何時もの様に微笑んでいる。一方トレーネは父親に世話になったという客人をむげにも追い返せずに困ったという感じに見えた。

「では、こうさせて頂けませんか？」

ウエルは小首を傾げて少女を真摯な瞳で見つめた。

「私は旅の神官です。医術だけでなく薬草についても学びました。聖術も使う事が出来ます。お世話になったお礼に、今日お泊りのお客様の事で、ご要望があれば無償で治療を施すことが出来ます」

## 第一章・運命の萌芽 3

「ああーやつぱりいいなあ」

シャオンは寝具の上に横になり、大きく伸びをした。

寝台が二台と小さな机が配置されただけの狭い部屋だったが、シャオン達には十分だった。昨日は狭い洞穴の中で座って眠ったのだ。それを思えばまさに天国だ。

ひとしきり伸びをした後、隣の寝台で黄金の髪を器用に編んでいく相棒を見た。

美貌の青年は悪びれた風もなく外套を壁に掛け、寝支度をしていく。

「しかし、今に始まったことじゃあねえけど、ウエルって怖えよなあ」

「なにがです？」

「この宿の主人と知り合いだなんて嘘だろ？ 神官だとか、上手いこと言って、結局タダ飯食って部屋まで用意させたじゃねえかよ」

「嘘とは心外ですね。私は知り合いだと言った覚えもありません。知っている宿があると言ったじゃありませんか」

シャオンはウエルがあまりにさらりと言つので二の句が告げなかった。

「ちょうどあの老婆が足を見て欲しいと言い出してくれて助かりました」

「あの婆さんの足は治ったのか？」

「さあ、どうでしょうか」

ウエルは秀麗に微笑むと、暖かな寝具の中に入った。

シャオンは苦虫を噛み潰す思いだった。一度でいいから、この滅らざ口と説教癖を何とかしてやりたい。そうすればさぞかし気分がいいだろうと思った。

シャオンはウエルに背を向けて寝具の中に潜り込んだ。

脳裏に食堂での様子が浮かんでくる。  
無償で治療する。

その言葉は食堂にいた者達の視線を一齐にウエルへと向けさせた。そこへ杖をついた老婆が歩み出たのだ。ウエルのかざした手が、老婆の杖を不要の物に変えるや、あつという間に行列ができた。

シャオンもウエルの使う聖術のことは知っている。

聖術は、世界を構成するすべてのものに宿る聖霊達の力を借りた呪術のようなものだ。

火を操ったり、水を操ったりするだけでない。聖霊を動かせばどんな事もできるとウエルは教えてくれた。

ただ、聖霊を見ることの出来る人間はわずかしかない。一国に数人という希少さですらある。その力を借りて術を使うとなると、さらに稀なことになるだろう。聖術を使う者は聖霊と交わるが故に自然と神道へ進む者が多い。しかし、神官になるための学府は難関である。が、ウエルがそこを出たのかどうかを、シャオンは知らなかった。

今の世では、神官といえば国を治める王に次いで尊敬されるべき地位だ。彼らは神の声を聞き世界の祭事を一手に引き受け、医術にも通じる。難関である学府を出なくては、例えいくら金を積もうが地位をひけらかそうが、神官になる事は出来ない決まりなのだ。

シャオンはウエルのことを考えるうちに睡魔に襲われた。とにかくウエルのおかげで、今夜は金を払わずに宿を取れたわけだ。これ以上文句の出るはずもなかった。

その夜、グリユックの老舗宿・トラオを訪なつた者達がいた。

妖獣の跋扈する世で、夜に外を歩く者はいないといっても過言ではない。夜半過ぎから降り始めた雨がしとしとと石畳を打ちつけ、月明かりもない夜なら尚更だ。

黒い三つの影が音もなくトラオの裏口に並んだ。

裏背戸を微かに叩く音に、扉がわずかに開けられる。

トレーネは音もなく訪問客を宿に招き入れた。  
最後に入った者が外を確認してから音を出来るだけたてないよう  
に扉を閉める。

「トレーネ。急用とは何だ」

フードを目深に被った三人の者の中で、一番先に入った人間が低い声で問うた。その後ろで、あとの二人は影のように膝を突き控えている。

「類稀な聖術を使う神官だという二人組みが、今夜宿泊しております」

「ほお……」

「いかがなさいますか？」

トレーネは、来訪者達に椅子を勧めた。実際に座ったのは一番初めに歩み出た者だけで、後の二人は裏背戸の入り口に番犬のように立っただままでいる。

「二人とも剣を携えています。もしかすると、使えるのではないでしょうが」

座った者は腕組みをしたまま低く唸りながら、目深に被ったフードから覗くあごひげを撫ぜた。

円卓の上に灯された炎がジリリと音をたてて揺らいだ。

「父に世話になったと申すのですが、私には見覚えがありません。それに、どうも不釣合いな二人組みでして……」

「足止めできるか？」

少女は眉をひそめた。

「分かりました」

「では明日中に使いを出す」

男は後ろに控えていた者達を伴って、またグリウスの闇の中へと消えていった。

シャオンが突然体を起こした。

闇の中で、獲物の姿を捉えた野生獣のように瞳を見開いている。

薄い氷でおおわれた湖上を歩くような危うさに似た空気が、シャオンの周りに張り詰めた。

シャオンはじつと耳をそばだてて部屋の入り口を睨み付けた。闇に慣れぬ目をこする。

そうして素早く寝具から出て、物音ひとつ立てずに立ち上がった。そのまま滑るように移動して戸口に耳を当てて立つ。

「どうしました？」

隣で休むウエルもシャオンの異変に気付いて声をかけた。

シャオンは声を出す相棒に、指で口元を押さえて「しっ」と呟き、静かにするように合図した。

「この宿に誰かが来た」

「こんな夜更けにですか？」

「三人だ。足音が聞こえる」

裏背戸の開いた音、中に入った人間の数を正確に言い当てて、シャオンは寝台に戻って腰を下ろした。

「駄目だな、熟睡できやしない。せっかくの宿だったのによ」

「相変わらずよく聞こえる耳ですね。少しは蓋をしておかないと、身が持ちませんよ」

シャオンはまた部屋の入り口を見た。右に覗く瞳が眇められた。

「嫌な気配だ。剣の使い手か、気配が鋭い」

「シエバ皇帝が来る事と関係があるのかもしれないね」

ウエルも声を低くして言った。

シャオンは弾かれた様に振り返ってウエルを見た。すぐさま乱れた髪を整え、左半分を隠す。凍てついた体を解すように生唾を飲み込んでから、ウエルに言葉を返した。

シエバ皇帝。グリユックを侵略した皇帝の名前。

「シエバが、来るのか？」

「足を治療した老婆に聞きました。それで役人の数が増えていることにも得心がいきます。今は治世十五年の祭り期間だと言っていました」

「……何しに？」

「さあ、それは私の知る所ではありません」

シャオンの視線は再び扉に固定された。

再び階下の扉が開く音がして、三人の人間が外に出た微かな音がシャオンの耳に届いたのだ。

「ウエル、明日は早くにここを出よう」

「そうですね」

ウエルは言いながら体を横たえた。

夜の旅亭トラオは、再び静寂に包まれた。

## 第一章・運命の萌芽 4

翌朝、夜明け前に、二人は誰よりも早く部屋を出て食堂へ降りた。もちろん食堂には誰もいない。厨房の方から朝食の準備をする者達の物音が微かに聞こえてくる。

ウエルとシャオンは互いに目で合図しあって、宿の入口の方へ進んだ。だが、数歩進んだ所で、シャオンがウエルの服の裾を掴んで足を止めた。

振り返ると、食堂と厨房を結ぶ入口に宿の主人トレーネが人形のように無言で立っている。

「おはようございます。昨夜は思いもかけずこちらへ泊めて頂いてお礼の申しようも御座いません」

ウエルが少女の目をまっすぐに見て、いつもの微笑を顔に湛えてぬけぬけと言った。

「もう、お帰りですか？」

「ええ、こちらへはご挨拶に寄っただけでしたので」

少女は心持ち緊張したような表情になって二人に歩み寄ってきた。シャオンは思わず身構えていた。まさか、グリユックの都グリウスへの通行証がないことがバレたのではないかと思っただのだ。

「お願いがあるのです」

二人は顔を見合わせた。いまさら願いを聞かぬとは言えない。何しろウエルはトレーネの父親トレルオムにたいへん世話になったことになっている。その礼にと、昨日は無償で治療まで施したのだから。

「願いがあるのは私ではないのです。その方はもう暫くするとこちらに来られますので、お待ち頂けませんか？」

ウエルの表情は全く変わらない。

シャオンは右目を細めた。

ウエルと違ってシャオンは思った事がすぐに顔に出る。

トレーネは来る相手に対して敬語を使った。そして自分達に対しては都合を聞かずに待つことを依頼してきた。脳裏にふと深夜の訪問者の事がよぎる。状況的には、決していい依頼とはいえないとシヤオンは感じた。

「それは出来ねえな」

シヤオンは即座にウエルの前に出て、冷ややかに告げた。

「シヤオン」

ウエルがシヤオンの肩を掴む。ゆっくりと首を左右に振った。

「すみません、連れが……出来ましたら御用のむきを教えて頂けませんか？」

トレーネは一瞬伏せ目がちになったが、決心したようにまっすぐ顔を上げた。胸の前で手を組む。まるで神殿で熱心に神へ祈りを捧げる信者のようだ。

「神官様のお力が必要なのです。どうかお話だけでも聞いていただけませんか？」

トレーネの声には切迫した何かがあった。思いつめたような瞳は縋る様にウエルに向けられている。

「分かりました」

「おいつ、ウエル！」

シヤオンは掴み掛からんばかりの勢いでウエルに向かった。だがウエルは穏やかさを崩すことはない。

トレーネも隠さずに安堵の息を漏らした。

「すぐに朝食を用意させます」

少女はくるりと身を翻し、厨房へと消えて行った。

姿が厨房へ消えたことを確認してから、シヤオンは再びウエルに向き直った。もちろん文句を言うためだ。ウエルとトラオの亡くなった主人とは、どうやらそう深い関わりがあるようにはシヤオンには思えなかった。その上、グリユックを制圧した破竹の勢いのシエバ皇帝がグリウスの都にやって来るといふ。皇帝が来ればさらに役人の数が増え、監視の目は厳しくなるだろう。そこへ昨夜の訪問者

だ。

グリユックに入る通行証を持たない二人にはこれ以上の長居は無用である。

が、シャオンは言葉が出なかった。

ウエルは少女の消えた入口をじっと見ていた。いつもの微かな笑みが消え去った顔は酷薄ですらあった。

老舗旅亭トラオの幼い主人・トレーネの言っていた訪問者はなかなか訪れなかった。

朝食を済ませ、昼食を済ませ、申し訳なさそうにトレーネが運んできた極上の酒に手をつけても、まだ現れない。

「ったく、どうなってるんだよ。いつまで待たせる気だ」

シャオンは苛々した様に腕を組み、時折舌打ちしながら、狭い部屋をうろついていた。

「まさか役人に俺達のことを通報してんじゃあねえだろうな」

「それはないと思いますよ」

ウエルは読んでいた古い本から視線を上げて答えた。

「もしそうなら、わざわざ私達に言わなくても、役人に通報してこの部屋を固めさせればいいのですから」

シャオンはウエルの落ち着き払った態度にも腹が立っていた。何事もなかったかのようにウエルは微笑んでいる。

「あのまま山へ引き返してりゃよかった」

「山でまた野宿ですか？」

「いつものことじゃねえか」

「でも何か仕事を引き受けられそうじゃありませんか。どのみちお金は盗まれてしまったのだし、好都合じゃありませんか？」

シャオンは相棒の前に立った。

「危ねえ仕事はごめんだ」

「なぜ危ないと思うのです？ 話を聞いてみないことには、分かりません」

ウエルは本を片付けると立ち上がった、小さな机に置かれた極上の果実酒を二つの器に注いだ。

一つをシャオンに無言で差し出す。

「いらねえよ。飲んだら、頭が馬鹿になる」

「せつかくの良いお酒を、もったいないですよ」

「酒好き」

「誤解が生じるような言い方はよしてください。何をそんなに苛々しているのです?」

ウエルは器を二つ手にしたまま、一つに口をつけた。

「夜中の客だ。あれが気になって仕方ない。鋭い気配だった。普通の人間じゃない。剣か、武器を持つ者の気配だ」

「相変わらず鋭い勘だ」

「それに」

シャオンはウエルの前に立ちはだかった。ほぼ同じ位の背丈なので、目線が合う。

「お前だ、ウエル。何か知ってたんだろ?」

「私が一体なにを知っていると云うのです?」

「しらばくれやがって。いつも秘密主義なんだな」

「どうしてそう思うのです? トレーネという少女が、なにやら不吉なことに巻き込まれている気がして心配なだけです。トレルオムの娘さんですからね。気になって当然でしょう?」

いつものゆったりとした口調で言い、器に注いだ二杯の酒を一気に飲み干すウエルを、シャオンは黙って訝しげに見ていた。

果実酒とはいえ、ウエルはすでに一本を空けている。それでも顔色一つ変えない相棒に、シャオンはあきれた。ウエルがこれほど飲むのは珍しい。だが今のシャオンにとってそれは大して問題ではなかった。夜中の客と怪しい依頼、その二つで頭がいっぱいだった。

「じゃあ、世話になったって言うのは本当なのか?」

「そう言っているではありませんか」

ウエルは器を目の高さで掲げて、得意の微笑でシャオンを魅了す

る。

そんな事では、シャオンの苛立ちはおさまりそうにはなかった。「もう、昔の話です……少し休みますから、客人が来たら起こしてください」

寝台に体を横たえたウエルに、シャオンはもう何も聞けなかった。いつもこうして話をはぐらかされるのだ。

ウエルは決して本心を明かすことがない。シャオンに限ってではなく、誰に対してもである。怒ったり、泣いたり、はては声を立てて笑う所も見たことがなかった。

ウエルとシャオンが会ってから、一年がようやくすぎた所だ。ウエルは医師として、シャオンは傭兵として、ある屋敷に雇われていた。

もちろんシャオンはウエルが大嫌いだった。取り澄ました顔、何を考えているか分からない微笑み、育ちの良さそうな立ち居振る舞い。はつきり言って、すべて気に食わなかった。

シャオンが屋敷を出る時、ウエルはこう言った。「世界を旅してみたいのです。案内してくれませんか」

当然、断った。するとウエルは得意の説教口調でこう切り返してきた。

「貴方一人では、たいした稼ぎにはなりませんね。私がいれば楽をしてお金を儲ける方法を伝授しますよ」

この一言はシャオンにとって非常に魅惑的だった。結局ウエルの申し出を受け入れ、立ち寄った村で医師として仕事をしたり、妖獣を退治したりして金を稼ぎ、気ままに旅を続けてきた。

シャオンにとって、ウエルは便利な存在だった。

偉い神官が講話を説くような口調のウエルは、何を言っても説得力がある。妖獣を退治する時、闇の力に対抗する聖術は何より効果があった。むろん剣も人並み以上に使う。

けれども、シャオンはウエルの出身も過去も、何一つ知らない。知っているのはウエルという名前と、聖術や医術、薬草などに通

じ、計り知れないほどの知識を持っているということだ。

同じくウエルは、シャオンの過去にも決して触れようとしな  
い。それがもつとも気に入っている所でもあった。

シャオンはそんな事を考えながら、寝台に横たわったウエルの横  
顔を見下ろした。

そこにあるのは、この一年飽きる事無く、毎日見てきた寝顔だっ  
た。

そして、問題の客が現れたのは、夕食が終わり、食堂にも客の姿  
がなくなった夜更けのことだった。

## 第二章・運命の交錯 1

雲のない夜空に細い月影が淡く光っていた。

街道には誰もいない。みな妖獣を恐れて扉を閉ざし、すでに眠っている時間だ。

グリユックの王都、グリウスの王城へと続く街の中心街道には、水路の上に篝火が焚かれていた。

水路はグリウスを縦横に走っている。

その合流地点に王城は位置していた。

小高い丘の上である。

高い城壁は下から見上げると幾重にも重なって見えた。

城門から入っても、城まではかなりの距離がある。迷路のように曲がりくねった道が城壁で囲われており、途中で水路が複雑に絡み合い、初めて城を攻める者には難攻不落の設計になっている。効果的に兵を配置しておけば、城に到着する前に、この迷路と水路で敵を分断し撃破出来るという仕組みだ。

グリユックの不可侵伝説は、このグリウス城の存在も大きい。

この城には、隠し通路が存在した。極々限られた者だけが使用するためなのか、巧妙に城壁に隠された出入口は、いったん地下通路を通り、街道のはずれの民家に通じている。

三つの影が、その民家から滑り出した。

一様にフードを目深に被っている。腰の辺りの膨らみから、剣を差していることが分かる。三人は足を忍ばせて駆け出し、夜陰に紛れて消えた。

「こちらへ」

トレーネはシャオンとウエルを宿の奥の部屋へと通した。

食堂の秀逸な絵画や照明などと比べると、そこは実に粗末な部屋

だった。

二人が座れる長椅子が二台に、膝ほどの高さの小さな机しかない。窓もない。代わりに入口が向かい合わせに二つある。

シャオンとウエルに長いすの一つを勧めると、トレーネは彼らが入ってきたのとは違う方の入口へと姿を消した。

「なんだこりゃ。ただの宿に、なんでこんなもんがあるんだ？」

シャオンは部屋をぐるりと見回して、ウエルにそう耳打ちした。密談するには格好の部屋だ。

両方の扉に見張りを置いておけば、話を聴かれる心配のない部屋である。

シャオンは珍しそうに部屋を眺めていた。が、突然何かに気付いたように、ウエルの耳元に再び囁いた。

「これは俺達も、逃げ道がねえってことじゃ……」

「そうですね。ま、そういう場合に陥った時は、ひとつ聖霊達の力を借りるとしましょう」

ウエルはまるで子供が気に入りの玩具を貸すような気軽さでそう言った。

「お前が言つと聖霊の名も地に落ちそうだ」

シャオンは呆れたように長椅子に背を預け、剣を抱くような形で腕組みをして足を組んだ。

まもなくトレーネが目深にフードを被った三人の人間を連れて戻って来た。

「お待たせしました」

トレーネは入ってきた人物の一人に長椅子を勧め、自分はその後ろに立った。

一人は長椅子に深々と腰掛けた。従ってきた残りの二人に顎で両方の入口を指し示す。その時、顎に無精で生やしたようなひげが見えた。

指示された二人は、それぞれの入口から外に出た。見張りだ。見張り役の二人が扉から姿を消して、フードを被った者とトレー

ネが視線を合わせた。

男がゆっくりとフードを取る。

蔵つい顔があらわになった。固そうな岩盤を思い起こさせる。無精で生やしたような顎ひげが一層その蔵つさを際立たせていた。

壮年のいかにも気難しそうな顔つきで眉が太く、瞳は鋭くシャオンとウエルを睨み付けている。外套を脱ぐと、筋肉がたつぷりと付いた太い腕が現れた。

男は腰に差した剣を右手に持ち替え、低い声で問うた。

「神官殿は、どちらかな」

「私でございます」

ウエルは軽く会釈しながら、いつもの口調でゆったり答えた。

男は値踏みするように、シャオンとウエルを交互に見る。

シャオンのほうはいかにも不機嫌そうに、椅子へ背を預けゆつたりと座っている。時折神経質そうに左の顔を隠す髪をいじっていた。一方のウエルは凜と背筋を伸ばして姿勢を正し、穏やかに微笑んでいる。

剣を帯びているのは、今はシャオンだけだ。

男は小さく頷きながら、しばらく二人を見比べていた。

シャオンはそれが気に入らないとばかりに鼻を鳴らし、相手に顔が見えないように右を向いた。そうすると、左の顔をおおう髪がシャオンの表情を隠してしまう。

「さて、聖術を使えるという。貴殿はどの程度の力を行使できるのですかな。まさか、聖霊が見えるだけ、などと言つのではあるまいな」

「どの程度と、申されましても困ります。何か誤解があまりのようですが、もともと力を使う者は、聖霊と人の境界線に位置するだけです。大きな力を使える者など、そうはおりませんよ。まして、聖霊の力に程度という人の創った枠組みをはめる事もできません」  
ウエルは大して高低を変えずに、淡々と話した。

前に座るあごひげの男は、眉根を寄せて難しい顔でそれを聞いて

いる。

「では、聞き方を変えよう」

男は大きな咳払いをしてから、身を乗り出した。

「妖獣退治はなさるのかな」

「そうですね。そのような事もあったかもしれませんが」

「剣の方も使えそうであるな」

「さあ、貴殿ほどではなさそうですね」

男はううんと唸って腕組みをした。ウエルのつかみどころのない問答に、辟易したようだ。矛先は、次にシャオンへ向けられた。

「そちらはどうだ。剣の腕は」

不遜な物言いに、シャオンは顔を背けたままで返事をしなかった。「私はウエル、こちらはシャオンと申します。出来ましたら貴殿も名乗っていただけませんか？ 何か願いがあると、トレーネから聞いています。私で適うことでしたら、お手伝いいたしますが、それにはやはり順序というものも御座いますので」

同時にウエルの顔から微笑みが消えた。まるで書物の項を一枚捲ると、全く違う物語が始まってしまふかのように、ウエルという双子のかたわれが存在するかのようになり、とたんに温和さがなくなり、冷涼とした雰囲気を取って代わった。

その犯し難い気品と威光に男はたじろいだ様子だった。

「これは失礼申した。私はフェンダーという。身分は今の処ご容赦願おう」

フェンダーと名乗った壮年の男は、さらに身を乗り出してきた。

「願いを言う前に、ひとつ質問したいのだが」

「どうぞ」

「貴殿は今現在のグリユックをどう御覧になる？」

ウエルとシャオンは顔を見合わせた。

シャオンが真っ直ぐにフェンダーの顔を見る。

反射的に相手も初めてシャオンの顔を覗きこむ。

すると一瞬フェンダーは疑念でも抱いたかのように、怪訝そうに

眉をひそめた。

「申し訳ないのですが、私達は昨日こちらに参ったばかりで、まだ街の様子も見てはおりません。とてもお望みの答えをお返しすることとは適いません」

そつなく返答するウエルを、シャオンは改めて感心したように息をついた。

フェンダーは降参したように、手をわずかに上げて苦笑いした。「なるほど。ではお話いたそう。今グリユックはたいそう治安が悪化している。通行証は偽造が増え、もはや悪徳商人達の出入りの取り締まりは不可能となった。関税は増やされ、一見街道は賑わってはいるが、それは見せかけ、偽の商品なども出回って闇の取引も横行している。加えて役人どもの民への暴行も目に余る。貧富の差はますます大きくなり、裏路地では浮浪者まで出る始末だ」

「それで？」

ウエルは冷然とかえした。シャオンにはそれがかすかに怒りを含んだ声音に聞こえた。

「それで？ …… 全く話の巧い方だ。そう、グリユックを以前のグリユックに戻したいと、我々は願っているわけですな」

ウエルは急に立ち上がりフェンダーに背を向けた。

数歩、背を向けたまま歩き、立ち止まる。回りの人間には、わずかに肩が震えて見えた。まるで忍び笑いをしているかのようだ。

けれどそうしていたのはほんのわずかな時間で、すぐにトレーネやフェンダーには顔が見えないまま、悠揚とした声音で告げた。

「おっしゃりたい事は分かりました。では、私からもひとつお聞きします」

ウエルが一呼吸置く間、束の間部屋に静寂が訪れた。互いの息遣いだけが耳朶に触れ、背筋が寒くなるほどの静けさだった。

ウエルが振り向いて言った。

顔には柔らかな微笑があった。だが、続く言葉があまりに鮮烈で、その笑みは妖獣の者の様に妖しく見えた。

「それはつまり、シエバ皇帝を暗殺するということですか？」

フェンダーも、そしてトレーネも息を呑んだのがシャオンには分かった。シャオン自身も、すぐにはウエルの言っている事が呑み込めなかった。

「もうすぐグリユックへシエバ皇帝が来る。そのために私の力を利用しようとお考えですか？」

ウエルは優しくトレーネを見た。シャオンには少なくともそう見えた。だが、見られたトレーネはばつが悪そうに頬を朱に染めて顔を背けた。

シャオンにはそれで全ての辻褄があつたような気がした。

トレーネはウエルが聖術を使うと知つた瞬間から、足止めを食らわせるつもりだったのだ。だから自分達をわざわざ宿に宿泊させ、このフェンダーという男に連絡を取つたのだろう。おそらく昨夜の訪問者はこの男だ。シャオンは二つある入口から外に出ている二人の者達のことも考えた。ちょうど数も三人で合う。

「おいしい話には裏があるってのは本当らしいな、ウエル」

ウエルは、不遜にも足を組んでゆつたりともたれたままのシャオンに視線を落とす。

フェンダーが手にした剣を左手に持ち替えた。

「そこまで見抜いておられるとは。ならば、話は早いというものだ」  
フェンダーが立ち上がると、その筋肉質な体は雄雄しく、泰然自若とした態度は幾つもの修羅場を潜り抜けてきたであろうことを感じさせた。

咄嗟にシャオンも背もたれから体を起こし、剣の柄に手を添える。緊迫した状況にトレーネは慌てた様子でフェンダーの腕に縋った。  
「お待ち下さい、將軍」

「そこまで分かっているのなら、私の考えておること、当然分かってるのだろう？ ウエルとやら。我々には悠長に構えている暇はないのでな」

言いながらフェンダーは剣の柄に手を添えた。

「こいつ」

「シャオン」

今にも剣を抜きそうなシャオンの手に、ウエルの手が重ねられた。「何だよ、ウエル。どうせ俺達を殺すつもりだぜ。話を断ればこの場で。受けたつて、シエバに敵うはずない。命を落とすのは俺達だ。おっさんもシエバなぞ狙うのはやめとけ」

シャオンはウエルの手を払い除けて、剣を抜いた。豹のように無駄のまったくない素早い動きで、剣先はフェンダーに突きつけられた。

フェンダーは微動だにしなかった。

「どうよ、何も言えねえだろうが」

「何故敵わないと思うのだ」

「そんなことおっさんが一番よく知ってんじゃねえか。だからシエバを殺したいんだろ？ そうだろうよ。だからウエルの方が要るんだろうが」

シャオンは眉一つ動かさぬフェンダーを睨んだ。

フェンダーは片方の口の端を持ち上げて笑った。

「面白い二人だな。消すには惜しい」

「何だと？ お前に俺が斬れるつてのかよ」

シャオンに抑えきれない怒りが沸き立った。右から覗く黒い瞳は怒りに燃えて鋭くフェンダーを見据える。きっかけさえあれば、即座に剣を振り下ろす勢いだ。

「お止めなさい、シャオン。フェンダー殿」

ウエルはシャオンの剣を押さえて鞘に収めさせた。

シャオンは音を立てて長いすに腰を下ろし、再び手と足を組み、そっぽを向いた。

「私に選択権はなさそうなのでお聞きします」

「話のよく分かる方だ、神官殿は。どうぞ、なんなりと」

「もう貴方のご身分を明かして下さってもよいでしょう。それに、我々と、おっしゃった。首謀者はどなたです？」

フェンダーはそう涼しい顔で尋ねるウエルを睥睨した。

物腰が柔らかそうなのに、物事の核心をずばりと切り込む。そのウエルに主導権を握られたまま、本来ならフェンダーの方が切り札を握っているはずがいつの間にかそれを失っているのだ。

「私はシエバ帝国将軍だ。それ以外は明かせん」

「俺はごめんだ」

「シャオン」

シャオンは立ち上がり、扉の一方へと足を向けた。

ウエルはフェンダーが行動を起こすより早くシャオンの腕を掴んでいた。それをシャオンは乱暴に振り解き、フェンダーを睨め付けた。

「シエバは化け物だ。俺はごめんだね」

同時に左半分を隠していた豊かな黒髪を一気に掻き揚げた。

トレーネが小さな悲鳴を上げる。

そこに現れたのは、二本の醜い傷だった。左目はその傷によって潰れている。ちょうど傷は左の眉の付け根辺りから、斜めに頬骨の辺りまで延びている。傷の周りの皮膚は色を失って暗紫色に変わり、髪を掻き揚げた顔は妖獣と見間違われそうな容貌に見えた。

フェンダーは黙ってその傷を見ていた。

「知ってるからウエルが必要なんだろうが。シエバが人間じゃねえって」

シャオンは髪を掻き揚げていた手を下ろして再び顔を隠し、乱暴に扉を開けて部屋を出た。だが、戸惑う見張りにフェンダーは何の指示も与えなかった。

「いいのですか。シャオンを部屋から出して」

それを聞いて、フェンダーは鼻でせせら笑った。

「どうせ役人に話など出来る身分ではあるまい？」

「確かに」

そう言って微笑むウエルをフェンダーは不思議そうに見た。

「どうも貴方は勝手が違う。変わっておられるというか、豪胆とい

うか」

「それでもありませんよ。ちゃんと報酬は頂きます。シャオンもお金だけで、気も変わるでしょう」

ウエルは悪戯を楽しむ子供のような笑を湛えていた。

「叩けば埃が出そうだな」

対したフェンダーも不敵に微笑んだ。

## 第二章・運命の交錯 2

夜が明けようとしていた。

ウエルは深夜の会合の後、眠れずにいた。

隣の寝台に横になるシャオンは寝息を立てていたようだが、ウエルが体を起こすたびに反応していたので熟睡はしていないのだろう。深夜の会合のせいで神経が高ぶって、聴覚も嗅覚も研ぎ澄まされているに違いない。

部屋の窓から薄く曙光が差し込んでくる頃、ウエルは部屋を出て下に降りた。

階下に降りると食堂だが、入り口を背に右側が厨房になっているらしい。昨日はそこにトレーネが立っていた。厨房からは早くも忙しそうに働く者達の声がする。

その反対側に扉がある。扉は開いていて、向こうから朝日が薄く差し込んでいる。

整然と並んだ机を避けながら、扉へと近づいた。奥は廊下になっていて、先に緑の草が見えた。何があるのか、誘われるようにウエルは足を運んだ。

廊下を出ると視界が広がる。

庭だった。

食堂と同じ位の広さの庭は、周囲を高い木が囲み、さらに木枠で仕切られた中には色とりどりの花々が植えられている。他に飾られているものはなかったが、花だけでも庭がとても美しく華やい見える。

中央は畑になっていて、手入れの行き届いた何種類もの野菜や果物が栽培されていた。

ウエルが嘆息して畑に歩み寄ると、早くから畑に水を撒く少女の姿があった。

「おはようございます、トレーネ。昨夜は遅かったのに、もう仕事

ですか？」

ウエルはトレーネを驚かせないようにわざと足音を立てて歩き、声をかけた。

「神官様、おはようございます」

「ああ、その神官様はやめてください。ウエルで結構です」

ウエルは何かを押しとどめるように手を上げて笑った。

トレーネは急に真顔になり、水を撒く手を止めた。

「あの……御免なさい。私、父に縁のあるお方を、こんな事に巻き込んでしまって、本当は……」

「いいえ、お気になさらずに。私とシャオンはこうして色んな仕事を請け負いながら旅をしているのですよ」

トレーネは本当に申し訳なさそうに、今にも泣き出すのではないかと思う位に思いつめた表情だった。

「お手伝いいたしましょう」

ウエルはトレーネの手から水を撒く柄杓を拝借すると、水を汲んで野菜に丁寧撒き始めた。

「あの」

トレーネは困ったようにウエルを目で追ったが、楽しそうに（いつも微笑んで見えるのでそう見えただけかもしれない）水を撒いている姿を見るうち、少しずつ笑顔が戻ってきた。

「あの、父とはいっつ？」

ウエルは何を聞くのかという風に顔を上げたが、すぐにいつもの表情に戻った。

「随分と昔です。私はまだ子供でした。世話になったのは、正確に言うなら私の父のほうでしょうね。父はいつも帰り際に、貴方のお父様に感謝の意を伝えていました。子供心にその事は大変印象に残っているのです。だから、つい足が向いたのかもしれない」  
「珍しく寂寥とした物言いだった。」

「貴方はそのお父様の遺志を継いでいるのですか？」

「えっ？」

トレーネは考えもしなかった事を聴かれたとでもいう風に、怪訝そうな顔をした。

「いえ」

ウエルは辺りの様子をそつと伺ってから、続きを話した。

「フェンダー殿と通じておられたので。違うのですか？」

「確かにフェンダー様と最初に知り合ったのは父ですけど、これは私が決めたのです。父とは関係ありません」

「そうですか」

ウエルはまた水を撒き始めた。トレーネも柄杓をもうひとつ用意して、一緒に水を撒く。

「あの、ウエル様は父が何をしていたのか御存知なのですか？」

ウエルは水を撒く手を休めず、ただ小首を傾げただけではぐらしかした。

「聖霊達が喜んでいきますね。ほら、トレーネ。あなたが育てている野菜ですよ」

大きく実を付け重みでたわんだ枝をそつと支えるように手を差し伸べ、その手をトレーネのほうに見せた。

「一見ウエルがトレーネに掌を差し出したように見える。

だがトレーネはあつと声を上げた。

「見えましたが？」

「はっ、はいっ！ この薄い薄い緑の光はもしかして！」

トレーネの大きな瞳は、驚愕と好奇心に満ち満ちている。

「よかった。私もこんな事をしたのは初めてで。あなたがわずかにでも力を備えておられたから、聖霊を見せることが出来たのです」

「私が、力を？」

ウエルは再び柄杓で水を畑に撒きはじめた。

「人は大概力を秘めているものです。それと気付かないだけで。人はついつい神や聖霊達に自分達が生かされている事を忘れるのですね。だから聖霊達もそれに応えてくれないのです。トレーネはとても大切に野菜を育てている。その事を聖霊達も知っているのですよ」

次に柄杓を少し傾けて、そこから零れ落ちる水を手ですくった。  
「この水一滴ですら、聖霊達の息吹があることを忘れてはならないのです」

トレーネはあまりの感動か、ウエルの顔を眩しそうに見つめたまま声が出せずにいるようだ。

「すみません、つまらない話をいたしました」

「いいえ、とんでもありません。聖霊を見たのなんて初めてで、嬉しいというか、何て言ってもいいか」

トレーネは初めてウエルの前で少女らしい無邪気な笑みを見せた。風がそよぎ、畑の野菜達の伸ばす枝や葉がそれに応えた。ウエルの黄金の長い髪もその風に流れる。まるでそこから光の粒が零れ落ちるように、朝日を浴びて輝く艶のある髪はトレーネの瞳を釘付けにした。

ウエルが肩をすくめて、風の聖霊達までやってきたと告げると、トレーネはたちまち辺りを見回したが、それを見ることはさすがに叶わなかったようだ。

トレーネは眩しそうにウエルを見上げた。

「父はよく、昔のグリユツクは良かったと言っていました。私もそんなグリユツクを見てみたい」

「それは難しいことですね。グリユツク王家はもうない。あの頃のように戻るのには永遠に無理かもしれませんが。例えばシエバ皇帝がいなくなったとしても、その後の事をどうするかによって、グリユツクは戦乱に巻き込まれかねません」

そこまで言って、ウエルは自嘲気味に笑った。

「すみません、トレーネに言うことではありませんね。これはフェンダー閣下に進言する事にいたします」

「ウエル様」

トレーネの瞳は真摯な光で満ちていた。頬を朱に染め上げながら、それでも顔をしっかりと上げ、祈るように胸の前で手を組んだ。

「あのお方をお助け下さい。あの方は、本当に平和を望んでおいで

なのです。民が平和に暮らせることをお考えなのです」

「あの方、とは、今回のことを計画した人物ですか？」

しかし、トレーネは返事をしなかった。

ウエルは少し困ったように首を傾げたが、それでも微笑みは絶やさなかった。

「少なくとも、トレーネのおっしゃるあの方を、私は全力でお守りいたしましょう」

少女は恥らったように、俯いてしまった。

「おい、説教神官」

畑を後にし、庭に通じる入口を数歩入った所で、シャオンは壁に体を預けて腕組みをしていた。

「聞いていたのですか？」

「へんっ」

悪びれた風もなく、シャオンは鼻を鳴らして踵を返し、食堂へと早足で歩いていく。

「シャオン」

「俺はまだやるとは言ってないからな」

「はいはい」

わざと大股で歩くシャオンを、ウエルは追い越しながら返事をする。

「やらないからな」

「はいはい」

「シエバに食われちまえ」

「どうです？ グリウスを下見に行きませんか？」

「行かない」

「そうですか。残念ですねえ。今は祭りの最中で、いろいろと珍しいものを見ることが出来るというのに」

わざとらしいウエルの物言いに、シャオンは口をへ字に曲げな

「がら、睨み付けた。」

「シエバは化け物だ、妖獣だからな。俺は絶対やらねえぞ」  
旅程トラオの入り口付近でシャオンはそう言い切った。

「なぜ、シエバが妖獣だと？」

「見たからだよ」

入口の取っ手に手をかけていたウエルがゆっくりと振り向いた。

「見た？」

そこには眉をひそめ、まるで蛇蝎のごとく嫌う天敵を見たかのような表情のシャオンがいた。

「行くんだろ」

「えっ？」

シャオンは戸口につっ立ったままのウエルを押し退けて外へ出た。  
「行くぞ。グリウス見物だ」

### 第三章・運命の邂逅 1

グリウスは朝から賑わっていた。

一口に治世一五年といっても、民にとっては安穏な日々ではなかったろう。グリユック王家に守られて生きてきた者達が、突如として現れたシェバ皇帝に従うことになったのだ。

税金も上がった。

王家が滅ぼされた戦乱で、街の一部も破壊された。

混乱の最中では盗賊が横行し、治安は一気に乱れた。未だにその名残は消えることなくグリユックに深い傷跡を残している。

それでも、十五年続いた平和を、民人は謳歌しようとしていた。

人が集まれば商売も繁盛する。関税が上がったとしても、グリウスで商売する価値は十分にある。グリユックの港には世界各国からの荷が集まるのだ。物売り達にとってはかつてない好機である。

中央街道筋は、そんな商売人達が集まって、早朝だというのに既に露店が開かれていた。それに乗じて、採れたての野菜を売る者、朝から大道芸で身をたてる者、街道は人であふれ始める。

シャオンとウエルは、ずっと無言で歩いていた。

シャオンは顔をしかめたままで、街に出てから一言も言葉を発しない。時おり左の髪を撫で付けて顔が隠れていることを確認するほかは、腕も組んだままだ。一方、ウエルも辺りを見回してはいるが、何も言わなかった。

ただ、珍しい風貌の二人を、道行く者が振り返る。

一人は黒髪で左半分の顔を隠している。右半分に覗く顔は、怒りを堪えた様にしかめっ面だ。もう一人は、そうお目見えできないような美貌の持ち主。若い娘などはウエルをあからさまに指差して囁きあうほどだ。

トラオから裏路地を抜け中央街道に出て暫く歩くと、グリウスを中心と思しき広場に出た。

朝だというのに、そこはさらに大道芸人や旅芸人達も集まり、人だかりがいくつも出来ている。

同じだけ、役人の数も半端ではなかった。一様に肩から赤い布をかけ、剣を腰に差して、二人一組で歩いている。それを目に留めて初めてウエルがシャオンに話しかけた。

「あの、役人は……」

柳眉をひそめる相棒に、シャオンもウエルの見ているものを見ようとした。

「なんだ？」

ウエルはある一組の役人達をじつと見ていた。

彼らには表情というものがない。義務のように、行進するようにゆっくりと歩いているだけだ。木偶か土偶が、手と足だけを動かして歩いているようにも見えた。かといって彼らの動きが別段ぎこちない訳ではない。

「なんか、違和感ある役人だな」

「あれは、人間ではなく人形ですね。魂がないのですよ」

ウエルはシャオンとともに木偶人形に出来るだけ自然に背を向けた。

一組の役人達が後ろを通り過ぎて行く。

十分通り過ぎるのを待って、ウエルが言った。

「シエバが妖獣だというあなたの主張も、あながち嘘ではないようですね」

「そうだって言ってるじゃねえかよ、しつげえな　で？　それと

あの役人と、どう関係あるっての？」

「あれは、目の役割を果たしているのです。どこにいても街の様子が知れる。あの形代には闇の力を感じます。妖術ですよ。妖獣の使う力です」

「と、いうことは？」

「グリユックの城には、あれを作ることの出来る妖獣か、もしくは妖術を使う者がいるということですね」

「シエバがもうすぐ来るんで街を監視してるってのか？」

「正解」

ウエルは出来の良い生徒を褒めるように、にこやかに言った。

「あのおっさんはもちろん知ってるんだろうな」

「だから私を必要としているのでしょうか？ 妖獣に対抗できる、剣ではない力を、です」

二人は小さく溜息をつき、再び歩みを進めた。そのまま真っ直ぐに進めばグリユツクの城、グリウス城である。

すでに見上げると城壁が視界に飛び込んでくる。小高い丘に聳え立つ、壮麗な石造りの建物だ。

シャオンが憎らしげに城を見上げた。

「何でこんなことになっちまったんだ」

その時だった。

シャオンがすれ違った人間を慌てて振り返った。

「おい、待てよ」

通り過ぎる人間の肩を無遠慮に掴む。掴まれた方は驚いたようにシャオンを見た。

互いの目が合う。

瞬間その人間は、しまったと言う様に舌打ちをし、踵を返そうとした。が、シャオンがしっかりと腕を掴んでいたので逃げることはかなわない。

男は頭に布を巻き、角ばった顔の頬には小さな切り傷があり、ゆったりとした衣服の胸元は大きく膨らんでいた。そこから一瞬小さな耳が覗く。

「あいつの匂いだ」

「どうしたのです、シャオン」

怯えたような仕草を見せた男は引きつった笑みを浮かべると、素早く腰の辺りに手を滑らせて短剣を突き出した。

シャオンは剣先を瞬時にかわして後退った。

周囲から悲鳴が沸き起こる。

「シャオン、ここで騒ぎはまずいですよ」

ウエルは素早く辺りを見回し、役人が傍にいないか確認しながら囁いた。

だが、シャオンはウエルの忠告など聞いてはいなかった。

「泥棒め。盗んだ金返せ」

「なんのことだ」

男はわざとらしく大きな声で叫ぶ。

膨らんだ胸元から怯えたように、それが顔をのぞかせた。

斜めに生えた耳と、大きな瞳が覗く。瞳は薄い青色でガラス玉のように輝いている。一見して猫のようだ。

「ヴァル！」

シャオンの声で、男は駆け出した。男が短剣を持ったままだったので、さらに周囲から悲鳴が沸き起こった。

「待ちやがれってんだ！」

シャオンもわき目を振らずに後を追う。

「全く、まだ金を諦めてなかったのですね」

ウエルは仕方ないという風に息を吐き、後を追った。

### 第三章・運命の邂逅 2

同じ頃、トラオには一人の客があった。

朝食の時間が済み、その日に宿泊していた者達の食事は終わった。宿を発つ者は出立し、トラオはまた違った慌ただしさに包まれていた。

宿泊客の部屋や食堂など、これから掃除をしなくてはならない。これはまた重労働だ。

トレーネは雇っている者達に慣れた指示を与え、食堂の後片付けをしていた。花を活け代え、掃除をするのはトレーネの仕事と決まっている。この食堂はトラオの顔だ。そこを迎える客にとって居心地のいいものにするのは主の勤めだ。そう父から教わった。ここを訪れる客のために働くのがトレーネは嫌いではなかった。

いつものように庭に咲いた花を机に生けていた時だった。入口がうすく開けられる。

「トレーネ」

囁くように名を呼ばれ、トレーネは振り返った。

危つく花を倒しそうになりながら、慌てて入口へと駆け寄る。周囲を見渡して誰もいないことを確認すると、入口から覗いていた者を招き入れて、もう一度外に誰もいないかを確認してから扉を閉めた。

「エリオン様、なぜこちらへ？ フェンダー様は？」

エリオンと呼ばれた青年は、フェンダーの名を聞くと眉根を寄せた。

黒い髪が目鼻立ちのはっきりした華やかな顔立ちをしている。黒い瞳は澄んでいて真っ直ぐにトレーネを見下ろしていた。

「フェンダーはずるい。自分独りで動いて、私を除け者にするのだからな」

まるで子供が拗ねる様な言い草に、トレーネは肩をすくめた。

「こんな危ないこと、もうなさらないで下さい」

「お前までそんな事を言うのか」

「エリオン様……」

そう言われると、トレーネには言葉がなかった。

「それより、私は神官殿に会いに来たのだ。フェンダーの言うことだけでは分からぬ。信頼に値するものかどうか、ぜひこの目で確かめねば」

トレーネは階段を上ろうとするエリオンを押し止めた。

「駄目でございます。フェンダー様からきつく言われているのです」「フェンダーが？　なんて周到な奴だ。聞け、トレーネ。奴は罪を独りで被るつもりなのだ。それは許さぬ。私は私自身の意志で、今度のことを決めたのだ。誰にも邪魔はさせぬ。フェンダーにもだ。止めを刺すのは、この私だからな」

周りをはばかりらずに捲くし立てるエリオンに、トレーネははらはらした。

案の定、トラオでは古株で父の代から勤めている者が奥から顔を出した。

「お嬢様？」

「何でもありません。それより、二階の神官様を呼んできてくれるかしら」

トレーネはエリオンを背に庇って取り繕った。庇った所で、トレーネより頭ひとつ背の高いエリオンを隠し切れるものではなかったが。

「神官様ならいらっしやいませんよ」

「ええっ？　外にお出にならないようにって、言っていたでしょう？」

「ですが、いらっしやらないんで。私らもずっと見張ってる訳にもいかなえし」

「ごめんなさい、ありがとうございます。仕事に戻って下さい」

トレーネは使用人が厨房に消えるのを待って、エリオンを振り返

った。

「お聞きの通りです。送ってまいりますので、どうかお戻り下さい」  
エリオンはむっとした顔をしていたが、いないのなら仕方ないという風に入口の方に向かった。

「そうそう、もう一人はどんなだい？ フェンダーはそっちの事ははっきり言わないのだ」

「あの人は……」

エリオンの瞳は好奇心に満ち満ちていた。

「怖いです」

「怖い？」

「左のお顔に傷があつて、目が、潰れていらつしゃつて。少し怖い目付きで私を見るので。でも、彼が言つたんです。皇帝が妖獣だつて」

「なんだと？」

二人は声を潜めた。

「フェンダーは叩けば埃が出そうな連中だから気にすることはないと言っていた。一体何者なのだ」

エリオンは腕を組み、手のひとつを顎に当てて考え込む様子を見せた。

「いろんな仕事を引き受けながら、旅をしているそうです。神官様は私の父に世話になつたとも、おっしゃっていました。子供の頃に」

あの時どうして分からなかったのだろうか、とトレーネは思った。朝、畑で話をした時だ。ウエルはグリユックの出身なのだ。ここにグリウスに幼い頃は住んでいた。そうでなくては、グリウスから出ることのなかった父の世話になることなど不可能だ。

「なんだ？」

エリオンは焦れたようにトレーネの言葉を急がせた。

「それで、私が父の遺志を継いだのか、と」

「どうということだ？」

「分かりません。父が以前に何かをしていたのか、私は知らないです」

エリオンはうーんと唸って考え込んだ。

「父は、ずっとグリユックがシエバ皇帝に統治されたことを嘆いていました。そのことと関係があるのでしょうか？」

「まあ、その者に会えば分かることだ。ここで待つ」

エリオンはそう言って、椅子のひとつを引き出して腰掛けた。

「エリオン様」

「無駄だぞ」

椅子に腰掛けて足を組み、居座る様子を見せたエリオンに、トレーネはもう何を言っても無駄であることは承知していた。承知はしていたが、このままここに居座られても困る。彼の顔が皆に知れ渡っている訳でもないが、記憶の良い者なら直ぐに分かるはずなのだ。何度となく、領民の前に姿を現しているからだ。

「急ぐのだ、トレーネ」

どうやってこの頑固者を説得しようかと頭を巡らせていた少女は、その言葉に思考を中断された。

「あと五日だ。五日の後に到着すると、先触れが来たのだ」

隣に立っていないければ聞こえないほどの低い声だったが、緊迫した響きがあった。

「今夜もフェンダーが来ると思う。思ったよりも早く準備せねばならなくなつた」

宙を睨むように言うエリオンに、トレーネは説得の言葉がないことを悟った。

「本当に決行なさる御積りですか？」

エリオンは今更なに言うのだとでも言わんばかりにトレーネを見上げた。

「父は既に人間ではない。いや、もう父ではない」

エリオンの声は、トレーネにはひどく沈んで聞こえたような気がした。

### 第三章・運命の邂逅 3

広場から逃げ出した男は、短剣で人を脅して道を空けながら、裏路地へと入って行った。

シャオンも負けずに後を追う。ここで逃しては一生悔いが残るというものだ。

あの金はサナオに嫁ぐという姫を護衛して、二ヶ月も平和な旅を続けてきた恩賞なのだ。退屈料だ。しばらく遊んで暮らせると思っていた矢先のことだった。まさかヴァルという小さな愛らしい動物が金を盗んでいくとは考えもしなかった。金を手に入れたという安心感もあって、あの洞穴でシャオンは本当にくっすり眠っていたのだ。

それに金泥棒に遭いさえしなければ、グリユックに長居するつもりもなかったし、ウエルの知り合いの宿にも行きはしなかった。無論こんな厄介事に巻き込まれることもなかった。

すべての元凶が今、目の前を逃がっている。

男はまた路地を曲がった。

しかしそこは行き止まりであった。

シャオンは追い詰めたとばかりに、唇を片方持ち上げて不敵に笑った。息は全くあがっていない。

一方、男は肩で息をしていた。

もちろんわずかに遅れて追いついたウエルも、肩で息をし、片膝に手を付いていた。

「だらしねえな、ウエル。息があがってるぜ」

シャオンは剣を抜き、それを男に向けた。

「金、返せよ」

「馬鹿か、お前」

男は言うが早いか、手を唇に当て小さく口笛を鳴らした。

と、両脇にあった家から、男達が出てきた。

十人はいる。

咄嗟にウエルも身構える。シャオンは舌打ちして、憎憎しげに男を見た。男は既に勝ち誇ったように目をぎらつかせている。

ウエルも剣を抜き、シャオンと背中合わせになった。

「どうするのですか？」

「遊んでやるさ」

誰もがならず者と言われても仕方のない荒んだ表情に見えた。彼らは短めの剣を手に、

ニヤニヤと笑っている。

その男達の背中越しに、役人の姿がみえた。

「シャオン、木偶人形です。傀儡役人が付いて来ています」

ウエルはわざと男達にも聞こえるように大きな声で叫んだ。

「なに？」

シャオンもウエルの見ている方向を振り向いた。

さつき曲がった路地の角に、二人の役人が立っていた。

何もせずに。騒ぎを起こしている者達を捕らえようともしせずに。

一番後ろで腕組みをしていた男が、顎で皆に合図をした。一斉にもとの民家に入っていく。

「あつ、おい待て！」

「やめましょう」

ウエルは剣を収めて、シャオンの腕を取った。

「何だよ、冗談じゃねえ」

「見て御覧なさい」

促されてシャオンは役人を見た。

彼らは生気のない目で、じっとシャオンとウエルを見ているのである。

死んだ魚のように生気がなく、不気味な目だ。彫像のように微動だにせず、その場にじっと立っている。

「見ているのですよ。私達を」

「気味悪りいなあ」

「男達は知っているのですよ。役人に楯突けば自分達がどうなるかを。反対に騒ぎを起こさなければ、見逃してもらえら」

「でも、町にいる役人全部が木偶人形じゃあるまい？」

二人の役人はシャオンとウエルに動きがないのを見ると、踵を返して路地の向こうへと姿を消した。

「たぶん彼らは知っているのです。木偶人形であろうが、本物の役人であろうが、彼らに楯突くことが、どんな恐ろしい結果を招くかを」

「どつという意味だよ」

「そのままです。本物の役人なら見るだけでなく剣をふるうのかもしれないね。そして傀儡役人なら、これは妖術を使って動かしている闇の使いです。使っているほうが本気になれば、あの体を通して妖術を仕掛けることくらい容易いでしょうから」

「食われるって言うのかよ」

ウエルは首を横に振った。

「それは分かりません。でも、今騒ぐのはまずいでしょう？」

シャオンもさすがにウエルの言っている事に従う他はなかった。

シエバ皇帝を狙っているのに、ここで騒ぎを起こしてしまつては元も子もない。

「畜生、目の前に金泥棒がいるつてのによ」

シャオンは深い溜息とともに剣を収めた。

ウエルは渋面のシャオンの肩に手を乗せると、辺りを見回しながら言った。

「さて、ここはどこでしょうか」

とにかく男達が消えたこの袋小路に何時までもいてはまた騒ぎの元になるので、二人は

グリユツクの王城を背に、歩き出した。

ウエルとシャオンが旅亭トラオに到着したのは昼も過ぎた頃だつ

た。

二人は嫌というほど路地を歩き回ってきた。グリウスは水路が縦横に走り、道が網の目のように張り巡らされている。ひとつ曲がる角を違えれば、慣れない道はみな同じに見え、同じ所を回っているということすらある。

これもグリウスが難攻不落である要因のひとつだ。

整然と計画的に整備された街は、同じような家屋が並ぶ。二階建て以上の背の高い家もない。町の中心にグリウス城がそびえ立っているかのようだ。

これについてはウエルがシャオンにこう話した。

敵が万がグリウスに迫った時、その動向は城から見下ろせば一目瞭然である、と。

これほどに外的から守るために都すべてが整備されている国もまじくないと、シャオンは感想を漏らしたほどだ。

そんなグリウスを、十五年前、シエバは侵略した。

「あなたが言うように、そしてあの役人が証明するように、シエバが妖獣だとすればこの侵略がなぜ成功したのかの説明も付くというものですな」

ウエルはシャオンにそう話した。

もちろん、シャオンは「だから本当に妖獣だって俺が言ってるじやねえか」と付け加えることは忘れなかった。

裏路地を迷っているうちに、戻る道すがら目にする荒んだグリウスの様子には二人とも胸が塞がった。路地には今日の食べ物にも困窮しているように座り込んでいる者、物乞いする者、殴り合いの喧嘩、窃盗に恐喝、一時間間に、犯罪と飢えはすべて目にしたようなものだ。

そんな訳で、道に迷いつつトラオに到着した二人は空腹と疲労で目眩すら覚えていた。

トラオでは昼食を摂る客ももう三組ほどになっている。

「ウエル様、シャオン様」

入口を入ってきた二人を見咎めてトレーネはすぐさま駆け寄ってきた。

「どちらへおいでだったのです？」

「何だよ、俺達がどこへ行こうと」

「すみません。ちょっと街を見に行ってきました」

ウエルが笑顔でシャオンの前に立って言葉を遮った。ウエルの後ろで憤慨したシャオンが、白い歯を剥いているのがトレーネの目にも入って、彼女を小さく笑わせた。

「お客様がお待ちなのです」

「客？」

シャオンはウエルの肩越しに顔を出した。

「グリユックに知り合いなんぞいないぜ」

トレーネは困ったように小首を傾げて、二階に行くことを促した。二人の後ろにトレーネも従う。

トレーネが部屋の扉を叩き、一呼吸おいて開けた。訪問者は窓際に立っていた。入口に背を向けている。

まず、艶やかな黒い髪が目に入った。その者がゆっくりと振り返る。

目鼻立ちのはっきりとした凜とした顔。こちらを睨む瞳には鋭く値踏みするような光が閃いた。

トレーネが二人を部屋に通し、扉を閉め、入口を背に立つ。

シャオンはトレーネが退路を断ったことを不審に思っ何事か言いかけたが、すぐさまウエルに腕を掴まれて大人しく引き下がった。もちろんシャオンは不貞腐れて相手に顔を見られないように顔の左側を向けて立つ。

ウエルは丁寧な頭を下げた。いつものように黄金の髪が肩から零れ落ちた。

「ほお。フェンダーの言う神官とはお前か」

窓際の男が権高な態度で腕組みをし、人を見下すことになれた口調で言う。

ウエルの斜め後ろでシャオンが舌打ちをした。

「ウエル、と申します」

「私はエリオンだ。グリユックの現在の城主でシエバの第三王子、  
といえば分かるな」

その時だった。

「お前は……」

ウエルの後ろで知らぬ顔を決めていたシャオンが、ウエルを押し  
どけてエリオンを見た。まるで霊体か妖獣を見たかのように強張っ  
た顔つきで。

右目は大きく見開かれ、ウエルを押しどけて掴んだ腕が小刻みに  
震えている。

エリオンが自分を見て「お前」呼ばわりする人間に向かって、腹  
立たしげに一步を踏み出した。

「シャオン、どうしたのです？ あなたらしくない」

ウエルは腕を握り締めてきたシャオンの顔を覗き込んだ。

だがそれに反応したのはエリオンの方だった。

「シャオン、だと？ まさか……まさか……」

「お前だったのか、シエバを狙ってるっていう馬鹿は」

シャオンの感情を抑えた低い声が部屋に小さく響いた。

エリオンの瞳が眇められた。堪えきれない怒りを抑えるように拳  
を握り締め、唇を噛んでいる。

狭い部屋に張り詰めた空気が流れた。薄い膜がぴんと張り詰め、  
どんな些細な穴が空いても弾け飛びそうな空気。息を吐き出すのも  
躊躇われそうな緊張がある。

「お前か、化け物。まさか、本当に？ 生きていたのか、貴様」

シャオンは屈辱に耐えかねたような憂いに満ちた瞳でエリオンを  
睨んでいる。

「生きていたさ。それこそ血の滲む様な思いをしてな」

エリオンがそれを聞いて、腰に差していた剣をすつと抜き去った。  
「エリオン様！」

トレーネの悲鳴が響いた。

エリオンは唇に冷笑を浮かべていた。だが、目は少しも笑っていないかった。薄汚れた醜悪なものでも見るように、冷眼視している。「だったら今ここで死なせてやるさ。なあに、直ぐにシエバが後を追う。あつちの世界も寂しくないぞ」

「やめてください」

ウエルやシャオンが何か言うよりも早くトレーネは駆け出し、エリオンに縋りついていった。

「やめてください。何故です？ エリオン様！」

「どくのだ、トレーネ。いいか、こいつは妖獣だ。シエバの、いや、妖獣にとり憑かれた父から生み出された悪魔だ」

エリオンはシャオンをまっすぐ剣先で指し示した。

一斉に視線がシャオンに集まった。

トレーネは驚愕に目を見開いて。

ウエルはいつものものわずかに浮かぶ微笑を失って。

シャオンは強く瞳を閉じた。屈辱に耐えるように唇を噛み、何の反論もしなかった。

「どけ、トレーネ」

「い、いやです。シャオン様は何もなさっていないではありませんか」

「何を言うのだ。あいつは普通じゃない。見ろ、あいつは妖獣の血を引いているのだ。憎き妖獣の子供なのだ」

エリオンは興奮したようにまくし立てた。

「お待ち下さい」

凜とした声がエリオンとトレーネの視線を集めた。ウエルがシャオンを背に庇う様にして言った。

「彼は私の大切な相棒です。彼を傷つけることは私が許しません」

ウエルの語りは凧いだ波のように静かだったが、凜然とした態度がエリオンを黙らせた。

なまじ容貌が整っているだけに凄みがある。

「神官殿」

エリオンは剣を収めたが、手は柄に添えたままだ。

「神官ともあるう者が、妖獣を庇うとは」

ウエルが険しく眉をひそめる。

「シャオンは私の相棒です。彼のことがお気に召さないのであれば、この依頼はこれまでです」

丁寧な口調なのにウエルの声は怒りに満ちていた。だが激高して声を荒げているわけではない。凧いだ波が突如として牙を剥き、一気に岸壁に押し寄せて砕けそうな、そんな激しさを秘めた声であった。

「では、結構。私はこれからシャオンとともにここを出しましょう」

ウエルは言い終わらないうちに、壁にかけてあった外套と、寝台の上に置かれていた荷物に手を伸ばした。

それから何かを思い出したかのように、ふっと顔をあげてエリオンを見た。

「言い忘れましたが、私達を消そうとしても無駄ですよ」

ウエルはエリオンを厳しく見据えた。いや睨んだと言ってもいいかもしれない。トレーネはその怒りに満ちた顔に驚き、手で口元を覆った。

「私の力を見くびると、痛い目を見ます」

トレーネとエリオンはその時、目の前の空間が、まるでガラスにひびが入ったような音を立てたのを確かに聞いた。

稲妻が閃いたような衝撃に似ていた。今ウエルに触れば、たちどころに怒りに感電でもしてしまいそうであった。

エリオンは降参したとでも言うように、手を上げた。

「分かったよ。そいつのことは、あとだ。今は、もっと大きな敵がいる。貴方は怖い人だな。フェンダーの言う通りだ」

ウエルは再び寝台に荷物を置き、エリオンを見た。微笑みは失ってはいるが、多少の怒りは解けたように見える。

「何か私どもに御用だったのですか？」

エリオンは大きく息を付き、入口へと歩きながら言った。

「よい、また今宵、フェンダーとともに参る」

無論、そばに立つシャオンを睨み付けてゆくことは忘れなかった。

静寂が部屋を支配していた。シャオンは俯いたまま立ち尽くしていた。

まさか、エリオンが現れるなどとは夢にも思わなかった。二度と出会いたくない自らの過去が、あまりにも突然、目の前に現れた。

シャオンの頭の中は、真っ白だった。

妖獣の子。

その言葉が、剣となってシャオンの胸に突き立ったままだった。

「ウエル……」

「何も言わなくてもいいですよ。私は初めて貴方に出会った時から気付いていました」

ウエルの言葉にシャオンは目を瞬いた。その顔は今にも泣き出しそうに弱気で、捨てられる飼い犬が縋りついて飼い主を見上げるように恨めしそうだ。

「何故って、私には聖と闇の力の区別がつくのです。シャオンの異常な聴覚と嗅覚、その体力、それらに闇の力を感じていました」

ウエルの顔は今までとなんら変わりのないわずかな微笑を湛えたものだった。

「貴方はいつも聖でいようとしている、その事は見てすぐに分かりました。その心根の強さが、いつも素晴らしいと、思っていたのですよ」

シャオンはその時、ウエルの齒の浮くような世辞でさえ、何故か嬉しかった。何か言いたかったが、言葉が喉につまって出てこない泥と、清水が交じり合ったみたいだった。どんどん心が濁っていった。シャオンの思考というものすべてがせき止められたようだった。「でもまさか、シエバ帝国の王子殿下だとは想像もしませんでした

よ

「やめろ」

「すみません……ひとつ聞いてもいいですか？」

シャオンは首を横にも縦にも振らなかった。無言の返答を了解ととったのかウエルが続きを話し出した。

「エリオン殿とシャオンが兄弟なのは分かりました。でも何故、貴方だけが？」

シャオンは端的に話すウエルの言葉に直ぐに首を横に振った。

「俺が生れる前のことだからよくは知らない。だが、皆言っていた。シエバは突然他国を侵略し始めて、その頃からおかしくなっただけ。妖獣に体に乗っ取られたと噂されたらしい。俺だけがその後で生れたんだ」

「なるほど。では、妖獣ではなく妖霊が、シエバ王の心の闇の部分に入り込んだのです。そして体に乗っ取った。心の闇を食うのは妖霊、聖霊と妖獣の境界にいるものです。妖霊には実体がない、聖霊と同じです。これは厄介ですね、妖獣よりも手ごわい」

シャオンはよろよろと寝台に行き腰掛けた。

そんな事は、今はどうでもいい。妖霊だろうが、妖獣だろうが、シャオンにとっては同じことだった。

すでに痛みすら感じない顔の左の傷が、うずいた気がした。

「ありがとう、ウエル」

それにはウエルは何も言わなかった。シャオンも顔を上げなかったので、ウエルの表情は見る事が出来なかった。

「それにしても空腹ですね。ここは健全に、食事を取りませんか。夜に備えて」

ウエルがにこやかにそう言ったので、シャオンもつられて微笑んだ。

第四章・伸びる闇からの触手 1

無限の暗闇とも錯覚する場所にそれはいた。

闇に覆い隠されて姿も判然としない。

ゆつたりとした椅子に腰掛け、肘掛に体を預けている。

もしも明るい光があるならば、錦の織物で作られた途轍もなく豪華な椅子であることが知れるだろう。が、暗闇の中ではそれは無用な飾りとも思われた。

ゆつたりと足を組んでいる。

足元にも毛足の長い敷物が敷かれていた。

頭は下方に向かって傾いている。

部屋には窓があるが、分厚い布で覆い隠され、それはさらに光を通さずに、どんな明るい日差しも遮り闇を維持する勤めを果たしていた。

他に何も無い部屋である。

壁を装飾するはずの絵画も、客人を大抵は喜ばせる美しい花も、机もないので茶器の類も見当たらない。

ちようど置かれた椅子の真正面にあつた扉が、ゆつくりと開け放たれた。

そこから一人の人間が滑り込むように部屋に入ると、外に立つ兵士が二人がかりで扉を閉めた。

光のない部屋では、黒髪は闇に溶け、表情すら明らかにしない。

部屋にやってきた人物は前に座す者に膝をついて礼をした。  
「偉大なるシエバ皇帝陛下。只今、先触れが確かに届いたよし、連絡が参りました」

「ん」

シエバと呼ばれた男は、わずかばかりに反響する低い声で短く返事をした。

頭を下げた男は返答に満足したように声には出さなかったものの

微笑んだようだった。

「五日後、と申しておきました。実際には二、三日の後に到着すると思います」

「ん」

「グリウスに居りまするメデスによりますと、エリオン様の動きがやや……」

「よい」

「は？」

「殺れ」

それは短かったが、耳にまとわり付くように湿度のある低い不快な声だった。

男は頭を垂れた。

「ヤノス。ぬかるな。グリウスからアキロへ進行するのだ。邪魔だてする者は容赦するでない」

「御意」

ヤノスと呼ばれた男は、再び頭を垂れ、部屋を辞していった。

再びグリウスの旅亭トラオに、夜がやってきた。

向かい合わせに扉のある質素な部屋で、ウエルとシャオンは座っていた。

斜向かいにある長椅子はまだ空いたままだ。そこに誰がやってくるのかは、話をせずとも知っている。

「いいのですか？ 今ならまだ止めることができますよ」

「いや」

シャオンは間をおかずにはっきりとそう答えた。

「あいつ、いやエリオンのことはいい。あっちがどう思ってるか知らねえが、俺には兄貴でも何でもねえ。ただ、憎いのはシエバだ」

「父親でも、ですか？」

「親父？ 馬鹿言っな。あいつは母上の仇だ。俺の左目をこんなに

したのも、みんなあいつだ」

今にも暴発しそうな感情を抑えているかのように、シャオンは低く小さな声で話している。

「……そうでしたか」

それきり、二人は沈黙した。

シャオンはじつと足元を見ていた。

今は何かを話せば泣き出しそうな自分がいる。ずっと心の深いところに秘めていた思いが、エリオンの顔を見たときに、噴火するかのごとき勢いで湧き出てきたのだ。一度溢れ出た感情はもう止める事は出来ない。

シャオンはちらりとウエルの顔を盗み見た。

そうして座っていても、どこか微笑んだように見える温かな顔。いつもと変わりのない彼が座っている。

シャオンは少し安心した。

ウエルが何も変わらなかつたからだ。今まで通り、何も詮索しないし、問いただしたりもしなかつた。シャオンにしてみれば、聞いて欲しいような欲しくないような、今は複雑な心境ではあつた。

いまシャオンが最も恐れていることは、幼い頃、皆が揃つてしたように、ウエルに妖獣だと指をさされて蔑視の瞳を向けられることだ。

ウエルはシャオンのことを相棒だと言つた。それが、シャオンの心に暖かな光を差し込んだような気がした。今まで、ウエルは金儲けに便利な片割れであつたというのに。しかしそうではなかつた。

だから、話したくなつたのかもしれない。するりと口から言葉が出てきた。

「なあ、ウエル。シエバは俺を可愛がつてくれたんだ。あんまり覚えていないが、よく肩の上に乗つてたことは覚えてる。代わりに兄弟達には嫌われてたがな。でも母上はいつも悲しそつだった。そりゃそつだよな、そいつは妖獣だつたんだしな。だから母上は俺と一緒に逃げたんだ。グリユックを攻めている混乱の最中に」

ウエルは驚いたように、何かを言いかけた。シャオンは、左の前髪をいじりながら続けた。

「そりゃ可愛いよな、妖獣の血を引いた息子だぜ？」

シャオンは引きつった笑みを浮かべた。膝の上には握られた拳が乗せられている。

「……母上は体を真つ赤に染めながら、それでも左目を抉られた七歳の重い俺を抱かかえて、街を走って逃げたんだ」

「では、シャオンの母上は」

「死んだよ。街の外れで力尽きて。だから、ちよつとグリウスに立ち寄りたくなつたんだ」

再びウエルが何かを言おうとした時、扉が開かれた。

トレーネが入ってくる。

少し怯えたように、ウエルとシャオンを見たが、直ぐに後ろにいる者達に椅子を勧め、自分は戸口に立った。

四人の男達がフードを目深に被っている。

うちの二人がフードを取りながら椅子に腰掛けた。エリオンとフェンダーだ。

いつもなら二つの入口を見張りに行くはずの護衛の二人は、今日はエリオンとフェンダーの両脇を固めて立った。フードを取ると、いずれ劣らぬ精悍な戦士といえる鋭い目付きの持ち主だ。両腕は剣を振るうに十分な筋肉で覆われている。

エリオンは険阻な顔でじつとシャオンを睨みつけていた。

フェンダーも探るようにシャオンを見た。

シャオンも今日は顔を隠さずに、二人を見据えている。

「なるほど、初めて見た時に、なんとなく見たことがあると思っただけだ」

フェンダーは豪放磊落にもエリオンを前に言った。無論エリオンが冷酷な瞳をフェンダーに向けたことは言うまでもない。

「マリノワ様に似ておられる」

シャオンは警戒したようにフェンダーを見た。

マリノワという名の人物に対する言葉遣いまで違っている。厳つい無精ひげの生えた顔までがどこか優しさを帯びていた。

「いやいや。御美しかったので、よく記憶しているのだ。私は直ぐに東の国境に送られたから、それ以後のことはよくは知らん」

「お喋りはその位にしておけ、フェンダー」

エリオンがいかにも傲然と腕を組み隣のフェンダーを諫めると、フェンダーも直ぐに頭を下げた。

エリオンは腹立たしそうに鼻を鳴らし、隣に立つ兵に顎で合図を送った。

兵の一人は懐から巻物を出し、それを小さな机の上に広げた。

完全に広げ終わる前に、エリオンが兵の手を止め、ウエルを見上げる。

「我々に力を貸すことに異存はないのだな。今更、とは思うが」

挑むようなエリオンに、ウエルは相変わらぬ微笑で返した。

「そう申し上げました」

「何故、我々に協力する？」

ウエルは小さく首を傾げた。

「フェンダー殿にも申し上げましたよ。何も御奉仕しようとしているわけではありませんからね」

エリオンの片眉がきつと持ち上がって唇が歪んだが、そのまま兵の腕を押さえていた手を離した。

兵の手で、紙が広げられる。

そこにはグリウス城の見取り図とも言えるものが描かれていた。

迷路のように入り組んだ城門から城の入口までの道のり、水路の配置。衛兵の巡回順路が赤色で示されている。城内は一階の部分が詳しく描かれ、奥にある階段から四階までが省かれ、最後に四階部分がまた詳しく地図として描かれている。

「これは……」

とは、ウエルの言葉だ。

ここまで丁寧に仕上げるには余程の時間がかかっていることが一

目瞭然だ。

「よく見る」

エリオンは言葉を発するたびにシャオンを睨みつけながら、青で示された線を指で辿った。

「この青い線は隠し通路だ。我々がいつも使っている。これはとある民家に通じていて、城のほうは巧妙な隠し扉となっている。ここから進入するのだ」

シャオンとウエルは身を乗り出して地図に見入った。

「この赤い線が兵の見回り順路です」

今度はフェンダーが、剣を振るうに相応しい太い指で赤い線を辿って見せた。

「ただし、ある時間だけは、この城の隠し扉から城の入口までが兵の監視の目から逃れられるように私がこの順路を組みました。だから、私共はこうしてここにいますのです。これを逆に利用し、神官殿が城に侵入する際の入口とします」

「なるほど」

ウエルが感心したように頷いた。

「で？」

続けてエリオンとフェンダーに話を促す。フェンダーはひとつ咳払いをして続けた。

「先触れでは五日後に、いや日が変わったので四日後ですな、シエバ王が到着致します。」

到着したその夜、もちろんシエバはこのグリウス城で一番安全で豪華な部屋に宿泊するでしょう」

そう言ってフェンダーは、城の入口から指を滑らせ、階段を上がり、四階部分の一番広い部屋を指差した。四階部分でもそれは最奥にあり、幾重もの扉を介して進まねば入れない部屋だった。

「ここです」

「もちろんシエバが到着すれば兵の数も増えるだろう。だが、城の入口までは確実に入れる。その後は、フェンダーの作った警備の隙

をかいくぐって四階に上がる。部屋の奥には私の名を使えば容易く入れる。私は息子だからな、一応。そこからが戦いだ」

エリオンは興奮したように椅子に深く掛けなおした。

ウエルとシャオン、エリオンとフェンダーはしばし机に置かれたグリウス城の地図を無言で眺めていた。

「では、私は妖獣が現れた場合、力を貸せばよろしいのですか」

「そうだ」

言いながらエリオンはまたシャオンを睨む。

「ふむ……」

ウエルは形のよい顎に手を添えたまま地図を睨んだ。

「お聞きしたいことが二つあります」

「なんなりと」

とは、フェンダーである。

「ひとつはシエバがグリユックに何をしに来るのか、ということ。

もうひとつは現在、城内に妖獣はいるのかということだ」

「シエバは隣国アキロに侵攻する為に来るのです。それから妖獣はいないと思います。殆どはエリオン様に付き従って来た者ばかりですし、新参のメデスも普通に見えます」

「ではシエバが到着すればどうです？」

ウエルが上目遣いにフェンダーとエリオンを見、二人は困惑したように顔を見合わせた。が、二人が何か言うより早くウエルが先を続けた。

「当然、妖獣がシエバの周りには多くいるでしょう。どうやらシエバには心を食べる妖霊が取り付いていると思われれます」

「心を食べる？」

「そうです」

目を丸くしているエリオンに、ウエルはひとつ息をついてから話し出した。

シエバの心の黒い野望、つまりは負の意識を食べる妖霊がいること。それは簡単に伝染し増殖し、闇を引き寄せ、さらに強く深い闇、つ

まり妖獣を呼ぶこと。シエバを中心に妖獣が巣くっている可能性があることを話した。

「私一人で、それらに対することが出来るかどうかはわかりませんが、それから、これはとても重要なことですが……今現在もグリユックには妖獣がいますよ」

冷静そのもののウエルの言葉に、エリオンとフェンダーは再び顔を見合わせた。驚きに満ちた顔を。

「昨日、街を歩いてきました。街には妖獣の使いにされている兵が歩いています」

呆然とする二人に、シャオンが初めて口を開いた。

「四階まで行けたとしたって、そこにはわんさと敵がいる。俺ら六人で何が出来るってんだ？」

エリオンは勢いよく身を起こして立ち上がった。

「刺し違えたって、シエバの息の根を止めてみせる」

「言うだけなら簡単なんだよ」

シャオンは吐き捨てるように言った。立ち上がったエリオンの怒りに満ちた顔を下から睨む。

「やめましょう、シャオン。今は、もつと確実な計画を立てるので」

ウエルの顔からは、また微笑が消えていた。

「つまりは、この城門から入口までの道も既に安心ではないということですよ。妖獣の目にされている役人はフェンダー殿の指示に従って行動してはいけません。そしてシエバが到着すれば、妖獣の数は一気に増え、グリウス城自体に闇の結界が張られる恐れがあります。聖なる力の私がそれに触れれば、たちどころにシエバの知るところとなるでしょう」

エリオンは端正な顔を険しくしたまま、椅子に腰を下ろした。フェンダーもため息をついている。もちろん両脇に立つ兵も互いに目を見合わせ、不安げな表情に変わっていた。

この完璧な地図を仕上げ、ウエルという力を得たエリオンが、ど

んなにこの計画に自信を持っていたのか、シャオンには手に取るように分かった。

それでも事実は事実だ。街には傀儡人形が歩き、シエバは強大な闇の力を持っている。たった六人でむやみに斬り込んでいったところで、一国の皇帝シエバが倒せるはずもない。

シャオンは今まで、いろんな修羅場をくぐり抜けてきた。母親と死に別れてからは、死に物狂いで生きてきたのだ。それこそ命を懸けて戦ってきたのだ。もちろん妖獣とも斬り合った事もある。といつても人を食うような強力な妖獣には出会ったことはなかったが。シエバを倒すことなど、この人数ではもともと無理なことだったのだ。そんなことが簡単に出来るのならば、当の昔、自分がシエバに復讐していた。

だが、ウエルの口から出た言葉は、他の誰もが想像もし得なかった言葉だった。

ウエルはまるで今日の夕食はなんにしましょうか、などと軽口を叩くように、本当にさらりと言ったのだ。

「もっと確実な方法でシエバに迫りましょう」

みなが一斉にウエルに注目したことは言うまでもない。

第四章・伸びる闇からの触手 2

ウエルの顔は嬉々として輝いていた。こんな顔をしたウエルを、シャオンは見たことがなかった。

「私はこんな機会をずっと待っていたのかもしれませんが。本当は、すべてを忘れていたような振りをして、実はそれをこそ望んでいたのかもしれないね」

感慨深げに言う美貌の青年は、何か固い決意をこめたように静かに立ち上がり、トレーネに筆を借りることができると尋ねた。

トレーネはすぐにと返答し、しばらくして戻ってきた。手にした筆をウエルに手渡す。ウエルは丁寧に礼を言くと、机に広げられた紙に向かった。

ウエルは筆をとって紙に線を書き入れた。グリウス城の四階の最奥の王の私室から、線はすつと階下に下り、城門の傍を抜け、隠し戸のある民家の横を通り、何も無い空間へとすすんだ。

その空間に小さく家を描き込み「トラオ」と名を入れた。

みなが息を呑んでいることにもかまわずに、ウエルはその線の途中からまた書き足し、今度はトラオとは正反対の方向へ伸ばした。

そこにも小さく家を描き「神殿」と書いた。

「これは代々のグリユック王家の王だけが使う隠し通路です」

全員が同時にウエルを見た。

「いったい何を言っているのか、咄嗟には判断が付きかねたからだ。

シャオンが立ち上がって、ウエルの肩に手を乗せた。

「ちよつ、と待っていてくれ。そりゃどうということだ」

「どうもこうも」

ウエルはいつものゆつたりと丁寧な口調を貫いてはいるが、はやる心が抑えきれないのか心持ち早口になっている。

「この道を使えば、誰一人傷つくことなくシエバ王の喉元に食らいつくことが出来ますよ」

地図に目を落として釘付けになっていたエリオンがゆっくり顔を上げ、ウエルを見上げた。

無論、不信感をあらわにしてだ。いま現在グリユツクのグリウス城にいる自分達すら知らぬ地下通路を使おうと提案するこの人物に對して。

「お前、誰だ」

エリオンが上目遣いで、探るように低い声で尋ねた。

ウエルは小さく息をつき、肩をすくめた。

「ここで誤魔化しても、エリオン殿は信じては下さいますまい。嘘は嫌いですが、ひとつだけ端折ったことがあります。私の本当の名は、ウエルトス　ウエルトスリディウス・ゼディウス・グリウス　||ラ・グリユツクと申します。それでわかりでしょうか？」

瞬間、シャオンのウエルの肩に乗っていた手が、力を失って落ちた。

そこにいた全員が、ウエルの言葉の真意を計れず呆けた表情になっていた。

名にグリウスを持つ、彼の真の正体を、一体誰が直ぐに想像できたらうか。

「二度は言えません。何度言っても、誰も覚えては下さいませんか  
らね」

ウエルはそう言っていていつもより少し口の端を持ち上げて、誰をも魅了する笑みを見せた。

彼には今、冷徹とした犯しがたい気品がある。

だが、その微笑みは一瞬後に消え去った。

「ですから、シエバは私には宿敵、父グリユツク王と母の仇です」  
ウエルの感情を抑えた低い声が、狭い部屋の中にいる六人の耳に届いた。無理に感情を抑えたそれは、とても胸の詰まる、悲痛な叫び声と誰もが錯覚しそうだった。

エリオンも、そしてフェンダーも、誰も声を出さなかった。

それは詰まる所、ここにいるシャオンさえも、ウエルにとっては

敵なのだ。

グリユック王家、ただ一人の生き残りにしてみれば。

部屋の入り口で、トレーネだけが手で口を覆って瞳を潤ませていた。

どれほどの沈黙だったろうか。

誰もが、ウエルの言った言葉を頭の中で何度も反芻し、それでも現実を直ぐには受け入れられずに、戸惑った。

十五年前、グリユック王家の者は全員死亡したものと誰もが思っていたからだ。それほどに惨烈な侵略であった。

「……でも、それは昔のことです。私が仇をとったところで何も生み出しはしません。そのことは重々承知しているつもりですから」  
ウエルはエリオンの顔を見た。エリオンは眉をひそめてそれに戻した。

「どついう意味か、説明してくれないか」

「お分かりではありませんか？」

真っ直ぐなウエルの瞳にエリオンはたじろいだように唇を小さく尖らせた。

「シエバを倒しても、私にグリユックが戻ってくるわけでもありません。私にはすでに従う臣下もいません。いまさら王を名乗ったところで、この国が混乱するのは目に見えていることです」

ウエルは意識してかせずか、一呼吸おいてふたたびエリオンとフエンダーの顔を見た。

「シエバを暗殺することは、まあ容易いとは言えませんが不可能ではないでしょう。けれどその後のことのほうが、何倍も大変なのです。国を、建て直さなくてはならないのですから」

「そんなこと！ 貴様に言われたくはない。貴様を信じたわけではないからな！」

エリオンは、ウエルがあまりに穏やかに淡々と語るので机に拳を振り下ろし、憤慨して吼えた。

「でしたら、私には何も言うことはありません」

ウエルは机の上に広げられた紙に目を落とした。  
トラオと書いた家を指差す。

「これはこの旅亭のことです。トレーネ」

「は、はいっ」

トレーネは瞳に溢れそうになっていた涙を手で拭くと一歩前に進み出た。

「この家の、どこか、使われていない部屋がありませんか？ もしかしたら、トレルオムが封印しているかもしれません」

「あります！ この部屋の隣は父が物置のように使っていたのですが、亡くなつてからはそのまま、もうずっと開けていません」

トレーネは扉の一方を指差し興奮したように言った。

「ではそこが入口です。そこから地下に入って、王宮の四階、王の間に続いているのです」

一同は一斉に机上の地図に見入った。

エリオンとフェンダーは懐疑的に、二人の兵士は互いに目を見合わせながら驚きの表情を隠さず、トレーネは地図と扉を交互に見、シャオンは地図から目を上げ沈痛な面持ちで隣のウエルを見上げる。

「昔……」

ウエルは懐かしそうに目を細めて、トレーネを見た。

「子供の頃、父に連れられてここに来ました。トレルオムは列記としたグリユック王家の臣下、この地下通路の扉を守る番人でした……この部屋は、はつきり覚えていませんが、向こうの扉は裏口でしょうか？ 確か目立たない道に出たはずですよ」

「そうだ。だから、我々もここから出入りしている」

エリオンがその扉を顎でしゃくった。それから、はっと気付いたようにウエルを見た。

フェンダーもほおつと頷いた。

「なるほど、それでこの裏口は目立たないのですな。そう言われると納得することもある。少し行くと、直ぐに隠し扉の民家があつて、いつも目立たずに出入りできる」

「グリウスはそれ自体がすでに城のようなものなのです」

ウエルはそう言って、自らが書き記した印を辿り、王城の王の間に辿り着いた。

「そして、ここ。王の間の入口は現在、聖術によって隠されています。父王が私をここから逃がす時、元々仕掛けられていた力の封印を解き、そこを閉鎖しました。妖獣どもに見つからないように目隠しを施してあります」

ウエルはおもむろに立ち上がり、

「では、行ってみましょうか」

と、涼しい顔で言った。

皆が一斉にウエルを見上げる。

「今から？」

エリオンがウエルに抗議の声を上げた。

「そうです」

皆の反応に対して、ウエルの声は急に厳しいものへと変わった。

「シエバが四日後に到着するという保障はありません。むしろ早くなると思っておいたほうがいい。それ位でちょうどです。狙うなら、到着したその日。ほかにありますか？」

否を唱える者がいるはずもなかった。

シャオンだけが、再び真っ白な迷霧の彼方へ、誘われたかのようにであった。

第四章・伸びる闇からの触手 3

密会していた部屋の隣は、小さな物置部屋だった。

トレルオムが亡くなって三年、ほとんど放置されたままだった部屋は、埃つぼく湿気ていた。小さな明り取りの窓があり、古い本や棚に積み上げられた箱が所狭しと置いてある他は何もない。確かに部屋は、これでは残されたトレーネが整頓しようという気持ちにならないもの理解できるほど雑然としている。床には東方の織物と思しき、金糸の入った敷物が敷いてある。それも汚れていて、かなりの古さであることは疑いようもない。

狭い部屋に、トレーネを先頭に七人が入ろうとしていた。

「ここです」

トレーネは思わず手で口元を覆っていた。

それほどに埃っぽい。

「すみません。掃除していません」

手で宙を払う仕草をしながら、トレーネは足元に積まれた本を退ける。

次に部屋を覗いたウエルが、一目見てこの部屋が出口であることを告げた。

積みまれた荷物の隙間はちょうど一人がゆっくり通れる幅。ウエルが臆せず真ん中辺りに進むと、敷物がわずかによれている。

ウエルがその敷物を摘むとするりと持ち上がった。

同時に感嘆の声が上がる。

敷物の無くなった床には扉が付いていた。

重く軋む音ともに、扉が持ち上がる。

瞬間、湿気つてかび臭く混濁した冷気が物置部屋になだれ込んできた。肌があわ立ち、自らの腕をつい摩ってしまいたくなるような冷気だ。

その暗い通路を覗き込むウエルの悲壮な表情がシャオンの目には

いった。胸が痛くなるような十五年という歳月をシャオンは感じていた。

グリユックが侵攻されて十五年。王家が滅びて、少なくともこの通路を使う者はいなくなったのだ。

ウエルとシャオンはくしくも同じ年、同じ時に大切なものを失った。

一人は母親と左目を。一人は国も肉親もすべてを。

仇は共にシエバだ。それだけは同じ。

仇は同じでも、シャオンがシエバの息子であるという事実はどう足掻こうが変えようもない。それだけではない、ウエルはグリユックの王の子供だった。

シャオンはウエルの硬い表情を見て思った。この瞬間初めて。

ウエルが自分のことを本当はどう思ったのか、と。

ウエルはシャオンの持つ力が闇に属する力であることを知っていて、それでも何も変わらずに今まで共にいてくれた。そしてシエバ皇帝の息子であることを知ってもなお、態度を変えずに今までと同じように笑っている。

ウエルは決して自らの心の内を顔には出さないし言葉にも表さない。そんな事は重々承知の上だったが、それがシャオンには喉に痞えたような息苦しい思いを沸き立たせるのだ。

いつその事、憎いシエバの息子だと責め立てられた方がマシではないかと思うほど。

未だその思いの正体を漠然としかシャオンは理解してはいなかったけれど。

「一度降りてみましょう。使い物になるかどうか、多少の不安が残りますからね」

ウエルはそう言って、梯子を降りていく。

シャオンもウエルの言葉に我に返り、後に続いた。トレーネ、エリオン、二人の騎士、それにフェンダーも。

通路の中は、真つ暗だった。

あらかじめトレーネが用意していた明かりが灯される。

炎はジジツという音を立てて、わずかな冷たい風を受けて揺らいだ。空気は湿気って肌にまとわり付き、独特の埃っぽい匂いが鼻に付いた。

石に囲まれた狭い通路。足元は濡れたようにしっとりとしている。崩れた様子もなく、何の障害もなく通れる。七人はその通路をゆっくりと歩いていった。

途中、足を滑らせたトレーネが恐縮したようにエリオンの腕に掴まった他は、誰も口を開かず、ただ仄暗い通路を真っ直ぐに進んで行く。

どれほど歩いたのか、時間と距離の間隔さえあいまいになるほど何の変化もない通路で、突然それは二手に分かれた。

「こちらがもう一つの出口である神殿に向かうはずです」  
直進する方を指差してウエルが言う。

「こちらが、王室へと続く道」

一同は左に曲がった先を確認するように覗き込んだ。無論その先が見えるはずもない。

「本当にこんなものがあるとはなあ。つくづくグリユックとはすごい国だ。長年にわたって南方の要所になってきただけはある」

エリオンはウエルを見て、頷いた。

「よし。この通路を使おう。我々の敵はただ一人。シエバだ。」

エリオンの小さいが威厳に満ちた声に、フェンダーも頷いた。従った二人の騎士も。

一同はそこで一旦引き返すことにした。

もちろんエリオンとフェンダー達はまた監視の隙をついてグリウス城に戻らねばならないからだ。

帰り道、何となく後方に回ったシャオンは、先行く明かりを持つウエルに遅れない程度に間隔を取って歩いていた。

そこへフェンダーがシャオンの歩調に合わせてきた。

「あなたが噂のシエバ王の末子だったとは、驚きだ」

フェンダーは小声でシャオンに囁きかけた。薄暗いので表情はわからないが、声の調子は全く変わらない。

「噂ってなんだよ」

シャオンのほうは不機嫌そうに返した。

フェンダーは声を殺して笑うと、「まあそう怒りなさんな」と気安く肩を掴んできた。

シャオンはその手をとつさに払い除けた。睨み付けることも忘れずに。

「私はねえ、いちいちシエバのすることに楯突いたので、東の最前線にほり出されたのだ。だから何も知らんと言ったでしょう。でも噂なら風の頼りに聞くことはできる。シエバの末子はその血を受け継ぎ、後を継ぐに相応しい妖獣だとね」

シャオンの足が止まった。

「だから噂だと言っている。ところがその噂は、グリユックを侵攻した頃からぴたりとやんだ。ま、遠く東にいたのでは真実のほどは分からんからね」

「ふんっ」

フェンダーは低く笑った。

「剣は、誰に教わった？」

「別に」

「そりゃあ、いかな。肩を掴んだ感じでは、しっかり肉は付いているようだし、この前の一振りで筋の良さは分かった。どうだ、教えてやるうか？」

シャオンは明かりが遠のくのもかまわずにフェンダーを見た。

「おっさんは何でシエバをやりたいんだ？」

「きまっている」

フェンダーは間髪をいれずに答えた。

「東の戦線でも、妖獣はいた。あれは侵攻ではない。一方的な虐殺だ。」

答える声が怒りに震えているように聞こえた。

「対する国を褒めたいね。もちろん戦線が膠着するように私が戦を仕掛けなかったのだ。ま、おかげで、今度はグリユックに回されたわけだ」

笑いながらフェンダーは先に行く者達に追いつくために足を速めた。

シャオンにはとうてい笑える話ではなかったが、フェンダーという男が少しは分かったように思えた。

顎に生えた無精ひげもグリユックの兵をまとめる將軍にしては不謹慎に見えるし、そうかと思えばエリオンに従って皇帝の暗殺に加担する。どうも掴み処のない人物に思えたが、皇帝を暗殺しようと目論むだけの理由はどうやら持つてはいるようだ。

どうも一癖もふた癖もある人間達がここには集まっているらしい。シャオンにはそう思えた。無論自分も含めてだ。

岩を踏み歩く足音が、シャオンの耳には鮮明に届いている。その仲間の足音が、シャオンには妙に心地よく聞こえていた。

それはシャオンを地獄へと導く闇の魔王の誘いか、それとも、仲間の暖かな息吹なのか、はっきりと判別できなかった。

異変は、地下通路の出口に戻ったところで起こった。

七人全員が扉から出て、元通り敷物を敷いた。その時に。

「おい」

シャオンが物置部屋の扉を睨みウエルに声をかけた。

「どうしました？ 何か聞こえましたか？」

「なんだ？」

エリオンが二人の間に割って入ってきた。

シャオンが静かにするようにと、唇に人差し指を当てる。

右目が炯炯とした光を放ち、暫くしてその瞳が閉じられた。

緊迫した空気が狭い物置部屋に漂う。

「外に何かいる。人間じゃあねえ。足音がおかしい、そう、四足だ。

ああ、四足だから何匹いるかはつきりしねえなあ」

「四足だ？ 何を言っているのだ」

エリオンがフェンダーと目を見合わせた。

「付けられましたね」

ウエルが妙に冷静な声で言うとエリオンとフェンダー達を見た。

「付けられたとは、我々がですか？」

「そうです。その危険があるとは思っていましたが、こんなに早く……」

フェンダーは無精ひげの生えた顎に手を当てた。

「帰れないということか」

「何言つてんだおっさん。んなもん蹴散らしゃあいい」

シャオンが剣の柄を握り締めて言う。

「ふんっ、簡単に言ってくれるな」

フェンダーも不敵に微笑んだ。

「待つて下さい、二人とも」

ウエルが今にも扉から飛び出しそうな二人の前に立った。

「エリオン殿、今回の事がどこからか漏れはしませんでしたか？」

「馬鹿を言うな。そんな事があるはずはない」

「では……」

ウエルは物置部屋の扉に手をかけながら続けた。

「エリオン殿も監視されていた恐れがありますね。妖獣の一人がグ

リウス城の中に確実にいて、それが傀儡役人を操ったり、シエバと

の連絡中継をしたりしているのでしょうか。心当たりは？」

「あるわけではない」

エリオンは至極不機嫌そうに答えた。

「先ほども言いましたが、エリオン様に付き従うものがほとんどでした。新参のメデスも皇太子、つまりは本国におられるエリオン様の兄君に仕えていた者。皇太子ゲリュオン様もエリオン様同様、シエバ皇帝に対しては同じお考えと思っております」

ウエルはフェンダーの答えに頷きつつ、扉を開けた。

「それでは、もう城へは戻れません。敵が分からねば手の打ちようもありませんからね。とにかく外の敵を何とかして、地下通路から神殿へ逃れましょう」

「神殿？」

エリオンとフェンダー、シャオンが異口同音に言った。

「そうです。ご存じないかもしれませんが、神殿には聖なる結界が張られています。闇の力は簡単には進入できません。私もシエバの侵攻から逃れて三年もの間神殿にいました」

闇の力？

シャオンの心臓が大きくひとつ打ち鳴らされた。

心の中でその言葉を反芻する。

自分がその力に属することを、シャオンはウエルから聞かされたばかりだ。神殿の結界から弾き出される姿を想像して、シャオンは背筋が寒くなった。

だがとにかく今は外の敵だ。

うかうかして旅亭トラオの中にまで襲い掛かれては、大勢の宿泊客や従業員達に迷惑がかかる。

「いくぞ」

シャオンはウエルが開けた扉から、一番に身を翻した。

物置部屋から直ぐ隣の、いつも密会する部屋を抜け、さらに小さな円卓のある部屋に出た。

「その扉の向こうが裏口です」

トレエネが入口を指差す。

シャオンが裏口の取っ手に手をかけた。

「いいか、行くぞ」

「待って下さい。トレエネ、エリオン殿を奥へお願いします。それから扉には鍵を。どんな物音を聞いても決して開けてはなりませんよ。そう、フェンダー殿が扉を叩いて合図して依頼するまでは、決して開けてはなりません」

ウエルがフェンダーに目配せしながらトレエネに低い声で告げた。

途端にエリオンがウエルの肩に掴みかかってくる。

「私を除け者にするつもりか！」

だがエリオンを制したのはウエルではなくフェンダーだった。

「エリオン様、あなた様がやられては、もともこもありません。ここはウエル殿のおっしゃる通りだ」

エリオンは言葉にぐっと詰まった様子だったが、トレーネが腕を取り、奥を指し示したので、素直に従った。

エリオンとトレーネが下がったのを見て、ウエルとシャオンは視線を交わした。

「久しぶりに血が騒ぐぜ」

「夜も更けていますから、ほどほどに」

シャオンが嬉々として唇を持ち上げると、ウエルもいつもの微笑でそれに返す。それを見てフェンダーが呆れ返ったように溜息をついた。

「あなた達は本当に変わっている」

「行くぜ、おっさん。生きてたら、剣の手解き頼むぜ。まあ、いらねえと思うがよ」

シャオンとウエル、フェンダーと二人の騎士が、滑り出すようにトラオの裏口から出た。

それを見てトレーネが祈るように手を組むと、ウエルに言われた通りに扉に鍵をかけた。

「さあ、エリオン様、奥に参りましょう」

第四章・伸びる闇からの触手 4

「どんだけいるんだ？」

細く欠けた月の弱々しい光の中、紅く揺らぐ光が点々と見えた。闇に溶けた姿ははつきりとは見えない。ただ、紅い光だけがゆっくりとトラオの入口に立つ五人に向かってくるのだ。

「こいつら一つ目か？」

「いいえ、よく見ていて下さい」

ウエルがそう言つて剣の柄を握りなおした。

紅い光は、ざつと数えて十個ある。だが光は一つ増えたり、三つ増えたりと定まらない。

足音はない。いや、シャオンは聞いたのだから、人の耳には決して届かない。

夜の闇の静寂に溶け込んでしまったように、時おり吹く弱々しい風が耳元を撫ぜていく音しか聞こえない。

紅い光が浮遊するようにゆっくりとほんの手前まで近寄ってきた。

五人が一斉に剣を抜き放つ。

先頭にシャオンが立ち、後ろに四人が並んだ。

トラオの裏口に灯された灯で、敵の姿が浮かび上がる。

それは豹の様にしなやかな体を持つ四足の獣だった。

黒い艶やかな皮膚には体毛はない。顔の中央にある紅い瞳は、顔の大きさの割には不釣り合いに大きく見え、中央には縦に真っ直ぐ切れた黒い虹彩がある。それだけでも異常なのに、顔を横に向けるとまた同じ瞳が、そしてもう一方に顔を向けるとそこにも瞳があるのだ。つまりは顔の正面と横にそれぞれ一つずつ目がある、三つ目なのだ。口からは四本の牙が覗く。それも動物の犬歯の三倍はある長さで、乳白色に緩く弧を描き、先端は針のように鋭く尖っていた。

足は長く、跳躍に長けていることがうかがえる。

「なんだ、こいつら」

「三つ目ですね。気をつけましょう。視野はほぼ三百六十度、周囲すべてが見えているのですよ」

ウエルとシャオンの会話に、フェンダーが割って入ってきた。

「神官殿、影がないですぞ」

確かにフェンダーの言う通り、化け物には影がなかった。ウエル達には薄い月明かりの影が出来ているというのに。

さっそく一匹が躍りかかってきた。まるで蝶が飛び立つように、何の前触れもなく飛び立つ。

同時に、五人はちりじりに散った。

まず、シャオンが躍りかかってきた化け物の頭に剣を振り下ろした。剣は真っ直ぐに化け物の頭に滑り込んで真っ二つにした。

はずだった。

剣は何の手ごたえもなく、化け物の体をすり抜けた。

「げっ」

シャオンは訳の分からない悲鳴をあげた。

化け物の牙は、咄嗟に避けたもののシャオンの右腕をかすめる。

「つつ、斬れねえぞ！ 体はまがいもんだが、牙だけは本物かよ」

右腕からは一筋の赤いものが流れた。

直ぐに体勢を立て直したものの、向かってくる獣の牙を受けるだけで精一杯になる。斬ることもできず、急所もはつきりしない。

一方、ウエルも間髪おかずに飛び掛ってくる化け物の牙を剣で受けていた。

フェンダーと二人の騎士達にも、均等に二匹ずつだ。

だが斬ろうが突こうが、黒い獣は叫び声一つあげずに襲い掛かってくる。

剣と牙が火花を散らす中、ウエルが一瞬の隙に二匹の獣に剣を銜えられた。

凄まじい力で抑え込まれる。

ウエルは剣を銜えさせたまま、闇夜に吹く風の聖霊に祈りを捧げていた。

二匹の獣がウエルの剣を噛み砕く。  
刹那。

突風が吹きつけ、二匹の獣を吹き飛ばした。  
ウエルは胸元に手を当て、瞳を閉じている。

黄金の髪は風にあおられてなびき、まるで金色の光を背にウエルが立ったような錯覚に陥る。

その時ウエルの体から閃光がひらめき、光が闇をなぎ払った。

シャオンもフェンダーも、そして騎士たちも、一瞬視力を失って腕で目を覆った。

「いました。シャオン、右の角です」

ウエルの声が、シャオンの耳に届く。

目を開けると、黒い獣は紅く揺らぐ瞳を閉じて、身を低くしていた。

「右？」

シャオンはまだ光が残像となつてちらつく瞳を擦ると、目を凝らしてウエルの言うほうを見た。

そこには木偶人形のように立ち尽くしたままの役人が立っていた。肩から赤い布を掛け、一目でシエバの家来であることが分かる姿で。ただ、瞳には赤い炎のような色がちらちらと揺らめいている。

シャオンは目の前で徐々に視力を取り戻しつつある黒い獣の牙を左手で掴むと一匹を引きずってもう一方の獣に向かって投げ倒した。そのまま剣を倒れた獣の口に突き立てる。

剣が役に立たなかったはずの黒い獣は、いとも簡単に石畳の路地に縫いとめられた。

「ありや、口だけは本物か」

シャオンは素早く縫いとめた獣を飛び越えると、真っ直ぐに役人の元に駆け寄った。

役人はシャオンが近付いてきても、身動き一つせずただ立っているだけだった。

「すまねえな」

同時に、シャオンの拳は呆気なく役人の腹に減り込んだ。役人は崩れるように倒れこむ。それを間一髪受け止めた。

「本当に、目にされてるだけか」

「わあっ！ なんだ？」

フェンダーの叫び声にシャオンが振り向くと、ちょうど黒い獣達が集まるで風にさらわれた黒い霧のように、陽炎たつて消えていくところだった。

やがて、黒い獣は跡形もなく消え去った。

「消えたぜ」

役人を抱えたまま、呆然と立つシャオンの元へ、フェンダー達もやってきた。

「傷は？」

「たいしたことねえよ。おっさんは？」

「なんともない」

騎士の一人が、傷を負った手で役人を抱えるシャオンに代わってくれた。もう一人は、懐から出した布を切り裂きシャオンの腕に巻く。

「悪いな、えっと」

「私はリグです。彼が、ドールク」

リグと名乗った騎士は、シャオンの腕に手際よく布を巻いて止血した。ドールクのほうは抱えた役人の顔を悲痛な面持ちで見つめている。

「知ってる奴か？」

「ええ」

「そいつに罪はないらしいぜ。ウエルが言うには操られてんだと。」

なあ、ウエル……」

振り向いたシャオンは硬直したように言葉を切って、トラオの裏口を見た。

そこに、裏口に背を預けて座り込み、膝の上に頭を乗せてぐったりしているウエルの姿を見たからだ。

「ウエルっ」

シャオンは駆け出してウエルに縋りついた。フェンダーも、リグも。役人を抱えていたドールクは一足遅れて。

シャオンがウエルの肩を掴んで揺ると、金の髪がわずかばかり持ち上がった。

「大丈夫か？ ウエル」

「なんとか」

大きく息を吐き、ゆるゆると持ち上げた顔は疲労の色が濃く、青白くさえ見えた。

「ちよつと強引に光を呼んだもので……大丈夫」

ウエルは膝に手を当てながら、ゆっくりと体を起こした。

「このまま、神殿に向かわねばなりません。それに中で、エリオン殿が苛々してお待ちでしょうから」

「でもお前」

「大丈夫ですよ」

シャオンの心配をよそに、ウエルはいつもの微笑をフェンダー達に向けた。

「ウエル殿、あれは妖獣なのですか？」

フェンダーは裏口の扉を開けるように中のトレーネを呼び出し、鍵を開けさせて、ウエルに中に入るように促しながら聞いた。

ウエルも軽く礼をしながら答える。

「そうです。でもあれは幻。役人の目を使って放たれた幻影です。明らかに殺意がありましたかね」

「私と、エリオン殿を？」

「他に誰がいます？」

裏口を最後に入ったシャオンが閉めたところで、エリオンが奥から飛び出してきた。

ウエルが何か言いたげなエリオンより先に言う。

「話は後です。このまま神殿に向かいましょう。神殿には風の聖霊に頼んで使いを出しておきます」

「この役人はどうすんだよ」

シャオンがドールクの抱えた役人を指差した。

「可哀相だが、外に出そう。目が覚めて、また操られでもしたら厄介なことだ」

フェンダーの言葉に、ドールクが再び裏口から外に出た。

騎士ドールクが戻ってきてから、七人は再び地下通路のある物置部屋へと向かった。そこから繋がっているグリウスの神殿に向かうためである。無論シャオンとウエルは荷物をまとめて背負った。ウエルは剣が折れてしまったので、苦笑いしながら鞘だけを持った。

地下通路を隠していた敷物が除去され、再び暗い通路があらわになる。

ウエル、フェンダー、リグ、ドールクが通路に降り、エリオンがトレーネを促した。

「あの、私は行けません」

「何を言うのだ。このままここには危険だ」

「でもエリオン様。今も宿泊なさっているお客様がいるのです。それにこの通路を最後に隠す者がいます。私が、元通り敷物を敷いておきますから、皆様は安心して神殿にお向かい下さい」

トレーネは潤んだ瞳でエリオンを見ていた。

「だが」

「エリオン様。御武運をお祈りいたしております」

エリオンは今にも泣き出しそうに手を組んで祈るようなトレーネを前に、何事か言いかけるように口を開いたが、言葉が見つからないのか何も言わなかった。

「俺が残る」

シャオンがトレーネの後ろから言った。

「なに？」

「外に寝かせた役人も気になるし、少し様子を見てから神殿に行くよ。それならいいだろ。トレーネも連れて行くからよ」

「お前なんか信用できるか」

「なんだと」

「やめてください」

トレーネは言い争うエリオンとシャオンの間に入って、二人を止めた。もう涙だけはとめることが出来ないらしく、大きな瞳からは涙が溢れていた。

「シャオン」

地下通路からウエルが顔を出した。

「明日、必ず神殿に来てくれますね」

「もちろん」

シャオンが親指を立てて腕を出すと、ウエルは目を細めて頷き、また地下通路を降りていった。

シャオンはウエルの微笑で少し心が温まったような気がした。ウエルは自分を待っていてくれる。その言葉が、シャオンの心の奥深い所に鼓動と共に根付いた。

神殿には入ることが出来ないかもしれない。その危惧はもちろんあった。トレーネの護衛を申し出たのも、そのことがあったからだとも思う。

エリオンが舌打ちをしながら通路を降りていくのを見届けて、トレーネは扉を閉め、元通り敷物を敷いた。

暫く敷物を見下ろしていたトレーネが、手で目元を擦って涙を拭く姿がシャオンの目にとまった。

「心配か？」

トレーネは正直に頷いた。

「大丈夫だ、ウエルがついてる。ついで言うと、あんたには俺がいるから大丈夫だ」

自信満々なシャオンの言葉に、トレーネは涙に濡れた顔で微笑みを返した。

## 第五章・聖なる神殿 1

一夜が何事もなく明けた。

外に寝かせておいた傀儡役人は、翌朝いつのまにか姿を消していた。旅亭トラオの裏口付近にはウエルの折れた剣があっただきりで、他に何の痕跡もなかった。

昨夜の出来事が、まるで嘘のように、何も。

夜が更けていたこともあり、トラオの裏口付近に民家がなかったこともあって、異変に気づいた者も誰一人いない様子だった。いや、もっと探索すれば、あのウエルの放った鮮烈な光に気付いた者はいるかもしれない。

とにかく、トラオにはいつもどおりの朝がやってきた。

裏口直ぐの、円卓のある部屋で座ったまま剣を抱えて眠っていたシャオンは、トレーネが扉を開く音で目覚めた。

すぐさま剣の柄に手をあて、音のした方を向く。

「あんたか」

シャオンの鋭い右目を見て、一瞬息を呑んだように引いたトレーネだったが、すぐに笑顔になって言った。

「おはようございます。眠れなかったのではありませんか？」

「いや、あんたこそ、目が赤いが大丈夫か」

トレーネは微笑み返しただけで何も言わなかった。眠れたはずがない。

暗殺だの妖獣だの地下通路だの、とうていこの年の少女が経験しそうなことを、この数日の間にすべて見たのだ。平静でいるというほうが無理に決まっている。シャオンはそんな彼女に何か労わりの言葉をかけたかったのだが、気の利いた言葉は何一つ思い浮かばなかった。

「お食事です。私はこれからお客様を送り出して、後片付けをします。そのあと古くから仕えてくれている者に任せて、神殿に一緒に

しよつと思つのですけど」

「ああ、それでいい。悪いな」

トレーネが円卓に置いてくれた食事はいい匂いがした。焼きたてのパンが食欲をそそる。

「では、私は行きます」

トレーネは部屋を出て行った。

シャオンは暫くトレーネが出て行った扉を呆けたように見ていたが、とりあえずは空腹を満たすことにした。

ウエルは、どうしただろうか。

まだ暖かい食事に手をつけながら、ふとシャオンは思った。

ウエルと知り合ってから以来、ほぼ毎日と共に過ごしてきた。シャオン自身にとっても、気楽な毎日であった。ウエルとの言い合いでさえ、文句もいはいはしたが楽しいものだった。

それが、である。

グリユックに来てからというものの、息つく暇もなく変化が訪れる。エリオンが現れ、シェバがグリユックに向かってきている。

考えないようにしていた、自分の出生を目の前に突きつけられた。

そしてウエルは亡きグリユック王の子供だった。

自然と深い溜息がでた。

グリユック王の息子と、シェバ皇帝の息子。その二人が共に旅をしていたとは。

仇同士が。

シャオンはその考えを振り払うようにパンにかじりついた。今は考えまい。ウエルが自分をどう思っているかということとは。

シャオンは短時間で食事を済ませると、裏口の鍵を確認して、トレーネの元に向かった。

大半の客は食事を済ませ、グリユック治世十五年の祭りで賑わうグリウスの街へと向かっていった。トラオで働く者達は次の宿泊客

のために、これから準備に追われる。

トレーネも立ち止まることなく働いていた。

シャオンは食堂の一角の壁にもたれて腕を組み、トレーネを目で追っていた。

額に汗を浮かべ、なんと楽しそうに動くことが。鼻歌くらい歌っていそうに見える。時折シャオンの方を見ては微笑み返す顔があどけなく、トラオを一人で守っているとはすぐには信じがたい。

「あの、なにか」

「いや、べつに」

あまりにじつと見ていたせいか、トレーネが困ったように首を傾げていた。

何か手伝うと言った方がいいのか、シャオンのほうが困ってしま

う。  
「シャオン様って、面白いですね」

「お、おもしろい?」

トレーネは顔を綻ばせた。

シャオンはその笑顔に負けないように咳払いをして言う。

「その、シャオン様っていうのはやめてくれ。腹ん中がひっくり返りそうだ」

「でも」

シャオンはトレーネをじっと睨んだ。

「ダメ、様は」

トレーネが机を拭いていた手を止めて、シャオンのほうに近付いてきた。

「思わず身構えてしまう。」

「本当に、エリオン様とはご兄弟なんですか?」

「嫌だけど、そうみたいだ」

トレーネは青い瞳で、シャオンを覗き込むようにして見た。反射的に左の髪を撫で付け、一歩後ずさりたかったが、壁にもたれている手前それは叶わなかった。

「どことなく似ているんですね。初めて見た時、どこかで会ったような気がしてじっと見てしまったんです」

そう言えばトラオへ来た時、不審者を見るように眺められたことを思い出した。

「顔の傷は妖獣に？ 痛みますか？」

「そう、妖獣。もう昔の傷だし、痛くはないけど。慣れたって言うほうがいいかも」

トレーネはまた机を一つ一つ丁寧に拭き始めた。

三つほど拭いた所で、また手を止め、思いつめたようにシャオンを見る。

「エリオン様は、大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ。ウエルと一緒になんだ」

「ウエル様が父を尋ねて下さらなかったら、こんなことにはならなかった。いいえ、私が巻き込んでしまったのですものね。私、なんて謝っていいか」

机の上で湿った布を握り締め、俯いたままのトレーネはひどく小さく見えた。さっきまで楽しそうに手際よく宿の仕事をこなしていたのとはまるで別人のように、急に幼くなってみえた。

「でも、ウエルがいなかったら、もうエリオンは死んでたぞ」

「そんな！」

トレーネが肩を震わせて、顔を上げた。

「昨日も言ったけど、街には妖獣の目になってる役人がいる。きつと城にもいてエリオンを見張ってたはずだ。昨日ここに来たのが証拠さ。ウエルがいなかったら、もう昨日エリオンの命はなかったはずだ」

シャオンにはトレーネが息を呑むのが分かった。

ぐつと何かを堪えるように唇を噛んでいるのが分かる。さすがのシャオンにも、トレーネがエリオンをどう思っているのか、分かっってしまうほどに真剣な瞳だった。

誰もが、いろんな思いを抱えているんだな。

シャオンは漠然とそう思った。

壁に預けていた体を起こして、トレーネの傍にいく。それからトレーネの握り締めていた布を掠め取ると、小さな肩に手を乗せた。

「ここは俺がやるよ。早く他の仕事、やっちまいな。会いてえだろ、エリオンに。心配なんだろう?」

「シャオン様」

驚いたように大きな目を見開いているトレーネに、シャオンは首を横に振った。

「様は禁止」

言いながらシャオンは実に乱雑に机を拭き始めた。本人は丁寧に拭いているつもりかもしれないが。

けれどトレーネは笑わなかった。

「ありがとうございます」

その声は、無理やり絞り出したように、少しかすれていた。

「あ」

シャオンは急に声を上げた。

「ダメダメ、そんな腐った顔してちゃ、客が逃げるぞ」

破顔一笑したシャオンを見て、トレーネもつられて笑った。

シャオンは少女の笑顔に、どこか安堵した自分がいることに気付いた。

こんな事は早く終わらせてしまいたい。

シエバを倒し、憂いをなくして。エリオンも、フエンダーも、もちろん、みな無傷で。

それで?

シャオンの机を拭く手は、はたと止まった。

またウエルと旅をすることが出来るのだろうか。今まで通りとはいくまい。ウエルはグリユックの正当なる後継者だ。ウエルが何と言おうが、その事実を集って来る輩は必ずいるだろう。

「どうかしました?」

「いや。ほら、早く片付けちまおう」

トレーネは、ハイと返事をして食堂を後にした。  
心が冷えていく。足の指先から、ミシミシと体が心ごと凍り付い  
ていくようだった。

## 第五章・聖なる神殿 2

少し時はさかのぼって。

ウエル達はトラオから薄暗い道をひたすら歩いてた。

地下通路は相変わらず湿っぽくかび臭い。ずっとそこにいると、肺の隅々まで菌糸に冒され、呼吸困難に陥ってしまうのではないかという錯覚すら覚える。

トラオから神殿までは、グリウスのほぼ端から端までを歩くのと大差ない。

旅亭トラオはグリウスの東・サナオ側の街道付近にあり、神殿は正反対の西・アキ口側の街道付近にある。町の中を歩いてもゆうに半日弱はかかるのである。ただ地下通路は直線で結ばれているので、それよりははるかに早く着く。とはいえ、ただ薄暗く石で囲まれた何の変化もない通路を歩くのは、苦痛以外の何物でもない。

特に苦労知らずのエリオンなどは、不平不満を示す言葉はすべて口に出したといっても過言ではない。そんなエリオンを巧くフェンダーがなだめながら、やっと神殿に辿り着いたのは、まだ白々とわずかに明るくなり始めた夜明け前だった。

神殿は森厳な雰囲気の中にあつた。

白亜の石を使用した造りの建物は荘厳にそびえたち、グリウス城とはまた違う壮麗さがある。もちろん周囲の民家と変わらず、二階以上には石は積み上げられていない。が、敷地の広さは民家の比ではなく、グリウス城ほどではなくとも、かなりの広さがある。

民が参拝する本殿から、神官達が生活する社務所に宿所、神殿の管轄である学問所なども有し、周囲は大小さまざまな石を積み上げられた石垣で囲まれている。

地下通路の出口はそんな神殿の中央庭園の小さな森の中にあつた。「なんだ、ここは」

エリオンは石像の足元にあつた肩がようやく通る狭い出口を何と

か抜け出して開口一発そう言った。

そこはまさに庭園という名の相応しい場所であった。森といっても整然と花が植えられ、木々も雑然と生育しているわけではない。

石像は、賢者の祖といわれる穏やかな微笑を湛えた聖人のものだ。唯一違うのは空気だ。

凜と張り詰めた空気は清浄で、呼吸するたびに豊かな緑の香りが肺の隅々にまでいきわたり、思わず背筋を伸ばし深呼吸してしまう。植えられた花は、まるで歌でも歌いだしそうなほど、生き生きと輝いて見えた。

「なんと澄んだ空気だ」

フェンダーも辺りを見回す。

「聖なる結界の中です。澱んだものが一切ない、聖霊達の世界です。でも、この結界はまだ弱い。神殿の最高峰である賢者塔などは、背筋が凍りつくほど素晴らしい結界ですよ。さあ、とにかく出ましよう」

ウエルは一行を促した。

「神官長のゲフュール様が、きつとお待ちです」

「ゲフュール殿が？」

フェンダーが驚いたように聞き返した。

「そうです、ああ、来られました」

小さな森を抜けたところで、その人物の姿が目に入った。

小柄な老人だった。

身にまとうのはゆつたりとした薄い紫水晶色の衣。金の髪はすでに白く、ところどころに金の名残を残すだけだ。顔にはしわが刻まれてはいるが、瞳は快活とした輝きを失ってはいない。

「おお、何と云うこと。ウエルトス様。お久しゅうございます」  
老人は恭しく膝を折った。

「おやめ下さい。そんな事をしていただく身分ではありません」  
ウエルは跪く老人の手をとった。

「よくぞ、お戻りになりました。ご立派になられて」

「いいえ、それは私にはもったいないお言葉です」

ウエルはエリオン達には決して見せない寂寥とした表情でそう言った。

ゲフユールは、ウエルの後ろに立つ人物に、軽く会釈した。

「これは、自治領主殿。私めはグリユック総神官長のゲフユールと申します。さあ、話は中で。こちらでございます」

一行は神殿の社務所の隣にある小さな館へと案内された。小さいといっても、普通の民家の倍ほどはある。下には広間や客をもてなす為だけの部屋、食堂などもあり、上には客間だけでも五部屋はある。どうやらこの屋敷はすべてゲフユール一人のものらしい。

エリオンとフェンダー、リグとドールクがそれぞれ上階の部屋に通された。

ウエルだけはゲフユールと共に下に残る。

ゲフユールはエリオン達が部屋に入ったのを見届けてから、ウエルを自室へと案内した。

客人をもてなす為の椅子が置かれたきりの質素な空間だったが、そこはどうかやらゲフユールの私室であるらしい。

部屋に通されるなり、ウエルは神殿を統括するゲフユールに改めて頭を下げた。

「おやめくだされ。私は当たり前のことをしたまで。いやいやこうして再びお会い出来ただけで、長生きした甲斐もあるうというもの」

ウエルは、溢れそうになる涙を堪えるかのようにひっそりと唇を噛んでいた。いつも口元に浮かべている微笑はなく、どこか不安げで頼りなさそうなウエルがいる。きつとシャオンあたりが見れば、どこか体を悪くしたのではないかと慌てるかもしれない。それほど消え入りそうに線が細く見える。

ゲフユールは何も言わずにウエルを促して、さらに奥の部屋へと通した。

ゲフユールの部屋は、本人の気質そのままに実務的で質素だった。 unnecessaryな絵画や飾り、花などの装飾は一切なく、一方の壁は一面に書物が天井の高さ近くまで並んでいる。まだまだ紙の貴重な世では、この書物の量はグリウス王城の書物庫の比ではなく、また高名な画家の一枚などよりも価値が高いはずだ。あとは体を休めるための長椅子と、奥の別室に寝台があるだけだ。

「ああ、何も変わってはいません」

ゲフユールは呵呵と笑うと、ウエルに椅子を勧めて奥へと一旦入っていった。

ウエルは感慨深げに部屋を見渡した。

書物棚に近寄り、書物にそつと触れる。その口元には微かな笑みが戻っていた。

「どうじゃ、昔みたいにまたそこに座って本を読みなさるか？」

ウエルは小さく笑って、勧められるままに椅子に腰掛け、ゲフユールが入れてくれた暖かな飲み物に手をつけた。

「一度お休みになられるがいい。顔の色がすぐれぬでな」

「ありがとうございます」

「で？ あのエリオン殿は一体何をしようとなさっておいでか」

ウエルは息を小さく吐くと、姿勢を正してゲフユールに向き直った。

「偶然でした。いえ、グリウスに足を踏み入れた時、私の中にあつた真の願望がこうさせたのかもしれない」

ゲフユールはじつとウエルの言葉を待っているようだった。ウエルの伏せ目がちな瞳を穏やかに見ながら。

「初めは偶然だったのです。盗賊を追ううちにグリウスに入って、でもシエバの役人を目にした時、私は壊れてしまったのかもしれない。足は真つ直ぐにトレルオムの元に向いていました。一番に頭に浮かんだのです。予感、だったのでしょうか。いえ、こうなることを望んだのかもしれませんが。トレルオムに会えば、何か、分かる事があるのではないかと」

ウエルは親に叱られた子供のように、ゲフユールを縋るように見た。

ゲフユールは温和な笑みを浮かべたまま、何も言わない。

「あれほどに神官長様に仇を討つことを考えるなと諭されておきながら。私は禁を犯そうとしているのです」

ゲフユールの大きく暖かな手が、ウエルの手に重ねられた。

「そんな風に考えてはなりません。ウエルトス様を逃がされた陛下が、その時に何とお考えになったかは分かりません。しかし私ならウエルトス様だけでも生き延びて欲しいという一念だったと、思っただけです。諭したままでのことでございますから」

「ゲフユール様……」

ウエルは堪えるように瞳を強く閉じた。

溢れかえる思いを、まるでたった一人で堪えるように、強く、強く閉じた。

「私は弱い人間です。いつも共にいる仲間などと比べれば、私には芯の強さが欠けているのです」

囁くように呟いて、ウエルは項垂れた。けれどそれは、大きく深呼吸するほどの、ほんのわずかな間だった。

「シエバは妖獣だったのです、ゲフユール様」

「今、何と？」

ゲフユールがウエルに重ねた手を握り返してきた。

ウエルはその手に視線を落とし、次にゲフユールを見た。先程までの頼りなさそうなウエルではなく、厳しさを備えた青年の眼差しで。

「私が力を備えていたのも、神の啓示と考えることにしました」

ウエルはそつとゲフユールの手を退けると、襟元に手を忍ばせた。そこから細い革紐を引っ張り出す。

紐の先端には赤ん坊の握り拳大の麻袋がついていた。

「それは」

ゲフユールは日の光を見上げたように、少し眩しげにその袋を見

た。

「ゲフユール様には袋を見ただけでお分かりでしょうか」

「無論じゃ。それはもしや？」

ウエルは頷いて、袋を開けた。

中から、淡い淡い澄んだ紫翠の輝きを持つ石が出てきた。

艶やかに楕円の形をした石である。

「聖者ヴァルテミオス卿の力が込められているそうです。賢者塔で頂きました。これのおかげで私の聖なる力は増し、聖霊達の助けも非常に借りやすくなっています」

ゲフユールは瞠若したまま、まるで腫れ物にでも触るようにならずと手を差し伸べたが、首を横に振りながら手を戻した。

「これは何と。賢者の祖といわれる聖者ヴァルテミオスの力が？  
素晴らしい」

神殿を統括する賢者塔。ウエルはゲフユールに匿われた後、そこで育った。そこは聖霊力を持つ者達の最高峰、最高の力を研鑽し学ぶ場所である。

「お願いがございます」

「なんなりと」

ウエルは紫翠の石を袋に戻し、姿勢を正した。

「私はエリオン殿に従って、シエバを倒そうと思います。妖獣だと分かって、なおのことです。確かに仇という認識もあります。ですが、それ以上にグリウスの現状には胸が塞がりました。そのために、エリオン殿を神殿に匿いたいと思っています」

「大体の察しはついておりました。どうぞウエルトス様のお気の済むままに。私は協力を惜しみませぬ。しかし」

ゲフユールは目を細めた。

「ウエルトス様は、強ようなられた。いつも半ベソでおられたのが、嘘のようじゃの」

「ゲフユール様、それは」

ゲフユールはホホと笑った。

「分かっております。無理をなさいますな。あまり無理をなさると、笑顔が顔に張り付いてしまふ。のう、わしに気を使うことなど、ありはしませぬぞ」

その言葉にウエルは深く頭を下げた。ともすれば、涙が溢れそうになるのを、ウエルは必死で堪えていた。ここで、立ち止まってはいけない。今は、成すべき事を見つけたのだ、その思いだけが、ウエルを支えていた。

大きく息を吸い込む。そうすると、あたりに住まう聖霊達が体の中に力を与えてくれる。ウエルは居住まいを正した。

「ここはまだ結界の力が弱いのです。完全にエリオン殿を妖獣の目から隠すために、この石を使って結界を強くしたいと思います。本殿の奥、聖石の間に入ることをお許し下さい」

「では案内しましょう」

ゲフユールは腰に手を当てて、よつと掛け声をかけながら立ち上がった。

「ただし、それが終わりましたなら、まず食事をとり、後に睡眠をおとりになること、お約束下さるな」

ゲフユールは少年のような人懐こい笑みを浮かべた。

「はい」

ウエルも、保護者に素直に従うように、短く返答した。

これから本殿の奥に向かって、重要な布石を敷いておかねばならない。

シエバ暗殺までの間、妖獣の目から暫く隠れる場所を確保しておかなくてはならない。

本殿の奥には聖石の間というところがある。念が込められた石が安置され、神殿の石垣の中、四箇所にその石の欠片が埋め込まれている。それらを結ぶ神殿の内部がすべて結界の中に納まっているのだ。

二人はその部屋に向かっていた。ウエルの持つ紫翠の石の力を分け与え、結界をさらに完全なものにするために。

ウエルがゲフェールと共に本殿に向かっている頃。

エリオンとフェンダーの部屋にはリグとドールクもやってきて、四人で深刻な顔を突き合わせていた。

もちろん一番苦虫を噛み潰したような顔をしているのはエリオンである。

豪華な客室に不平不満があつたわけではない。

エリオンは椅子に腰掛け足を組んだまま、フェンダーを睨みつけていた。

腕も組みなおし、苛々した様に指が絶え間なく動いている。エリオンの腹の虫はどうにも収まりそうになかった。

今回の事を中心人物は自分自身だと自負している。ところが、フェンダーも何かとエリオンを蚊帳の外に置こうとし、幼い頃から兄達とともに蔑んできた妖獣の弟が行動をとみにし、さらにはウエルが主導権を握り始めている。エリオンには面白くないことばかりだった。

「ところでエリオン様」

「なんだ」

努めてぶっきらぼうに返す。

「どうやら今もグリウス城には妖獣がいるらしいですが、どうお思いになりますか？」

エリオンがフェンダーを睨みつけた。

「どうもこうも、信じられるか。この目で見たわけでもないのに。」

第一、誰が妖獣だというのだ。皆人間ではないか」

「確かにそうではありますが、昨夜のあの役人は確かに操られていたようでした。ウエル殿とシャオン殿がいなければ、我々もとうに消されていたかもしれませんぞ」

エリオンの険しい表情は一向に緩和しそうになかった。苛々と動く指も止まらずに動き続けている。

「化け物の父のすることだ。とうに私の考えにも気づいて刺客を送ったつもりだろうが、そうはいかん。グリユックの民のために、必ず仕留めてみせる」

エリオンの空を睨む表情からは決意の程が見て取れた。

父シエバの非道とも言える侵攻を、黙って見過ごすわけにはいかないのだ。

グリユックだけではない。今度はさらに隣国アキロをまでも攻めようとしているのだ。

ここで食い止めなければ、妖獣が世界を制する恐るべき国が魔の手を広げることになる。

「だが、城が気になる。私が戻らねば、メデス辺りも搜索を出すであろつし、あの無能な大臣達もさすがに黙ってはいまい」

「私もそれが気になります。それにここには、いつシエバが到着したのかも、どの部屋に宿所を置くのかも判然といたしませんなあ」

「あの」

そばに控えていたドールクが跪いて申し出た。

「私めが様子を見に参りましょうか。昨夜の役人のことも気になりますので」

エリオンがフェンダーに了解を取るように見た。

フェンダーも頷く。

エリオンも頷いた。

今はとにかく城の様子が気になった。城内の情報が全くないので心もとない。それにエリオンには、王の間にあるという地下通路の出口とやらを確かめてみたいという衝動もあった。ウエルがグリユックの王子であるという確証を得たわけではないからだ。

もしドールクが城の様子に異変を認めなければ、すぐにでも城に戻るつもりであった。

この時、エリオンは全く理解していなかった。

妖獣の真の恐ろしさと力を。

そして、東の戦線で妖獣と共に敵国に攻め入っていたフエンダーですら、闇の力を侮っていた。

何故ウエルがエリオンを神殿の結界の中に連れて来たのかを、二人はこの後に思い知らされることになる。

## 第五章・聖なる神殿 3

同じ頃、東の旅亭トラオでは、トレーネとシャオンが出立の準備を整えていた。

後片付けを半分ほど終わらせ、あとを古参の従業員に任せると、一晚留守にすると告げてトラオを後にした。もちろん、地下通路の出口である物置部屋にはしっかりと鍵をかけた。普段はトレーネ以外が使用することのない裏背戸もだ。

トラオには何の異変もなかった。シャオンが気抜けするほどに。必ずエリオンを狙って再び襲撃があると予想していたからだ。無論、エリオンの命を受けたドールクがグリウス城に侵入していることなど知る由もなかった。

トラオを出て、二人は神殿までを徒歩ではなく辻馬車を使って移動した。トレーネをつれて徒歩で歩くよりは辻馬車を利用したほうがはるかに早く到着できる。

シャオンは一刻も早くウエルと合流したかった。

ウエルと離れていることが不安で仕方がない。それが何故かを、シャオンは意識的に考えないようにしていた。

心のどこかで、自分が再び一人になることを恐れていることに、気づかぬ振りをしていたかったのかもしれない。この一年間、シャオンは孤独を忘れていた。ウエルとともに、旅をし、共に食事を取り、共に寝つてきた。

けれど、今は違う。それが、シャオンを不安にした。

シエバを倒した後、ウエルがどういう立場に置かれるか、自分がどうなるのか、はつきりとはしてはいないが、ただ一つ確かなことがある。

シエバの血を引くシャオンが、今まで通りウエルと共にいることはできない。

ウエルとの別れが待っているかもしれないことを、どこかで分か

っていた。

分かつているから、あえて考えないようにしている。

「あの……どうかしました？」

揺れる馬車の中で、向かいに座るトレーネが覗き込むようにして尋ねた。

シャオンは放心したように、車輪が石畳を蹴る音や馬の蹄の音、外の喧騒を聞いていたことに初めて気付いて顔を上げた。

「とても怖い顔、なさっていますよ」

「そう？」

トレーネは寂しげに微笑んだ。

「何だか色々あって、私も気分が棘々しています。父のことも何も知らなくて、ただエリオン様のお役に立ちたくて、ウエル様のことをフエンダー様にお話して。今だって何を言っているのか……分からない」

話しながら今にも泣き出しそうなトレーネに、シャオンは少し慌てた。こういう時の女性の扱いには、正直慣れていないし、気の利いたことを言える性格でもない。

「同じだよ、俺も」

シャオンは素っ気なく返したが、他に言いようがなかった。

それでもトレーネは、その一言が嬉しかったらしく安堵したように息をついた。

それきり二人は何も話はしなかったが、シャオンもトレーネの言葉で少し平常心を取り戻せたような気がしていた。

気が付くと、ウエルのことばかりを考えている。

シャオンは、気を取り直して、自らに言い聞かせた。

不確実な未来を不安がらずに、とにかく今は現実にしたいたい未来だけを見よう。

昼も随分過ぎた頃、辻馬車は神殿の少し手前で停まった。

神殿の正門の前は、参拝する者達で塞がっていたからだ。世界を創造したという神に特別な名はない。

名を付けるということは文字でそのものを縛ることであり、世界そのものである神を人間の言葉で縛ることは出来ないというのがその根本にある。

人々は命の根本である神に感謝するという行為を忘れることはない。

治世十五年の祭りが開かれているグリウスでは、特別な理由がなくとも、誰もが神殿を訪れる。

だから、神殿の前から、本殿に続く通路は人が多い。

左右から伸びる石垣の途切れているところが正門。それから並木道が続き、白い砂利が敷き詰められた道を行くと白亜の本殿が建っている。

シャオンとトレーネも、当然、神殿に参拝する者の一人という風に見え、誰も気にとめる者はいなかった。

辻馬車を降りてから神殿の正門へと足を運ぶ。

シャオンは門から奥に見える神殿を見た瞬間、ウエルの言葉が脳裏に甦って足が止まった。

闇の力は神殿の結界には入れない。

と、トレーネも合わせるようにして、足を止めた。

立ち止まるシャオンを不審に思って、同時に立ち止まったかにもえた。

だがトレーネは何も言わずにシャオンの服の裾を掴んだ。

シャオンも服の裾を引かれてトレーネの顔を振り返って見た。

トレーネはじっと何かを見ている。

シャオンはその視線の先にあるものを追った。

多くの参拝客に紛れて、彼は立っていた。

ただ、立っていたのだ。

どこか空ろな目で、恍惚としたような表情で。首を少し右に傾けて。

引き締まった体についた筋肉は盛り上がっていて、日々鍛えた体は一般人の中に混じっていると巨軀にさえ見える。だが、その鍛えられたはずの腕はだらりと下げられ、何の緊張もない。

「ドールク？」

シャオンは昨夜知ったばかりの名を半信半疑で言った。

呼ばれたほうは、軋みをたてそうな位のぎこちない動きで、顔をシャオンの方に向けた。

シャオンは一步後退った。

ドールクは何も見えていなかった。生気のない瞳は、何も映していないように、混濁していた。

一見して、何がおかしい訳でもない。気を付けて見なければ、ぼんやりしているとしかうつりはしない。

「あの、ドールク様？ エリオン様はご一緒ではないのですか？」

トレエネはそうドールクに訊ねた。

瞬間、ドールクの虚ろな瞳に赤い光が閃いた。同時に腰から剣を抜く。

シャオンは咄嗟にトレエネを背に庇った。

周囲からは悲鳴が上がり、三人の周囲には一気に人がいなくなつた。代わりに、どこからともなく、赤い布を肩から掛けた役人が一人、また一人と現れた。

そのいずれも、赤い色がちらつく目をしている。

シャオンはトレエネを背に庇つたまま、右目を素早く周囲に走らせた。

形勢は断然不利だ。背後からも役人が来ている。ざっと見ても十人以上はいそうだった。

ドールクのほうは相変わらず抜いた剣先を正確にシャオンに向けている。生気のない瞳に不釣合いな殺気が迸っていた。

「シャオン様、これは……」

「妖獣だ、トレエネ。俺が突破口を開くから一気に神殿の中へ駆け込め。いいな、真っ直ぐ中に走るんだ。振り向いたりすんな。ウエ

ルを呼んできてくれ、頼む」

トレーネは大きく頷いた。

シャオンも剣を抜いた。

トレーネは神殿の中に入れば守れるだろう。ウエルはそう言っていた。

つまりこの木偶人形達は神殿の中には入れないのに違いない。だから正門の前で立ち尽くしていたのだ。

だが、何故。ドールクがここにいるのだろう。神殿の中にはいるはずだ。

そして、何故、木偶人形達がトラオではなく神殿にエリオンを追ってきているのか。

シャオンの頭の中で、様々な事が交錯した。

が、考える暇もなく、ドールクの剣が振り下ろされてきた。

十分に鍛えた筋肉を余すところなく使って振り下ろされた剣はかなり重かった。

シャオンがその一太刀を受けて払っただけで、手首に衝撃が来た。昨夜に妖獣につけられた右腕の傷が痺れる。両手で剣を握りなおして、今度は下から、再び振り下ろされてきたドールクの剣を払った。

ドールクがよろめく。

動きは鈍い。

「行け、トレーネ！」

シャオンが叫ぶと同時に、トレーネも駆け出した。

どうやら操られている者達は妖獣という中継を介して動いているので、一瞬反応が遅れるらしかった。

役人達もゆっくりと近付いてくる。

周囲から再び悲鳴が上がった。

ドールクが剣を突いてくる。

払っても払っても、突きは正確にシャオンの心臓を狙っていた。

反応が一瞬遅れていなければ、シャオンは必ず傷を負っていた。

それほど、鋭くかつ素早い突きである。

騒ぎを聞きつけて、神殿の中からも神官と思しき者達が出てきた。役人達も剣を抜く。シャオンはあっという間に周囲を囲まれていた。

## 第五章・聖なる神殿 4

ウエルは、たとえばゲフユールの言い付け通りに別室で休息を取っていた。

グリユックに来てからというもの、ろくに睡眠をとっていなかった。

着いた日は、深夜の訪問者の物音に気付いたシャオンに起こされた。翌日はフェンダーと会って暗殺を依頼されて眠れず、そのまま翌日はグリウスを歩き回った。拳句、ほとんど眠らずに黒い化け物相手に光の聖霊を呼び、疲労したまま地下通路を神殿まで歩いたのだ。そして今また、結界を強めるために、本殿の聖石の間で力を使っただけだ。

食事もそこそこに、ゲフユールに言われるまでもなく、ウエルは深い眠りについていた。

体は泥のように疲れきっていた。

トレーネは真っ直ぐに本殿へと走って行った。

振り向かずに。

急がなければ、シャオンが怪我をしてしまう。怪我ならまだしも取り返しのつかないことになっては大変だ。

事情を知らない人々を掻き分け押しどけて、本殿に入る。

広い場所だった。

高い天井には緻密なガラス細工の飾りが下がり、四方は淡い紫のガラス戸で覆われて外からの光を和らげている。中央に豪華な花の刺繍入りの織物が人々を導き、その先に祭壇がある。

閑寂としていた。

誰も言葉を発せず、静かな呼吸音と、控えめな足音だけが聞こえる肅然とした場。

その中を走って入ってきたトレーネを人々は非難の目で見た。

何処に行けば、ウエルがいるのか、エリオンに会えるのか、トレーネはすっかり気が動転していた。

叫ぶことしかできなかつた。

「エリオン様！」

何度か叫んだ後、後ろから肩を叩かれてトレーネは振り返った。

見慣れたフェンダーの厳つい顔がある。怒ったように太い眉が寄せられていた。

トレーネは太い腕にしがみついた。フェンダーの後ろではエリオンが慥然としていた。

「フェンダー様！ 大変なのです。外に！ 外にドールク様が。シヤオン様が！」

「落ち着きなさい、トレーネ。何の騒ぎだ」

「早く、早く助けて。シヤオン様が、殺されてしまう！」

涙があふれ出て、状況を説明できるような状態ではなかつた。ただ、シヤオンの身の危険を伝えるトレーネに、フェンダーは後方にいたゲフュールに少女を託した。

エリオン達はゲフュールの案内で神殿を見て回っていたところであつた。

ちょうど同時に、正門へ様子を見に行っていた神官の一人が、外で起こっている事件について、神殿を統括するゲフュールへ報告に来た。

「申し上げます。ただいま門の外で斬り合いが。一人は黒髪の男で顔を半分隠しております。もう一人はかなりの剣の使い手で、後はシエバ皇国の役人のようでございます」

エリオンとフェンダー、そして共にいたリグは顔を見合わせた。黒髪で顔を半分隠しているのはシヤオンしかない。

エリオンは改めてゲフュールにトレーネを頼むと、本殿を出ていった。

その姿を見送りながら、溢れる涙を手で拭っていたトレーネはハ

ツとしたように隣にいる老人を振り返った。

「ウエル様は、どちらですか？ ウエル様を、お連れしなければ」  
ようやく応援が向かって、トレーネは冷静さを少し取り戻していた。

ゲフユールは宥めるようにトレーネの癖のある髪をそつと撫ぜた。  
「呼びに参ろう。彼は私が休むように言いつけて、きつと今ぐつすり眠っておるはずじゃから」

剣の打ち合いは互角だった。

いや、ドールクのほうが断然上ではある。多少動きが鈍くなければ、シャオンはとうに斬られていたかもしれない。周囲にいる十人の役人達も、鈍いながら時おり剣を振り下ろしてくるので油断はならなかった。

十人以上を相手にするシャオンは少しずつ押されていく。じりじりと後ろへ下がりが、正門の辺りまで下がっていた。背中が神殿を向いていたので、後ろを危惧しなくていいことだけは幸いであった。

結界の存在が、くしくも背後の守りとなってくれた。

剣を構えたまま、どれ程睨み合った頃だったか。

神殿の本殿のほうから、数人の足音が聞こえてきた。

もちろんシャオンの耳は正確にその人数を把握している。

三人だ。

「シャオン殿！」

フェンダーの声が聞こえる。三人が、シャオンの直ぐ後ろで立ち止まり、息を呑んだのが分かった。

フェンダーとエリオン、リグにも、変わり果てた姿のドールクが目に入ったのだろう。

今、ドールクの瞳には、赤い炎が揺らめいていた。まさしく昨夜見た、黒い化け物の瞳に揺らんでいた光と同じだ。エリオン以外は、それが何を意味するのか直ぐに悟ったはずだ。

「ドールク、何故？」

「何だ、おっさん！ ドールクを何で外に出した！」

剣を構えたまま振り向きもせず、に叫ぶシャオンにエリオンが何事か言いかけたが、どうやらそれをフェンダーは手で制したようだった。

「彼は城へ探索に行ってもらっていた、それが、何故」

「馬鹿野郎！ ウエルが言っていたろうがよ、城にはもう妖獣がいるんだってよおっ！」

エリオンもフェンダーも返す言葉がない様子だった。ただ、成す術もなく、変わり果てたドールクを見るほかに、出来ることは何もなかった。

「ウエルはどうした？」

シャオンは聞いたが返事はなかった。代わりに剣を抜き去る音が二つ聞こえる。

「エリオン様はお下がりに下さい」

シャオンはその一言に、ぎょっとして振り向こうとしたが、すでに遅かった。

ドールクは「エリオン」という言葉に反応していた。すでにシャオンを見てはいない。シャオンの後ろにいるエリオンに視線が固定されていた。

ドールクはゆっくりと足を進めてきた。

それにあわせるように、後ろにずらりと並んでいた役人達も向かってくる。

エリオンに向かって。

「来るな！」

シャオンは咄嗟にドールクへ剣を振り下ろしていた。

脳裏には、昨夜、傷を負った役人を引き受け、痛々しい表情で見下ろしていた彼が甦る。

斬りたくなかった。

でも、そうするしかエリオンを守る術はない。今はエリオンを失

うわけにはいかないからだ。シエバを消した後、この国を守ることが出来るのはエリオンをおいて他にはいないのだから。

いや、ウエルがいる。代わりに、ウエルが王になればシャオンの振り下ろした剣は迷いの分だけ弱く、薙ぎ払われた。もちろんリグには、仲間であるドールクを斬り捨てる事は出来なかったのだろう。ドールクの歩調に合わせてじりじりと下がっていく。フェンダーも。

ドールクの歩みは次第に速くなっていった。

「エ、リ……オ……」

ドールクの口から、苦しげに言葉が出た。声は震え、振り絞ったようだった。眉が痙攣したように動き、苦悶に口が歪んでいる。

足が、神殿の正門を越えた。

瞬間、ドールクが青白い炎に包まれた。

「ぐわっ！」

足元から青白い炎が螺旋を撒くようにドールクを包み込む。

凄まじい勢いで燃え盛っているものの、身にまとう衣服に火の点いている様子はなかった。だが、顔は表情が判別できないほど炎に包まれている。

そこにいた全員が、呆然とその様子を見ていた。

共に正門を入ってきた役人達も、次々と同じように青白い炎に包まれていく。

ドールクはついに剣を取り落とし、苦痛に身悶えていた。

首筋の辺りから、黒い霧のようなものが出て、それも炎に撒かれた。

苦悶の表情を浮かべるドールクが、手をエリオンに差し出す。

「エリオ、ン、様……メ、デス、に……」

そう言い残して、崩れるようにドールクは倒れこんだ。

役人達も、次々と黒い霧を吐き出した後、倒れていく。

「結界、に入ったからか？」

シャオンは剣を収めて、石垣に縋ると、膝をついた。

足は震えていた。

妖獣に操られた者が、神殿の聖なる結界に触れた結果を目の前で見たのだ。生きながら、炎に焼かれていく者達を。しばらく誰も動かなかつた。

白い砂利の上につつぶせに倒れたドールクを包んでいた炎はやがて消え去った。ドールクが焼け焦げたわけでもない。衣服も皮膚も無傷だったが、ドールクは息をしていなかった。

「ドールク！」

我に戻ったリグがドールクに縋った。

フェンダーが、呆然としたまま立ち尽くしている。

エリオンもまた、握ったこぶしを震わせていた。

「聞いたか、フェンダー」

「はい」

「ドールクが命をかけて我らに教えてくれた」

「エリオン殿！」

後ろから、ウエルが駆け寄ってくるのがシャオンには見えた。

安堵感でシャオンはその場にへたり込んだ。

「これは一体どういうことですか？」

ウエルの表情は厳しかった。いつもの温和な口元に浮かぶ笑みはなく、柳眉は寄せられ目は眇められている。口調もいつになく早口だ。

ウエルが怒っている。珍しく、顔に表情があつた。

「何故、ドールクを外に出したのです。城には妖獣がいるとそう申し上げたでしょう！」

「うるさい。貴様にとやかく言われたくない！」

エリオンはウエルに背を向けた。

「ドールクは命をかけて、妖獣の使いの名を告げたのだ」

ウエルは痛々しく白い砂利の上につつ伏せになっているドールクを見下ろした。

「私が、結界を強めたばかりに……」

ウエルの瞳が自らを責めるように閉じられた。ドールクの傍に跪き、そつと掌で髪をなでる。何度かそうしていたが、やがて小さく頭を横に振ると、ウエルは立ち上がった。

エリオンを睨むと、ウエルは踵を返してシャオンの元に来た。

「シャオン、怪我は？」

シャオンは苦笑すると、剣を支えに立ち上がった。腰に力が入らない。

「大丈夫だ。ちょっと、疲れたな。遅かったじゃねえかよ」

「すみません」

ウエルはいつもの微笑をその整った顔に戻した。

「さあ、シャオンも中へ」

シャオンは目を見開いた。一瞬何を聞いたのか、分からなかった。

「どうしました、変な顔をして」

「だって、おれは……」

そう言って白い砂利の上に倒れたドールクに視線を落とす。

「ああ、大丈夫ですよ」

ウエルは言うが早いかシャオンの手首を掴んで引いた。つられて

足が一步正門を越えた。

衝撃にシャオンは瞳を閉じた。

が、何も起こらなかった。

呆けたようにウエルを見上げると、可笑しそうに笑う相棒が目に留まる。

「やはりいらぬ心配をしていたのですね。私がいるのですから、あなたに危害が加わるはずがありません。今まで、何度結界の中で眠ったと思っているのです？ 森の中で結界なしに眠るほど、私も馬鹿じゃありませんからね」

シャオンには言葉がなかった。

安心したのか、そう言う相棒が憎らしかったのか、嬉しいのか、分かるはずもなかった。

瞬間、青白い炎が突如として吹き上げた。

黒い闇を映す鏡を前にしていた男は、衝撃に鏡を取り落とし、椅子ごと後ろに転倒した。

「くっ」

苦痛と無念に怒りが沸き立つ。

「エリオンめ、どんな輩を味方につけた！」

男は共に倒れた椅子から呻き声をあげながら起き上がった。

部屋は薄暗かった。分厚い布が窓から入る光を遮り、熱がこもって蒸し暑い。男もうつすらと額に汗を滲ませていた。

腕で汗を拭う。

少し広い額に、開いているのか判別に困るほどの細い目。黒い髪は長くもないのに無理やり後ろで束ねられている。

男は黒いマントを脱ぐと、それを憎憎しげに無造作に机の上に放り出した。

「メデス、失敗したのか」

突如として地の底から響くような、低い耳障りな声がどこからともなく部屋に木霊した。

メデスはすぐさま床にひれ伏す。

「よい、とどめは我が刺すゆえな」

## 第六章・王城・決戦 1

ウエルは沈黙したまま窓際に立っていた。

ゲフユールの屋敷に用意された客室の二階だ。しばらく前から、窓際に立って下を眺めやっただまま、ずっと動かない。

一方、シャオンは寝台の上に腰かけて床に視線を落とし、膝の上で手を組んだまま、こちらも動かずにいた。

ドールクを失った。

そのことが、シャオンの胸に深く暗い影を落とした。グリウスの王城に攻め入る前に犠牲者が出るなどは夢にも思っていなかったからだ。

見せ付けられた闇の力にも、深い憤りを覚えた。ドールクを操った闇の力は、味方の命を奪っていった。

「なあ、ウエル」

呼びかけてみたが、ウエルは相変わらずシャオンに背を向けたまま窓から外を眺めている。シャオンはしばらく相棒の返事を待って見たが、それは叶いそうにない。ウエルが何を熱心に見ているのかを知りたくなつて寝台から立ち上がった。

ウエルの隣に立って腕を組み、窓から外を眺めた。窓の外では沈みかけた陽が空を焦がしていた。

庭園が見える。

視線を落とすと、無心に剣を振り下ろすフェンダーがいた。

上半身は裸で、鍛え上げられた身体があらわになっている。夕闇の弱い光を受けた汗が光の粒となり、フェンダーの上半身を流れていた。

「さつきからずっと、ああして剣を振っているのです」

ウエルはシャオンが横に並び立ったのと同じに言った。

「悔しいんだよ、おっさん。ドールクは腹心の部下だろ？ リグだつて、ドールクの傍にずっといるらしいぜ」

ウエルは俯いて、珍しく深いため息をついている。

「私がつと、きつくここから出ないように言っておくべきでした。疲れていたなどは、何の言い訳にもなりはしませんね」

「ウエルのせいじゃねえだろうが」

シャオンの言葉に、ウエルは悲しげに瞳を伏せた。そうすると、金の髪が顔を隠してしまつて表情が見えない。

「でも、最後にドールクはしゃべつたぜ。あれはちよつと驚いた」  
空を仰いだシャオンを、今度はウエルが見た。

「そうでしたか。本当に惜しい人を亡くしたのかもしれないね」  
シャオンがウエルを振り返ると、相棒はすぐさま視線をはずしてきた。

「きつと城で捕まつて、無理やり心をこじ開けて闇を植えつけられたのです。だから、彼には闇が支配しきれていない心が残っていたのです。強い精神力を持つ者でない限りあはなりません。だから、最後に自分の意思で話をしたのですよ。そうとしか、考えられませんが」

「それつて、ちよつと、辛い話だな」

「私が、彼を殺したのです」

いつもとは違う低い声に、シャオンは驚いた。

「だから、ウエルのせいじゃねえつて」

「いいえ、私はこの神殿の結界を強いものにした。だから、あんな事が起こつたのです。エリオン殿を守るためにしたことが……いいえ、本当は私の欲望のため……」

ウエルはまた、階下で剣を振るうフェンダーを見下ろしていた。

「欲望、つてお前……」

ウエルは決してシャオンを見ようとはしなかった。まるで顔を隠そうとしているように、ずっと窓の外を見るきりだった。

シャオンはウエルの横に立つのが辛くなって、また寝台のほうに戻った。

ウエルの心が一向に見えなかった。

ドールクのこともそうである。

注意を怠ったからといって、ああも落胆するほどウエルに非があるとは思えない。かといって、エリオンを責め立てる事もできないだろう。エリオンとて、今はグリユックを預かる領主の立場もある。城が気になっても仕方のないことであるうし、第一妖獣の本当の恐ろしさを知っている者が、いま世界に一体どれほどいるというのか。

現実問題として、確かに妖獣の餌食になっている人間はいらしない。

忽然と姿を消した者は後を絶たない。だが、本人の意志をもって失踪した者も含まれる。たまに森の外れなどで白骨が見つかり、餌食になったのだと想像するほかない状況だ。家畜を襲う小物の妖獣以外で、人間がその姿を目にすることはない。目にした者は、すなわち妖獣の餌になってしまふ。生きて二度と、妖獣の姿を人に伝えることなど不可能だ。

シャオンの耳に、またウエルの小さな溜息が聞こえてきた。

「なあ、ウエル。俺にも、その……困った事があるなら話してくれよな」

シャオンにしては小さく控えめな声だった。無論、返事を期待して言ったのではなかった。何も言わないウエルを見ていることが、今日は辛かったのだ。

すべてを抱え込んでいるウエルに、シャオンは少し自分を重ねていた。

シャオンも左の傷をずっと隠してきた。そこに、自らの過去を塗りこめて生きてきたのだ。誰にも頼らず、たった一人で生きてきた。ウエルももしかしたらそうなのではないかと思ったのだ。

シエバ皇帝の侵略によって、たった一人生き延びて、ウエルがどんな思いをしたのかまでは知る由もない。だが、孤独というなら、シャオンにも十分すぎるほど理解できた。

「すみません。大丈夫です。ちょっと毎日追い詰められていて、今、

平常心を保っていないのかもしれない」

ウエルは振り向いて、いつも浮かべる微笑を湛えた顔を見せた。ふと、シャオンはその顔が初めて鬱陶しいものを感じた。

何故、そこで微笑むことができるのか、分からなかった。

ごく自然に、右の眉が釣りあがり、上目遣いにウエルを見た。

「初めて気付いたな、その顔　作り笑い」

ウエルは虚を突かれたように笑みを失い、儼然とシャオンを睨み返した。

「ほれみる。別に俺の前でまで、笑わなくていい……」

言いかけて、シャオンは言葉に詰まった。

「そうだ、な。俺になんか、信用おけないか。俺はシェバの息子だ。誰が何と言ったって、それは変えられねえし、俺にもウエルの仇の血が流れてんだもんよ」

言いながら顔が引き攣つていくのが分かった。ウエルを、もう見ていられなかった。床に再び視線を落とす。

ウエルの薄い微笑が彼の鎧であることに、たったい気付いてしまった。その笑みを自分にまで向けてくることが腹立たしくもあり悲しくもあった。

ウエルが、自分を信じていない、ということではないか。

それがまた、当然と考える自分もいた。

ウエルが身体ごと振り返った。

「私も見損なわれましたね。私が貴方を仇の息子だと思ったことは一度もありませんよ。」

シャオンの力に気付きながら、何故共にいたのだと思います？」

珍しく、ウエルの口調は早く刺々しい響きがあった。

シャオンは恐る恐る顔を上げた。だが、予想に反して、ウエルは微笑んでいた。いつものように、温和でかつ凜とした麗容で、黄金の髪は窓から差し込んできた斜陽を受け眩く光を放っている。

シャオンは目を細めた。

ウエルはシャオンの座る寝台まで来ると、隣に腰掛けた。

「すべてが片付いたら、一緒に賢者塔へ行きませんか？」

今度はシャオンが虚を突かれたように呆然とウエルを見た。

「私はそこで育ったのです。神殿で匿われた後、力を持つことを知ったゲフユール様が、私を隠すためにそうされました。初めはグリウスを去らねばならぬ、その事を怨みもしましたが、そのおかげで、私は貴方に会えた」

ウエルが自分のことを話したのは初めてであった。

「賢者塔を出て、医師として出向いた屋敷で貴方に会った……」

シャオンはただ、口を開けてウエルを見上げていた。

「それにはまず、お金を稼ぎなおしですね、シャオン」

ウエルの言葉で、シャオンはいま無一文であることを思い出した。あんなに金に執着していた自分が、それを忘れていること自体が驚きでもあった。

「本当だ、えらいことを忘れてた。でも、ウエルはエリオンから礼を貰うつて言つてたじゃねえか」

「言えますか？」

シャオンは再び言葉に詰まった。

「言えねえ、な」

二人は同時に含み笑いをした。

「これが済んだら、私達は何かを吹っ切れるような気がするのです。きつと過去、という妖獣から、開放される気がするのです」

「確かに、そうかもしれないな。いいこと言っじゃねえかよ」

シャオンも心の底からそう思えた。

ほんの少し前まで危惧していたことを、すべてウエルの一言が片付けてしまった。

何より、シャオン自身がウエルのことを信じていなかったことに気付かされた。どうして別れが来るなどと考えていたのだろうか。

それでは今までの一年間は、何であったというのだ。

いや、違う。

自分から別れようとしていたのだ。心から必要としてやまない相

棒から。

「よし、気合を入れよう」

シャオンは立ち上がると、近くの机の上に無造作に投げ出されていた剣を手にした。

「ドールクに教わった。あいつの剣の腕はすごかった。ちょっとフエンダーのおっさんに教わってくるわ」

シャオンは剣を目の高さまで持ち上げて笑った。

「そのままでも十分強いじゃありませんか」

「いや、俺のは自己流だからな」

妙に真面目にそう言うと、シャオンは部屋を出た。

ウエルも、シャオンを見送った後、再び窓の外に目をやった。

「近い。私も手遅れにならぬうちに、次の手を打っておくとするか」

ウエルも寝台から立ち上がって、部屋を後にした。

## 第六章・王城・決戦 2

翌朝。

誰もが思いつめた表情で、ゲフュールのふるまう朝食の席についてた。

エリオンと、彼のそばに居たであろうトレーネも。

リグなどは、食事どころではないという塞ぎこみようだった。

シャオンは昨日フェンダーと打ち合って、少し腕の筋肉が軋んでいた。フェンダーの鍛え上げられた剣の腕は、全くシャオンの敵うところではなかった。

「よお、弟子よ」

フェンダーは食堂に来るなり、シャオンの軋む腕を掴んできた。もちろん左を。

「痛てえ、何すんだよ」

シャオンが睨むとフェンダーは朗笑した。

「随分きているな。朝飯を片付けたら、リグと一緒にもう一振りだ。隻眼にしては勘もいい、動きも言うことはない。リグ、いいな」

リグは驚いてフェンダーを見あげた。が、騎士らしく、椅子からきつちりと立ち上がると、短く返事をした。

「よしよし」

シャオンはリグが気の毒にさえなっただが、彼の表情が幾分柔らかくなったのを見て、これもフェンダーなりの気遣いなのだと悟った。頃合を見計らって、ゲフュールが席につき、食事が始まった。

「ウエルは？」

シャオンはウエルが居ないことに不審を抱き、ゲフュールに問うた。

ゲフュールは食べかけていた食事を皿に戻し、一同を見渡してから、まるで、参拝に来る者に説法を説くような厳粛な口調で言った。

「ウエルトス様は、聖石の間に　　ああ……」

ゲフェールは右手を少し上げて皆を制し、「ご心配なさるな。食事はちゃんとお取り頂いた」と、にこやかに付け足した。

「昨晚のうちに斥候代わりに出した聖霊から、知らせが参ったのでな」

エリオンが身を乗り出した。

「まさか？」

「そう、その、まさかでございます。グリユックの東の街道に、数万のシエバ軍が到着した由」

エリオンとフェンダーが顔を見合わせた。

「早いですな」

「謀ったな、あの先触れ。私を油断させるつもりだったのか」

エリオンが拳で机を打った。

「とにかく腹ごしらえだぜ。それからでも遅くはねえだろ？」

シャオンがそう言って、豪快にパンに噛り付いた。

五人はエリオンの部屋で円卓を囲んでいた。

トレーネはすでに無理矢理トラオに返されていた。このままここにいても、彼女には心配する以外にすることはない。それならば自分の家に戻っていたほうが何倍も落ち着くに違いないと、シャオンが言っただからだ。

それにトラオはもう襲われないだろう。少なくともエリオンが神殿にいることは既に敵方・メデスの知るところとなっている。

「聖霊によると、どうも西の街道にはすでにアキロ軍が集結しつつあるようです」

「アキロも存外情報が早い」

エリオンは苛々したように組んだ腕の上で指を動かしていた。

「朝、東の街道に姿を現したということは、皇帝はもうそろそろ入場しているな」

エリオンがウエルを見る。

「出来るだけ夜は避けたかったのですが、朝までは待てそうにありません。このまま夜明けとともにアキロに侵攻されてはシエバの居所が不確実になるばかりです」

「シエバは確かに、地下通路の出口のある部屋に入るのだろうか」

「ほかに皇帝に相応しい部屋がありますか？」

エリオンはむっとしたように目を細めたが、「ない」と、そっぽを向いた。

「もちろん聖霊に協力してもらって確認もしますが、もし、封印された扉の向こうにシエバがいれば、気配で分かりますと思います」

間髪いれずに、フェンダーが身を乗りだしてきた。

「で、ウエル殿。我々がその通路の出口から部屋に躍り出たとして、その後はどうなさる。異変に気付けば、シエバは直ぐに外の兵を呼ぶだろう。時間がかかればかかるだけ、兵の数は増えて、我々は不利になる。それに妖獣がどれほどいるかも知れない。ドールクが言い残したメデスも妖獣だとすれば、なおのことだ。あのような力を使われては、我々には太刀打ちできません」

「闇の力は、心の持ちようひとつで防ぐことが出来ます。心の迷いや隙は、負の力を呼び、それによって幻覚すら見てしまいます。妖獣を恐れすぎれば、相手は実際よりもはるかに恐ろしいものに見えるものです」

ウエルは首から下げている革紐を取り出した。その先端には麻袋がついている。

「さつき、聖石の間から持ってきました。これで神殿の結界をより強力にしました。この余韻は明日までは持つでしょう。ですからこれは持つて使って使うことにしました」

そう言うと、中の物を取り出した。

紫翠の石だった。赤子の握り拳よりわずかに小さいほどの。

エリオンやフェンダー、リグ、シャオンには、ただの珍しい色の石にしか見えない。

「これは聖霊の力のこもった石です。これで、王の間の扉を封印し

ようと思います。ただし」

ウエルは言葉を切つて、四人を見渡した。

「聖霊に願う間、ほんの少し時間が要ります。その間に部屋に入ってくる敵だけは、倒さなくてはなりません」

「そんなにはもちろん化け物もいるってこつたな」

「そうです」

ウエルとシャオンは同時に頷いた。

「エリオン殿」

エリオンは不機嫌そうにウエルを見上げた。

「残られてもよろしいですよ。きつとシエバは貴方を一番に狙うでしょう。エリオン殿が反旗を翻したのを、グリウス城の中にいる者から報告を受けているでしょうからね。神殿ならば朝までは無事ですよ」

エリオンは眉根を寄せてウエルを睨む。

「冗談じゃない。私も行くぞ。私がグリユツクの未来を切り開くのだ。そのための戦いだからな」

フェンダーもリグも、その言葉に頷いていた。

「それから一つお願いがあるのですが」

一同が再びウエルを見た。

「私の剣は妖獣に折られてしまったので……」

その言葉に、直ぐにリグが立ち上がり、一歩前に出た。

「これはドールクの使っていた剣です。共に持つてゆくつもりでしたが、これはウエル様にお預けいたします。少し重く作られていますが、いかかでしょうか」

リグは剣をウエルに手渡した。

どうやら剣はずしりとウエルの手に乗ったようで、彼の腕がわずかに下に重みで圧されたように見えた。

「彼に相応しい戦いが出来るよう、努力いたします」

ウエルがリグを見た。

リグも、どこか寂寥とした面持ちで、それに返した。

グリユツクの空は、その日、暗澹とした雲に覆われていた。

明け方までの空は澄み渡って青く、朝日が人々の家の窓から輝かしく差し込まれ、一日の始まりを告げていた。

それが、午前中、シエバの軍隊が中央街道をグリウス城に向かって進行し始めたところから一転した。

急速に光を遮られ、今にも破裂しそうな水分を重く含んだ雲が厚く空を覆い隠した。

グリウスの中央街道を兵が歩く。

見るものが見れば、その中に人にあらざる者が混じっているのが見えたかもしれない。生気のない瞳に、ぎこちない微笑。土気色の顔色。

それが人の皮を被った妖獣である事に気付いた者はいまい。

シエバは何頭もの馬に引かせた大きな車に居た。

一行がグリウス城に入ったのは、午後も過ぎ夕闇が迫る目前のことであった。

「ようこそ、グリウス城へ」

頬のこけた痩身の男が、黒い外套を目深に被って頭を下げた。

部屋は黒い布で覆われ、微光の侵入すら許さぬ警戒ぶりだ。明かりは入口に灯された炎のみ。それも小さく揺れていた。入り口の辺りを仄かに点す役割しか持たぬ明りは、部屋をさらに漆黒の闇に落とすかのようだった。

闇の中で、シエバ皇帝はいつものように毛足の長い敷物に足を乗せ、錦の織物で作られた豪華な椅子に腰掛けていた。

足をゆったりと組み、腕は肘掛に持たれかかっている。

表情はまるで黒い霧が立ちこめたようにはつきりと目にするこ

が出来ない。

「メデス。して、エリオン殿は？」

シエバの右隣から、低い声がした。

「は、ヤノス様。どうやら神殿におるらしいのですが今は見えません。なにやら聖術を使う者を味方にした様子」

「小僧め」

さらに耳障りな、半分聞き取りにくい声が響いた。

声はすでに人間の声ではなく、声帯の振動が邪魔をして声が二重に被さっているように聞こえる。

シエバの右に立つ男が、皇帝のそばに耳を寄せるかのように近付いた。ヤノスと呼ばれたその男も、黒い布を目深に被り、闇に溶け込んでいる。

「その者は何者かと、聞いておられるが」

ヤノスの低音が問うた。

「はきとはいいたしませぬ。私の見たものは、顔が半分潰れた黒髪の男、それに長い金の髪の男、グリウス將軍としてエリオン殿に付き従って参ったフェンダー、その配下のリグとドールクでございます。ドールクのほうは、私の目にして送り返しましたが、どうやら殺されましたようで」

メデスはさらに深く腰を折った。

「か、顔の左か？」

ようやく聞き取れたその問いに、メデスは「ハイ」と答えた。

「皇帝陛下、確かご子息はマリノワ様をお庇いになり、左目にお怪我を。まさかとは、存じまするが」

ヤノスの言葉に、闇から苦悶の音が漏れ聞こえた。

「皇帝陛下はお疲れた。部屋を用意いたせ、メデス」

メデスは再び腰を折って、部屋を辞した。

ヤノスはメデスが部屋を出てから、黒い被り物をとった。

頭皮に髪はない。瞳は部屋の闇を吸い込みでもしたかのように黒く、また見えているのが不思議なくらい細かった。顎が尖り、頬も

メデス以上にこけている。

一見して異様な風貌だ。

皇帝の右から、正面に回ったヤノスは、片膝を付いた。

「もしも、シャオン様なら何といたしまししょうや」

シエバは、喉の奥でごろごろと唾液を鳴らしたような音を立てた後、ゆっくりと言った。

「捕らえよ。我が血を濃く受け継ぐ子を。我の新しい器にするのだ」  
ヤノスは無表情のまま頭を下げた。

第六章・王城・決戦 3

グリウス城の最上階にある王の間は、もともと警備が厳重な部屋であった。

王の間の最奥が寝室になっており、天蓋つきの豪華な寝台が置かれている。その手前が応接室。人が二十人は囲めそうな机の周りに一つ一つに豪華な彫り物がなされた椅子が十五客おかれていた。ちょうど前グリユック王家の大臣達の数であることは、もうすでに誰の知るところでもない。両脇には、王妃の間と、王家の者専用の居間が設けられている。さらに応接室の手前には空室と、警護の者が詰める部屋がある。

王の間の裏手は断崖になっており、足場もない四階の高さは、人間が上つてこられる高さでもない。

豪華な飾りのついた王の間は、厚い暗幕に被われて闇に包まれていた。

もてなしを受けるわけでもなく、女を侍らせるわけでもない。シエバ皇帝が椅子の上に座し、闇の中にたたずんでいるきりだった。

大きな天蓋の着いた寝台もまた、使用されてはいない。

部屋には、細い筒を口に当てて息をしているかのような、ヒューヒューという呼吸音だけが規則正しく響いていた。

奇妙な静けさではあった。

生き物が呼吸をしているというのに、そこにはまるで存在感がない。

大きな天蓋の着いた寝台の隣には部屋を映す鏡が置かれていたが、それにもまた闇が映るばかりである。

その人の背の高さほどある鏡に映る闇がふいに澱んだ。

刹那、闇を切り裂く勢いで破裂音がした。

鏡は木っ端微塵に粉碎され、仄かな明かりが漏れ出た。

地下通路から、封印を破ったウエルが腕で覆った顔をそっと覗かせた。

「すげえ、音」

後ろから、シャオンも顔を出す。

耳にはまだ炸裂した鏡の碎けた音が木霊して残っていた。

「ちよつと派手すぎんじゃねえの？」

「これでは敵がより多く集まって来てしまつてはないか」

エリオンとシャオンが不満げにウエルに言った。

「仕方ありません。こんな風に封印が解けるなどとは私も思っておりませんでした」

煙のたつ入り口の前で顔を覆っていた腕を口元に当て、ウエルのもう一方の掌の上には紫翠の石が乗せられていた。石はウエルの目だけに微光を放って見えている。

ウエルの後ろで明かりをもっていたフェンダーが、鏡の入口から王の間へと足を踏み入れた。

辺りを見回すと、あつたはずの窓には暗幕が張られ、わざと闇が作られているのが分かる。外はそろそろ日が落ちて、真の闇が訪れようとする時間になってきているだろう。

一同の闇に慣れた目が、すぐさま天蓋つきの寝台の傍に座る黒い塊に気付いた。

同時に、王の間の扉が開かれた。

「陛下、なにやら大きな物音が　！」

頬のこけた毛のない頭皮を持つ男が扉から顔を覗かせ、侵入者に気付いて一瞬息を呑んだのが、シャオンには分かった。

だが、その男の反応を待つまでもない。

シャオンはウエルとフェンダーを押し分けると、剣を抜きながら扉口に立つ男に切りかかった。

駆け出し、男の前で剣を振り下ろす。

が、何の手ごたえもなく剣は床に刺さった。

男はかろうじて剣をかわし、王の間に続く応接室へと逃れた。

「シャオン殿、剣は大降りにせず、必要最低限の動きですぞ！」

フェンダーが叫んで、明かりを左に持ち替えて右で剣を抜いた。

リグもフェンダーに続き、エリオンだけはゆったりと剣を抜きながら、鏡から出た。

ウエルは鏡の前に立ち、石を胸に抱いて瞳を閉じた。

シャオンが駆け出しに行ったので、ウエルは王の間の扉ではなく次の扉、すなわち応接室の扉を封印することにした。

ウエルが応接室の扉を封印する間、体を守るのはエリオンの役目になっている。

フェンダーは部屋に明かりを灯すために用意されていた入口にある燭台に火を灯した。部屋は仄かに明かりを得、中の様子を皆に知らしめた。

「確かに王の間だ」

エリオンの言葉が、一同を寝台近くにあつた黒い塊に目を向けさせた。

「陛下！」

王の間の入口から男が叫ぶ。その後ろにはすでに何人もの役人が集まって来ていた。

黒い塊は微動だにせずに座っていた。

毛足の長い敷物の上に足を無造作に投げ出し、手は肘掛に添えられている。首は前に傾いであり、俯いて下を向いた格好になっている。

饅えた匂いが皆の鼻をついた。

錦の織物の豪華な椅子に座る人間の頭には、もう数本の毛しかない。

土色の粘土をこねて所々に煤色を混ぜたような干からびた皮膚。肘掛に添えられた腕は筋が浮き立ち、潤いも筋肉もすべてを無くした棒切れのように細い。かえって滑らかな布地で出来た白い装束が異様に浮き立って見える。とてもその俯いた顔を持ち上げて見よ

うなどとは思えなかった。そこに現れるであろう顔を想像するだけでも肌が粟立ち全身の毛がそそけ立ちそうだった。

「これが……」

エリオンが構えていた剣をおろして、懐疑的に椅子に掛ける朽ちた人間を見下ろした。そつと顔を覗き込み、短い悲鳴をあげて飛びすさる。

眼窩にはすでに眼球もなく、白い歯だけが目立って並ぶ朽ち果てた顔があった。

「父上？」

エリオンが悲痛な声を発した時、応接の間の扉が大きな音をあげて閉じられた。

「扉は閉じました」

ウエルの声が静かに部屋に響く。

王の間の、二枚の扉が大きく開け放たれた。

頭に毛のない男、ヤノスが、にいつと笑う。

「エリオン様、お久しゅうござるな」

ヤノスの後ろに黒い服をまとった頬のこけた瘦身の男が立つ。短い髪を、無理やり後ろで束ねている。メデスだ。

「メデス、貴様」

エリオンが歩み出た。

「おっと、お待ちを。今は貴方などどうでもよい」

ヤノスはメデスに目配せしながら手を上げた。

メデスは足音もなく後ろに立つ二十人ほどの役人達に顎で合図する。役人達はいずれも人の姿をしていたが生气に乏しく、妖しげな笑みを浮かべている。

「あなただ、シャオン様。まさか生きておいでは思いもしませなんだ。陛下もお喜びでございましょう。ねえ、陛下」

シャオンは床に突き立った剣を抜き去り、ヤノスを睨んだ後、ゆっくり振り返った。

干からびたシェバ王から、低く聞き取り難いくぐもった笑い声が

聞こえてきたからだ。

「ヤノス、シャオンを捕らえよ」

声が引き金になったように、シェバ王の足元から黒い霧が沸き立った。それは生き物のように蔦が這い、螺旋にシェバ王の体に巻きつくように立ち上っていく。

「エリオンを殺れ」

## 第六章・王城・決戦 4

エリオンを

その言葉に、エリオンの中で怒りが暴発した。

前に座る干からびた人間へ、力任せに剣を振り降ろそうと構えなおす。

が、たちどころに黒い霧がエリオンの視界を遮ってきた。

目の前は闇。

エリオンは動揺しそうになる心を抑えて目を閉じ、呼吸を整えた。彫りの深く目鼻立ちのはつきりとした顔が緊張に歪む。

闇に心を奪われた者の負け。

エリオンは心の中で反芻した。ウエルに教わったことだ。要は心の持ちようだと。

剣の柄を握る手に力を込めなおした時、足元で、がさがさと何者かが蠢く物音がした。

鼻の粘膜を刺すような異臭。

エリオンは目を恐る恐る開けた。

目に飛び込んだできたのは、小さな紅い光だった。ガラス玉のように丸く、紅い目。

無数の節足動物に似た足が床を掴んでいた。大人の下肢ほどの長さで大腿部ほどの太さがある。巨大な百足だ。胴は黒く艶があり、触れると黒い液体が糸を引いて手に付きそうである。先端には人間の顔が張り付いていた。

「ひっ」

エリオンの周りに数体いる。

さらに後ろを振り向くと、さっきまで人間の姿をしていた役人達が闇に溶け、次々と百足へと変わっていった。

百足の紅い目が眇められると、口が耳まで裂け、針のように鋭い牙を剥いてきた。どこにどう力を入れたのか、体をよじって飛びつ

いてくる。

慌てて剣でなぎ払った。狂ったように振り回す。薙ぎ払っても薙ぎ払っても、それは向かってきた。体を真つ二つにされようとも、互いに体を求め合う。身の毛のよだつような、ギイツという音を立てて融合していく。

エリオンは頭がおかしくなりそうだった。

剣を振りながら、じりじりと追い詰められた。

不意に背に壁が当たる。

「エリオン様」

絞り出すような声が隣からした。

「リグ！」

隣でリグが片腕に化け物を喰らいつかせながら、向かってくる百足を斬っていた。

ぐしゅっと、肉に刃物が刺さりこむ嫌な音がした。

エリオンは咄嗟に喰らい付いている百足の化け物に掴みかかって引き離れた。リグの腕から鮮血と共に牙が抜ける。

エリオンの手には、タールのごとき黒緑色の粘着質な液体がベツトリと付いていた。

リグはその場で片膝を付いた。声すらたてずに痛みに耐えるリグは賞賛に値する忍耐力の持ち主だ。

「大丈夫か」

エリオンは剣で化け物たちを牽制しながら、リグの肩に手をやった。

「フェンダー様とはぐれました」

リグがかすれた声で言う。

「私もだ」

フェンダーは百足の妖獣を追い払いながら、王の間から応接の間へ移動していた。

もちろん辺りは吸い込まれそうな深い闇に包まれている。王の間の入口と、応接の間の入口にある仄かな明かりだけが、闇を照らすのみだ。

目の前には痩せた男が立ちはだかっていた。

「メデス、よくもドールクを妖獣の手先に使ってくれたな」

剣を向けられてもメデスは怯む様子もなく、また表情一つ変えずに、笑った。

「フェンダー将軍。あなたは闇に落ちなかった。ドールクも」

メデスは喉の奥を震わせてクククと笑う。

「ドールクは抵抗した、だが、私の力には抗えなかった。血反吐を吐き、身悶えながら、あの男は私の手先となり働いたのだ」

フェンダーは剣を握りなおした。

太い腕についた筋肉が力を込められ盛り上がる。

フェンダーは太い声と共に、剣を横に払った。

メデスの体が呆気なく二つに切り裂かれ、裂けた隙間から闇が覗いた。

やったと思ったのは一瞬だった。

切り裂かれた上体が倒れざまにフェンダーの足に噛み付いたのである。

フェンダーの左足に、骨を打ち砕かれたかのような激痛が走った。衝撃で噛み付かれたまま倒れこむ。

一瞬のことに反応が遅れたフェンダーが足元に目を落とすと、そこには半分に斬られたままのメデスが、細く紅い目を見開いて下からフェンダーを睨め付けていた。

ざわざわという音と共に、メデスの体から無数の節足が湧き出てくる。

元々ついていた上腕も肩と肘を直角に曲げて体を支えていた。

下半身からも同じ足が無数に生えると、股関節と膝を直角に曲げ、すべての足を使ってざわざわという音を立てながら上半身に向かってきた。歩きながら、まどっていた衣服は脱げ、変わりに黒い肌が

あらわになる。

ついに、真つ二つになった体はキイという音と共に融合した。さすがのフェンダーも目の前に繰り広げられる異様な光景に息を呑んだ。

最前線にいた時には、おもに後方で指揮を取っていた。最前線にいる敵国の兵達がシエバの放った妖獣とどう戦っていたのかは、実際のところほとんど目にしていない。ただ、戦いの後で、バラバラになった人間の体を食らう異形のものを目にしたくらいだった。その異形も、狼か鷲などの動物の顔が人間で体が獣だとか、鱗があるとかの程度だった。

噛み付かれた足に、二度目の激痛が走る。

噛み付いた口に力を込めたらしい。

全身がしびれた。

「痛がるう？ 直ぐに楽にしてやろう」

噛み付いたままだというのに、どこからともなくメデスの声があった。

闇に負けてはならない。

フェンダーはそう心で呟いた。

上体を起こし、両腕で剣を握りなおす。

剣を振り上げ、力いっぱい足に噛み付く妖獣の頭に振り下ろした。

「シャオン様」

ヤノスは再びシャオンに呼びかけた。

シエバを振り返っていたシャオンが、ヤノスを睨む。

「おお、確かに、シエバ様のお子様の気配。闇の力を見出すことができる」

ヤノスはゆっくりとシャオンに近付いてきた。

「あの時、私の爪にかかって左目を抉り、もう生きてはいまいと思っていた。マリノワを庇うなど、愚かなこと」

シュツ。一瞬、風が二人の間を駆け抜けた。

「それ以上彼に近寄ることは許しません」

いつの間にか、ウエルがシャオンのそばに立っていた。

ウエルはドールクの、普通よりは長く重い剣を抜き払った。それを椅子に座ったままのシェバの体に突きつける。

「引きなさい。刺しますよ」

ウエルの顔には、当然ながら笑みはない。

整った美貌の青年の瞳は燃えるように揺らぎ、真っ直ぐにヤノスを見る。その顔は凄艶で、冷酷ですらあった。

左手には紫翠の石が握られている。指の間から聖なる紫翠の輝きが漏れ出で、ウエルの石を握る手までが透けて光を帯びている。

「その石は」

ヤノスは眩しそうに、己が額に手を翳した。

ウエルがシェバに突き出した剣に力を込めようとした。

が、ヤノスが一瞬早く、飛んだ。

同時にシェバが立ち上がった。ミシミシという崩れそうな音を立てながら。

シャオンはヤノスの爪を、ウエルはシェバの放った黒い蔭をそれぞれ剣で受けていた。

## 第六章・王城・決戦 5

「くそ、お前だったのか」

暗紫色の長い爪を剣で受け止めながら、間近に迫ったヤノスの顔を睨んだ。

強い力で剣を押される。

細い切れ長な目から、わずかに覗く漆黒の瞳が閃いた。

ヤノスの口元から、小枝を折ったようなメキ、メキ、という音がする。

突如、顔の半分が裂けて口に化け、中からもう一つの小さな顔が覗いた。

ヤノスと同じ細い目を持つ、瓜二つの顔だった。それが、裂け目から瞬きする間もなく飛び出してきた。鋭い歯が並んだ小さな口を猛烈な勢いで開き、剣を握る右腕に噛み付いた。

「ちいつ」

シャオンは直ぐに、左手でヤノスの口の中から出てきた小さな頭を掴んで、力を込めて引きちぎった。

それはずるりと、ヤノスの口から抜け落ちて、黒い塵になって消える。

ヤノスの顔は、すでに人間のものではなかった。

体はそのままなのに、顔は大きな蝦蟇がまのように変わっている。

無数のいぼのついた緑の顔には、蝦蟇の大きな口と、細い黒い瞳がある。

シャオンは間をおかずに剣を袈裟懸けに振り下ろした。

ヤノスは甲高く笑いながら、後ろに跳び退った。

「大人しくなされ。そしてそれ、シエバ様に体を差し出すがよい。

お前が新しいシエバ王となるのだ」

シャオンは剣を握りなおした。

「誰が貴様の戯言など聞くもんか。ここで闇に帰りやがれ」

「ほおつ。ではこの女の言うことなら聞くか、どれ、会いたかろう」  
ヤノスの姿は、言葉の途中で闇に溶けた。  
はっとして足を踏み出したシャオンだったが、目の前に現れた新たな影に足を止めた。

女だった。

髪は黒く艶がある。少し癖のある髪はゆるく巻きながら、腰の辺りまで伸びている。振り向いた女の黒い瞳は濡れたように婀娜めいていた。

シャオンと年の変わらぬ美女だった。

女は懐かしむように小首を傾げ、微笑を向けた。手を、シャオンに向かって伸ばしてくる。

「やめろ、何のまねだ」

口元のほくろが、女が唇を軽く吊り上げると同じく艶かしく持ち上がった。

両手は真っ直ぐにシャオンに向けられる。

ゆっくりとした動作で、足が一步前に出た。

「来るな」

幻影だと分っている。分つていても、剣を向けることが出来なかった。足は床に縫い止められたかのように動かなかった。体は石のように固くなっていた。喉は焼け付き、声を出すのも躊躇われるほどに痛んだ。心臓がわしずかみにされ、抉られるような痛みが鼓動と共に全身を貫いた。

遠い記憶の中の、一番大切な人だ。でも、その人は死んだのだ。

自分を抱いて、真っ赤に血に染まりながら。殺された。

「母上……やめてくれ」

シャオンの声は懇願するように震えていた。

女はシャオンに寄り添うように近付き、シャオンの肩に手を乗せてきた。

体は強張ったように動かず、女に抗うことは出来ない。

女の腕は、肩からするりとシャオンの背に回って抱き寄せてきた。

「シャオン、逃げましょう。陛下は人間ではありません。さあ、逃げて」

女が喋った、その声に重ねて、シャオンには耳障りな音が聞こえていた。

まるで美しい音楽に、砂嵐のような連続した雑音が混じっているかのように、低い残響が声に重なって聞こえる。

シャオンはくしくも、その異常な聴力によって救われたのだ。母上は死んだのだ。

言い聞かせながら、剣を握る腕に力を込め、真横から叩き込んだ。肉を切り裂く手ごたえがある。

ぐはっ！

目の前には蝦蟇がいた。

横腹にシャオンの剣が突き立っていた。

鳶は剣に巻きついていていた。

ウエル目の前でゆっくりと立ち上がったシェバが、眼球を失った漆黒の闇の覗く眼窩で、ぎよろっと見据えたように感じられた。

剣は鳶に捕らわれたまま微動だにしない。

ウエルはミイラのように干からびた姿で立っているシェバと睨み合った。

闇を背にまとい、同じ黒なのに眼窩の奥の闇はさらに深く見える。

「お前は誰だ」

耳の奥を撫で上げるような不快な声だ。

「私の名を聞いてどうする」

シェバは喉の奥で唾液を転がすような音をまじえて低い声で笑った。

「大体、想像はつく。その気配は、我が喰らった金の髪の子と酷似している」

喰った？

ウエルはその言葉に目を見開いた。後頭部を殴られたような衝撃だった。

自身がグリウス城から逃れたあと、父と母がどういう末路を辿ったのかを知る由もなかった。

父と母は、力を持っていた。

無論、聖なる力だ。母は聖霊の姿が見える程度だったが、父王は聖霊に火を灯させることくらいはできたと記憶している。

妖獣は聖なる力を持つものを喰らうと、妖力と生命力を増すことができると言われていた。

ウエルは今まで、自らの感情に蓋をするよう、幼い頃から努力してきた。そうすることで過去の悲しみに耐えて生きてきた。が、深いところから湧き上がる怒りを、この時ばかりは抑えることができなかった。

生れて初めて覚えた殺意かもしれない。

ウエルは力を込め、我を忘れて剣を振り払った。

絡まっていた蔦は霧散するように消えた。間髪をおかずに剣を突き出し、続けて袈裟懸けに振り下ろした。

手応えはない。

「そのように人間の作ったもので我が斬れると思うのか」

シエバの顔には表情もない。声に抑揚もない。

それがかえってウエルに冷静さを取り戻させていた。左手に握り締めていた紫翠の石を目の前に翳して、口の端を持ち上げた。

「人の手によらぬものならば、斬ることができような」

ウエルはゆっくりと息を吐いた。

石を剣の根元にあて、剣の刃に滑らすように触れさせた。石が移動した刃には、その軌跡が刻まれたかのように、紫翠の輝きがあった。

剣が紫翠の光をまとう。

シエバは顎を引き、ぎこちない動きで、一歩足を後ろに引いた。

ウエルは駆け出し、シエバ目掛けて剣を突き出す。

が、シエバの体から黒い蔦が四本延びてきた。二本は剣に触れ、蛍光を発して消滅した。

もう二本は真っ直ぐウエルの体を横手から打ち付けてきた。凄まじい力で弾き飛ばされる。

ウエルは天蓋つきの寝台の上に投げ飛ばされた。

寝台の柔らかな寝具が受け止めたせいで衝撃は和らいたが、ウエルの体は寝台の向こう側へと転がりおちた。

床に落下して右半身を打ち付ける。衝撃で、紫翠の石が左手から転げ落ちた。

ウエルは慌ててそれを拾おうとして体を起こした。

が、一步、紫翠の石の手前で、腕に激痛がはしった。

鮮血が迸る。

ウエルの左腕を黒い蔦が掠めたのである。膝をつき、右に持っていた剣で支えはしたものの、次に襲ってきた黒い蔦を、かわすことはできなかった。

蔦はウエルの右足をも貫いた。

刺し貫かれた反動で、崩れるように倒れこむ。

大きな寝台がウエルの体を隠しはしたものの、シエバの気配は向こう側に確実に存在していた。

激痛に唇をかみ締めながら、ウエルは必死で心を落ち着けようとした。

焦ってはならない。

心を落ち着けて、聖霊に加勢を依頼しなくては。

石に宿る光の聖霊は応接の間の封印に使ってしまった。それを呼び戻せば、封印が解けて扉が開き、さらに役人をこの部屋に招き入れることになってしまう。

闇に光を呼ぶことは、大変な力が要る。夜に太陽を昇らせるようなものだ。ウエルにはその精神力を維持する自信がなかった。

ふと、風が、頬を撫でていく。

窓はすべて閉じられ、暗幕がかけられているので外から風が入っ

てくることはないはずだ。

風は次第に勢力を増し、ウエルの周囲を竜巻のように覆い始めた。聖なる力を、ウエルは確かに感じた。ふわり、と体が軽くなる。

その気配は間違うはずもない、紫翠の石に宿る力だった。握った剣にも、力が漲る。

ウエルは剣を握り締めて立ち上がり、痛む右足を引きずって歩いた。

同時にずるり、と何かを引きずる音がウエルの耳に届く。

寝台から覗くと、シエバの体が、ぎこちない動きでこちら側に回ってこようとしていた。

その時。

「ウエル！」

シャオンが剣を構えて駆け寄ってきた。

シエバの体に体当たりする。

体はまるで乾燥した粘土細工が脆くも崩れ落ちるように粉碎した。剣を握り締めたシャオンが、不敵に笑っている。

「えれえ、怪我してんじゃんかよ」

ウエルもつられて笑った。

二人が気を許したその瞬間だった。

粉碎したはずの体の辺りに黒い霧が立ち込め、黒い触手が湧き出ると、その一本がシャオンを貫いた。

「シャオン！」

シャオンの脇腹を突き抜けた触手は、素早く黒い塊の中に戻った。腹を押さえて膝をついたシャオンの後ろに、蝦蟇の顔をした妖怪が音もなく立つ。腹を割かれたままの、蝦蟇の姿に変わったヤノスだ。

細く黒い瞳が、シャオンを見下ろした。

「あの程度で、我らを倒したつもりでいてもらっては困るのよ」  
蝦蟇・ヤノスは、暗紫色の鋭い爪を振りかざした。

ウエルは急いで痛みを堪えて歩き、転がっていた紫翠の石を拾って握り締めると、それを蝦蟇に向かって投げつけた。石が蝦蟇の額に、吸い込まれるようにして当たる。

ヤノスが断末魔の叫び声を上げた。

紫翠の石は極光を発して、蝦蟇の額にめり込み、青白い炎が発火して体を包み込んでいった。まとわりつくように、命を与えられたかのような炎が、蝦蟇の体を焼き尽くしていく。

「この、炎は結界の中のと、同じ……」

腹を押さえた手の隙間から鮮血が流れ落ちる。

シャオンは、膝をついたまま脇腹を抱えて、ゆるゆると後ろを見た。

一方、黒い塊は青白い炎がまるで見えているかのように眩しそうに身を振ったかと思われたが、すぐに触手をウエルのほうへと向けてきた。

ウエルは両腕で剣を握り締め、瞳を閉じた。

紫翠の色を帯びた風が一旦ウエルの周りに集結し、四散する。風は太刀風となり、体を失ったシエバに襲い掛かった。

風が黒い塊から次々と伸びる触手を切り裂き、霧となって霧散させていく。

シャオンは膝をつきながら、シエバが風に切り刻まれる音を聞いていた。

蝦蟇が炎に焼かれ、黒い塊と化した後、そこには紫翠の石が落ちていた。

今はシャオンにも、その石が放つ光が眩しく見えている。

シャオンは脇腹を襲う痛みを堪えて床を這いながら、その石の元に行こうとしていた。

床の上で光を放つ石にそっと血にまみれた手を伸ばす。

鮮烈な光は、シャオンの右目を焼いてしまうのではないかというほどの輝きだ。

触れると、手はジジツという音を立てて焼け付いた。

「あつっ」

猛烈に発熱する石を、それでもシャオンは掴んだ。

手が焼け焦げるような音と匂いがする。

「ああああっ！」

声にならない叫び声を上げながら、シャオンは石を投げた。

## 第六章・王城・決戦 6

エリオンは、リグを庇いながら、一向に減らない百足達を斬っていた。

斬っても斬っても再生する百足に、エリオンはひどく疲労していた。肩で大きく息をつき、顔は青ざめ、額からは汗が滴っている。

リグの百足に噛まれた腕は紫色に変色し、牙の刺さった痕は黒くなっている。

「大丈夫か」

荒い息の下でエリオンはリグに問うた。

「もう腕の感覚がありません。それにしても、これは」

そう言っつて、足もとに来たムカデの妖獣に剣を突き立て、床に縫いとめる。妖獣はグフェツという聞きたくもない声を出して、剣に串刺しにされたまま、無数の足を無秩序に動かした。

仄暗い空間では、視界にも限界がある。

その時、王の間から紫翠の閃光が閃いた。

それはやがて青白い光となっていく。

足元を見ると、光に照らされた百足だけが黒い塵になって吹き飛ばされていた。

「そうか、光だ、リグ」

「わかりました」

エリオンとリグは黒い塵に変貌していく百足達を踏みつけながら、窓に駆け出した。

一方、応接の間の入口に追い詰められ、足を食われたフェンダーは、メデスの頭に剣を突き立てたまま動けずにいた。

頭を床に縫いとめられたメデス・巨大なムカデの妖獣は、足をばたつかせながらもがいているが、フェンダーが剣の柄を握ったまま

抜かないので、動きようがないらしい。

細く黒い瞳に、時おり紅い光が閃き、フェンダーをねめつける。手を伸ばしてフェンダーを掻きむしろうとしているが、それも届かない。

と、フェンダーはもたれかかっていた背中の扉が、淡く紫翠に光るのを見た。

光は徐々に色を濃くし、強くなる。

比例して、メデスの動きがやんできた。

驚いて、扉とメデスを見比べていると、妖獣メデスのほうは、やがて動きを止め、色が黒く変色し、霧のように消え立っていくではないか。

「フェンダー閣下！」

フェンダーは聞き覚えのある声に顔を上げた。

「リグ！」

「今、暗幕を取ります」

リグは応接の間に隣接している、王妃の間と、王族の居間の暗幕を引きちぎった。暗紫色に変色した腕を抱えながら戻ると、自分の上着を脱ぎ、入口に唯一燃えていた小さな炎で火をつけ、それを暗幕に投げつけた。

炎は一気に燃え上がり、応接の間を明るくした。

そこに見たものは、無数の百足の妖獣だった。

しかし、扉に灯った紫翠の光は衰えず、百足どもは黒い塵に変わり、炎によつて焼かれていった。焦げた臭いが、饅えた臭いに混じって漂い始めた。黒煙が、部屋に充満する。

リグは慌てて窓を開け放った。

「立てますか、閣下」

リグはフェンダーに肩を貸した。

「お前は大丈夫か？ エリオン様は？」

「エリオン様は、シャオン様とウエル様を」

フェンダーはそれ以上何も言わずに頷くと、リグの肩に掴まった

まま、全く言うことを聞かなくなった足を引きずりながら歩いた。

エリオンもまた、百足を踏み越しながら王の間に戻った。

そこは焼け焦げた匂いと、うずくまるシャオン、剣を構えたまま激しい風に巻かれるウエル、そして切り刻まれている黒い塊があった。

黒い塊からはいくつもの触手が伸びているが、激しい風がそれを切り、その度に黒い塵が舞い上がる。

エリオンは横目でその光景を見ながら、暗幕に手を伸ばした。

ウエル側にある暗幕は二枚。エリオンのほうにも二枚。

エリオン側のそれを一気にはがした。

だが、窓の外は真っ暗で、月明かりもない。

「なんだ！」

エリオンは愕然とした。

すぐさま踵を返し、応接の間に駆け込む。

そこにはリグに肩を借りたフェンダーがいた。応接の間はすでに炎に巻かれている。

その炎の明かりが王の間にも入ってきた。

ウエルが炎に気付く。

その顔に、あの薄い微笑が戻った。

剣を逆手に持ち替え床に突き立てると、胸の前で手を組む。手の中には、紫翠に輝く石があった。鮮烈な光を発する石に、応接の間から新たに同じ紫翠の光が軌跡を残しながらなだれ込んできた。

光。

炎。

風。

三つが一つになる。

エリオンも、リグも、フェンダーも、それを見ることは叶わなかった。

あまりに激しく、光は閃光し散光した。

地の底から鳴り響く、体の臓腑を震わせるような不快な音が聞こえた。グリウス城が倒壊するのではないかと思われるほどの、揺れが起こった。

長く。

低く。

静かになった時には、王の間には何もなかった。

燃え盛っていた炎も消えていた。

応接の間の扉が荒々しく開かれる。

警護の衛兵と、身なりのよい男達が入ってきて、口々に何かを叫んでいた。

「エリオン様！ フェンダー閣下！」

聞き覚えのある叫び声で、二人は顔を上げた。

激しい光の残像が、直ぐには視力を回復させない。

応接の間は焼け爛れ、焦げた匂いと煙が充満している。

「お前は……」

「ゼギユウスにございます。内政大臣の」

「ああ……」

エリオンは気のない返答をすると、無能呼ばわりしていた大臣の顔を見上げた。

「父、シエバは急死した。ああ、そう、医師を呼べ。詳しいことは皆の手当てをしてからだ、よいな」

ゼギユウスは短く返答すると、言われたように手配した。

王の間に目をやると、そこには黒髪の男が一人血まみれで倒れている。

奥には、目を見張るような黄金の長い髪の下に人が倒れていた。その前に、大きく煤けた黒い染みが出来ている。

エリオンは、二人の肩がゆっくりと上下しているのを見て息をついた。

第七章・明日への啓示 1

グリウスに朝が来た。

人々は早朝から商売のための用意をし、中央街道は夜明けと共に人の声が飛び交い始める。気の早い芸人達も、客寄せのための場所を誰よりも早く確保し、天幕を張りはじめた。

旅亭トラオにも、いつものように朝が来た。

日が昇るのと同時に、宿泊客の朝食の用意が始まる。

治世十五年の祭り期間も、もうじきに終わる。そうすれば連日満室のこの忙しさからも開放されるだろう。

トレーネは息をついた。

食堂の椅子の一つに座ったまま、とうとう夜を明かした。

使用人達が厨で仕事を始めた。その音を聞いて、トラオの玄関の扉を開けてみる。

日中からのあの暗い雲は、もうどこにもなかった。空は澄み渡って青く、遠く山裾は朝日が燃えて赤い。

「朝、が来た」

トレーネは急いで扉を閉めると、古参の使用人のもとへと駆け出した。

胸がちくちくと痛んだ。

急がなければ。

行かなければ。

その思いだけが、トレーネの胸の中を占拠している。

昨日の暗澹とした雲は、グリウスを通ったシェバ軍が通った時から発生した。

それこそがウェルが言っていた妖獣の力の証に違いない。

だが、今朝は晴れている。雲は消えた。

逸る心を抑えながら、仕事を使用人達に指図すると、トレーネは身一つでトラオを飛び出した。

神殿でトレエネを温かく迎えてくれたのはゲフユールだった。

「神官長様。エリオン様は？ 何かご連絡はありましたか」

必死の形相で駆け込んできたトレエネを、ゲフユールは何も言わずに、まずは自分の居室に招き入れた。

「まあ、お掛けなさい」

ゲフユールはトレエネを椅子に座らせると、自ら温かな飲み物を入れて持ってきた。

トレエネはとても座ってなどいられなかった。

エリオンが怪我をしなかったか。本懐を遂げたのか。

そして、シャオン、ウエルがどうなったのか。

父親のようなフェンダーや、リグは。

「ゲフユール様」

ゲフユールは急ぐトレエネに飲み物を勧めると、自らも口を付けた。

「まだ詳しいことは分らないのだ。私とて、早く知りたいがな。だが、ウエルトス様の聖霊の使いが参って、皆が無事であることは告げていった」

「本当ですか！」

トレエネの瞳が瞬時に涙で潤んだ。

肩を落とし、よかったと呟く少女に、ゲフユールは再び飲み物を勧めた。

## 第七章・明日への啓示 2

柔らかな感触が、肌に触れていた。

滑らかで極上の絹の敷物が、少しひんやりとされていて心地よい。

このままずっとこの心地よさに浸っていたい。

そう思っただけを丸めて寝返りを打った。

「イ……！」

激痛に目が覚めた。

目は覚めたが、瞳は開けられなかった。腸をつかまれたようなねじけた痛みが、足の先と脳天を突き抜けたのだ。

さらに腹を押さえようとした左の掌が、じりりと痛んだ。

「大丈夫ですか、シャオン」

抑揚のない声が耳に届く。

額に汗が浮かんだ。痛みはそれほどに激しい。

「ウエル？」

寝台の横に座る相棒が目にとまった。

すけるように白い顔に、今度はシャオンが驚く。

ウエルの顔は真っ青だった。唇にも色が無い。ただ、いつも浮かべている微笑だけが同じなだけで、生気が無いといっても過言ではないほどだ。今すぐに消え去りそうな、霊体のように存在感がない。

「お、ま……その顔、大丈夫かよ」

そう言ってから、改めて自分が豪華な寝台に横たわっているのに気付いた。上を見上げると天蓋がついている。大きな窓からは青空が覗き、壁には絵画が飾られ、寝台の隣の小さな机には花が置かれている。明かりを灯す燭台にすら、シャオンには無用とも思える緻密な装飾がある。

「どこ、どこ？」

それを聞いて、ウエルが薄く笑った。

「グリウス城です。覚えていませんか？」

シャオンは目を剥いた。

はつきり言つて、あの蝦蟇蛙のようなやつに剣を突き立ててからの記憶が、異状に曖昧なのだ。

「シエバを仕留めました。シャオンのおかげです。あなたが身を挺してこの石を投げてくれなかったら、私達はもう死んでいました」  
ウエルが右手を見せた。紫翠の石だ。

シャオンは痛む左手を目の前に翳した。

「これか、それで、この手は焼けてんだな」

必死だったのであまり記憶にはない。ただ、焼け付くように熱い石をつかんだことは鮮明な記憶として残っていた。

「闇の力でつけられた傷はほぼ浄化できたと思います」

シャオンが目を剥いたままなので、ウエルがまた微笑んだ。

「シエバに、腹に風穴を開けられたのですよ。もう少しそれでしたら、命はありませんでした。それにその傷は闇の力でつけられたのです。きちんと浄化しておかないと、そこから腐ってきます。シャオンの左目も、誰かがそうしてくれたからそれで済んでいるのでしよう？」

「いや、わからねえよ。目の怪我の時は、長い間熱で意識がなかったって聞いているし。」

そうか、あの人はちゃんとしてくれたんだ」

「あの人？」

シャオンは懐かしむように目を細めた。

「俺を助けてくれた人。盗賊だったけど、いい人だった。おかげで俺はウエルに会えたしな」

普段なら絶対口にしそうにない言葉をさらりと言って、シャオンは目を閉じた。

そのまま、意識は再び深い闇に落ちていった。

次に気付いた時、また同じように青空が見えた。体をよじつても、痛みはあるが激痛と言うには大袈裟なほどに軽減している。

ふと思いついて、左の手を見た。

まだ白い布が巻かれてはいるが、こちらは本当に痛みがない。そっと布を外してみると、手はわずかに引き攣れを残していた。

ゆっくりと体を起こしてみる。

異常なほどの喉の渴きを覚えた。

部屋は無意味に広くて、今横たわる寝台のほかにも、それほど客が来ないだろうと思われるほどの幅の広い長椅子が四つもあり、部屋に置くこともないだろうと思われる石像まである。

誰もいなかった。

ここで叫んでも、誰も来ないような気がした。

隣の部屋まで声は届くだろうか、などと無用なことを考えていると、遠くから足音が一つ聞こえてきて、程なくして扉が開いた。

「エリオン」

「気付いたのか」

そう言うと、エリオンはまた部屋の外に出た。なにやらそこから指示を与えているような声がして、エリオンは手に水差しを持ってやって来た。

「気付いたようなので医師を呼んでおいた。どうだ、気分は？」

あれほど自分を毛嫌いしていたエリオンの態度が妙に優しいので、シャオンは思わず身構えた。

そのことに気付いたらしく、エリオンは珍しく微笑んで、言った。そうして笑っていると、華やかさを持つ彫の深い整った顔立ちは、ウエルにも負けないくらい気品があつて綺麗に見えた。

「礼を言う。おかげでシエバ王は倒せた。グリウス城は、なんだか明るくなった。無能だとばかり思っていた大臣達も、よく働いてくれている」

照れたように水差しを隣の机に置くと、飲むかと尋ねて水を入れてくれる。

シャオンが水を飲む間も、エリオンは至極穏やかに隣に座っていた。

「俺は何日くらい眠っていた？」

「三日たった」

「フェンダーやリグはどうした？ ウエルは？」

「フェンダーは妖獣に左足を喰い付かれて、かなり重症だ。リグは右手をやられた。だがウエル殿がきちんと傷を浄化してくれたらしい、医師たちも彼の手腕に舌を巻いていた。二人とも順調に回復している」

「そうか、よかった」

あれは夢ではなかったのだ。初めて目覚めたとき、隣にウエルはいた。自分の傷も見してくれたのだ。

そう思って、シャオンは冷水を浴びたように全身から血の気が引いた。

その時のウエルの顔を思い出して。あの血の気のない真っ青な顔だ。

「ウエルは、どうした？」

早口に聞くシャオンに、エリオンは言い難そうに、間をおいた。

シャオンはエリオンの次の言葉を待てずに体を起こし、腹部が痛んで思わず二つ折りになった。

「無理をするからだ。別に死んだと言っている訳ではなかるうに」

シャオンはエリオンをしつかり睨んだが、痛みのせいか少しも凄みはなかった。

「ウエル殿は眠っている。夜が明けて、その日の夜半までお前のそばに居たのだが……そこで意識を失ったらしい。死んだように動かないが、ちゃんと息はしているからな」

「よかった」

心底安心したように息をつくシャオンを見て、エリオンは羨まし

そくに目を細めた。

「おかしな二人だな。お前達は。だが、助けられた。本当に礼を言う。我々だけであれば、シエバが城に入る前に、もう私は死んでいたろうな」

「別に、礼なんか言われたかないよ。俺もウエルも、仇をとったんだ。お前のためにやったんじゃねえからな」

また体を横たえながら、シャオンはエリオンから視線をはずした。シャオンの左側に座るエリオンからは、横たわってあらわになった顔の傷が痛々しく見えた。

目は完全に潰され、変色した皮膚は引き攣れている。

エリオンは目を逸らさずに、じっとそれを見ていた。

「すまない」

それは小さな声だった。

シャオンは耳を疑って振り返った。左側の視野が狭いので、そうしなければエリオンが見えない。

そこには悄然としたエリオンがいた。

いつも堂々と、自治領主の威厳を失わなかったのに。

「なんだよ」

シャオンの不機嫌そうな声が耳に届いたのか、エリオンは姿勢を正して話し出した。

「私とお前は、確か年は変わらなかったな。兄上達はお前のことをいつも妖獣だと言って蔑んでいた。母親も違うし、私も兄上達と同じようにいつもお前を睨んでいたように記憶しているのだ。噂では、皇帝が跡継ぎはシャオンだと公言して憚らなかったと聞く。お前が死んだと聞いた時、兄上達は笑っていた。私も正直、妖獣の弟がいなくなつてホツとしたのを覚えている」

「そんな事は聞きたくないね」

「いや待ってくれ。そうではない。そんな話ではないのだ。お前はこれからどうするのだ？ 国に戻るつもりなら、私が兄上達にちゃんと説明する。これから私を助けてくれると言うのなら、グリウス

に留まってくれればいい。フェンダーもそう言っていた」

シャオンはあまりに突拍子もないことに、驚いて開いた口が塞がらなかった。

「ウエル殿も、あの英知を捨てておくのはもったいない。正当なグリウスの後継者なのだから、これも兄上に進言して、王としてグリウスにいてもらうつもりだ」

「ちよつとまてよ」

一人で勝手に決め付けたように話を進めるエリオンに、シャオンは無然と口を曲げた。

「こつも掌を返したような態度をとられると、どう対処してよいのか分からなくなってしまう。」

「どういふ心境の変化だよ、それ」

「別に、気が変わったわけではない。お前の事を好きになつたわけでもない。だが、お前とウエル殿が息をしているのを見た時、私は心底ほつとしたのだ。それだけだ」

エリオンは真摯な顔つきで、シャオンから目を逸らさずに言った。シャオンは思わず苦笑した。

グリウスに残る？ 国に帰る？

そんな事は思ってもみなかった。国、とは、一体どこをさすのか、もうシャオンにはどうでもいいことだった。今更シエバ本国に戻つた所で、居場所などあるはずもない。

「あのな、俺は国に戻るつもりもないし、自分のことを王子だとも思つてねえ。第一そんな性分でもねえよ。堅苦しいことは大っ嫌いだしな」

「だが、グリウスを救つたのはお前達ではないか」

「だから、関係ねえって言ってるじゃねえか」

「なにが」

エリオンが不機嫌そうに、口をゆがめた。

シャオンは笑いながら付け加えた。

「俺達は傷が治つたらさっさと消えるわ」

## 第七章・明日への啓示 3

翌日、シャオンは歩けるようになった。

エリオンはあれ以来シャオンの元を訪問してこなかった。

アキロを攻めるはずだった兵達にも説明しなくてはならないだろうし、アキロとの外交問題もある。シャオンは後で聞いたのだが、アキロにはシエバが消えた翌日早々に使者が立って、何とか穏便に事が済んだらしい。もちろんアキロも無用な戦闘を避け、自国を守れたのであるから異論もなかったであろう。

エリオンは今頃、他にも関所の取締りやら、治安の維持などで忙殺されているはずだ。

大臣たちは、というと、今までどうやらメデスの闇の力によって一種の無気力な状態に陥っていたらしい。本人達も、記憶が曖昧ではっきりしないという。

シャオンはその話をフェンダーから聞いて、ますます闇の妖力の恐ろしさを実感することになった。

フェンダーも杖で自由に歩けるまでに回復している。ひそかに剣を振っているという噂だ。

ただ、ウエルは目覚めなかった。

死体のように横たわったまま、身じろぎ一つしない。

枕元には紫翠の石が置かれていた。

シャオンはその隣で、じっとウエルが目覚めるのを待った。歩けるようになってさらに三日が過ぎていた。

シャオンは死人のように横たわるウエルの長いまつげを見ていた。女のように、長く綺麗なまつげだ。

これが女だったら、グリウスの男どもがほってはおかないだろうなど、不謹慎なことを考えていた時だった。

ウエルのまつげが動いた。

「ウエル！ 気が付いたのか！」

耳元でそれだけ叫べば、どんな病人も目が覚めるのではないかというくらいの声だった。現に隣室に控えていた侍従が飛び込んできたくらいだ。

ウエルはゆっくりと目を開けた。

瞳は初め、何も映していないかのように焦点が合っていないかった。徐々に青い瞳に生氣が戻る。

待っていた瞬間が訪れた。

ウエルが、いつものものあるのかないのか判然としない微かな笑を口元に湛える。

「そんな大きな声を出さなくても聞こえます」

シャオンは右目を見開いたまま口をまるで空気を貪る魚のように動かした。

「どれほど、眠っていましたか？」

「七日だ」

いかにも不機嫌というふうには、声を荒げて返事を返す。

「シャオンの怪我は」

「おかげさんで、どうも」

「フェンダー殿やリグは？」

「はいはい、どうも」

「それはよかった」

そう言っただけで瞳を閉じてしまう。

「おら、寝るんじゃないやねえ、帰るぞ。いつまでもここにいちゃあ、悪いぜ」

ウエルは瞳を閉じたまま、小さく頷いた。

「そうですね。ここには思い出がすぎます。私には少し辛いからです」

ウエルの端正な顔が別段動いたわけでもなかったが、その言葉がシャオンには重かった。喉元が焼けるように痛く、何かが痞えたように遣り切れない思いがこみ上げてくる。すっかりその事を失念していた自分の愚かさを呪いたかった。

「何か欲しいものはねえか？ 喉が渴いた、とかよ」

ウエルはうつすらと瞳を開けた。わずかばかり顔をシャオンに向けて、至極真面目にこう言った。

「トレーネが飲ませてくれた、あの果实酒がいいです」

シャオンはあまりの返答に声も出なかった。

程なくシャオンとウエルは神殿に戻る事になった。

エリオンが再び姿を見せたのは、二人が神殿に戻る前日の事だった。

「引き止めたって無駄だぞ」

「分かっている」

シャオンの言葉にエリオンは憤然として寝台の近くにある長椅子に腰をかけた。

ウエルはまだ寝台に横になったままだ。シャオンは一日のほとんどもをウエルの部屋で過ごしている。

「なんと言っていていいか分からない。本当に感謝している。ウエル殿、本来ならグリユックは貴方に返さねばならぬのに」

「いいえ」

ウエルは間をおかずに返答した。晴れやかな表情は、どこか何かを吹っ切ったような、そんなウエルの心中を映し出しているかのようだ。

「私はそのような器にはありません。それよりも、もっと世界を見てみたいのです。私の知らない、広い世界があるような気がします。そこに、私を本当に必要としている場所が、あるかもしれません」

淡淡とした語りだったが、それは新しい何かを求めるウエルの決意だったのかもしれない。シャオンはそう感じた。

シャオンがそうであるように。  
心にわだかまっていたものが、風船が萎んでいくように消えていった。

妖獣に見せられた母、マリノアの姿が今も臉に焼き付いている。十五年ぶりに見た、父、シエバ皇帝は、すでに干からびた化け物だった。

それらはすべて、彼方に消えてゆくようであった。

ウエルも笑っている。こんな明るい笑みを見たのは初めてだ。

「ウエル殿。グリユックは必ず再建してみせる。本国の兄も、きつとシエバ帝国を立て直す、無論私も全力を尽くしたい」

「期待しています」

エリオンはシャオンが見ても眩しいくらいの姿で堂々と立ち上がった。厳然たる姿は人の上に立つ度量を感じさせた。

エリオンの差し出した手を、ウエルも取った。

そのまま、エリオンはシャオンを振り返った。

「いつでも戻ってきて欲しい。それまでに、グリウスを、素晴らしい都にしてみせる。グリユックをヨウーワ大陸で一番の国にしてみせよう。故郷というに相應しい所に、な」

故郷という言葉が、シャオンには希望のように思われた。

神殿に戻る当日、フェンダーもリグも、シャオンを引きとめようとしたが、フェンダーは結局こう言ってシャオンを送り出してくれた。

「いつでも来い。私のすべてを、教えてやるからな」

さらに無精で生やしたようなひげが濃くなったフェンダーは親指を立てて不敵に笑った。

「みな、私達の心配をしてくれていますね」

神殿に向かう馬車の中で、まだ辛そうに背を揺れる車体に預けるウエルが言う。

「余計な心配だな。俺達は何も変わりはない。そうだろ？」

ウエルはそれに微笑みで返した。

神殿に着くと、涙でぐしょぐしょになったトレーネと、穏やかな

表情のゲフェールに迎えられた。

神殿の庭園での、久しぶりの再会であった。

「ウエル様、シャオン様、お帰りなさい」

そう言つて、トレーネは懐から一枚の布を取り出した。シャオンの髪の色と同じ、それよりもやや淡い黒であった。

「様はだめだ、つて言つたらうが」

トレーネはシャオンの腕をつかんで引つ張った。

「屈んでください、シャオン様」

「だから」

ふわりとシャオンの前髪が持ち上げられた。左の傷があらわになつて、シャオンは慌ててそれを隠そうと手を出した。

そこに、トレーネの取り出した布が、巻かれた。眼帯の役割を果たすその布は、シャオンの髪に紛れて上手く左の痛々しい傷を隠してくれる。

「よかつた、ぴったりで！」

トレーネは嬉しそうに手を合わせた。

シャオンは耳まで赤くなっていた。

「これは良いですね、シャオン」

そつと傷に手を当てる。巻かれた布にトレーネのぬくもりが残っているように思われた。

帰る場所を、シャオンは見つけたような気がした。

生れて初めて得た場所だ。

今まで帰る場所などなかった。

シエバ帝国も、その後さすらつた長い時間も。

グリウスには、仲間がいる。

何より、そして誰より、シャオンはウエルという友人を得た。得がたい絆を結ぶ事ができた。

ウエルがあるかないかわずかな笑みを湛えている。しかしそれはもう作り笑いではない。

傷の癒えたウエルとシャオンは、グリウスを後にした。  
行き先は決まっていらない。

「金もたんともらったしな」

「旅の友も頂きましたよ」

「とも？」

ウエルは背に担いだ袋から、ビンを一本取り出した。

「お前！ 酒、貰ったのかよ」

「いけませんか？」

「いけませんか、つてお前……」

「いいじゃありませんか。さあ、何か仕事を探しましょう」

「金もらったのに、仕事すんのかよ。でもま、妖獣退治はしばらく遠慮しとくわ」

「おや、何故です？」

「おまえ、やんのかよ」

「別に、いいですよ」

ウエルは胸元に手を当てた。

心地よい風が吹く。

シャオンは真っ直ぐに空を見上げた。

もう気にしなくてもいい。

傷を隠す必要を感じなかったからだ。

グリウスの章 了

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5319d/>

---

幻妖帝国～グリウスの章・青き黎明の灯火

2009年3月24日10時38分発行